平成２８年度指定

スーパーグローバルハイスクール

研究報告書

第４年次

令和２年３月

宮城県気仙沼高等学校

発刊にあたって

本校の「海を素材とするグローバルリテラシー育成 ～東日本大震災を乗り越える人材をめざして～ 」を，研究開発課題にとして取り組んできたスーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）事業は，文部科学省の指定から４年目を迎え，ここにその報告をさせていただきます。

本校は，東日本大震災の被災とそこからの復旧・復興への取組の中で地域を活性化し，日本人として21世紀をよりよく生きるためには，地域の資源や地域への思いを携えて，世界を舞台に活躍できる人材の育成が必要との考えに至り，本事業の指定とともにさまざまな取組を進めて参りました。

本校がこの研究開発を進める上で「世界を舞台に活躍する人材」とは，①気仙沼の豊かな海の恵みを活用して海を活かす人材（世界の中で地域を活かす思考力豊かな人材），②海でつながる人材（海を通したグローバルな視点を持って異文化を理解し，他者と協働できるコミュニケーション力豊かな人材），③海と生きる人材（東日本大震災の経験を活かして社会に貢献し，海との共生による持続可能な社会の実現を求め，行動力豊かに未来に生きる人材）と定義いたしました。

また，具体的なグローバル人材像は，「グローバル視野を持って地域を考え，グローバルな観点から未来の社会像を創造し，その実現に向けて果敢に行動するスケールの大きな復興の担い手」と捉え，その人材に必要な資質・能力を「グローバルリテラシー」と名付け，あらゆる教育活動を通じて育成しています。グローバルリテラシーは，「基礎的・基本的な知識技能」，「思考力」，「コミュニケーション力」，「多様性・協働性・行動力」の４つに分類して育成しています。

「知識技能」の育成では，習得・活用・探究の学習活動に分けて各教科の知識技能を身に付けるとともに，アクティブラーニングをはじめとする学ぶ方法の工夫，課題研究活動と教科学習との連動性を重視しています。「思考力」の育成では，あらゆる学習において，根拠や原因を求め，分らないことを自ら調べ考えて，わかる喜びを得ること，比較分析することを重視しています。「コミュニケーション力」の育成では，基礎となる語学力，傾聴力と発信力，ＩＣＴ活用力，情報活用力を重視し，特に自分の考えを説得力豊かに表現することを大切にしています。そして，「多様性・協働性・行動力」では，志を自らつくり，その実現のための行動を開始し，持続可能な社会の実現を追求する姿勢，対話的に学ぶ態度の育成を目指しています。

指定から５年目を迎えようとする今，ユネスコスクールとして地域をあげてＥＳＤを実践し，持続可能な開発目標・ＳＤＧｓの達成にも貢献できるよう研究開発をさらに進めて行く覚悟です。

おわりに，運営指導委員の皆様，気仙沼市及び気仙沼市教育委員会の皆様，連携大学の先生方，ＮＰＯ法人底上げ及び一般社団法人まるオフィスの皆様，地元企業等の地域の方々，関係団体や関係各位のご協力とご支援，そして，宮城県教育委員会のご指導に心から感謝申し上げますとともに，さらなる充実に向けて忌憚のないご意見とご助言をお願い申し上げ，発刊にあたっての挨拶といたします。

令和２年３月

宮城県気仙沼高等学校長　狩野 秀明

目次

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １

目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２

令和元年度研究報告【全体】
令和元年度ＳＧＨ研究開発完了報告書（別紙様式３）・・・・・・ ７
目標設定シート（別紙様式７）・・・・・・・・・・・・・・・・・ １６
令和元年度の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １８

１　課題研究活動
１　学校設定科目「地域社会研究」・・・・・・・・・・・・・・・ ３１
２　学校設定科目「課題研究Ⅰ」・・・・・・・・・・・・・・・・ ４３
３　学校設定科目「課題研究Ⅱ」・・・・・・・・・・・・・・・・ ５９

２　授業改善
１　主体的・対話的で深い学びを目指す授業改善・・・・・・・・ ７１
２　スモールステップ表の活用・・・・・・・・・・・・・・・・・ ７３
３　授業改善の体制づくり・教員研修・・・・・・・・・・・・・・ ７３
４　ＰＢＬ型授業法の研究・実践・・・・・・・・・・・・・・・・ ７５
５　教科での観点別評価法による指導と評価の一体化の研究・実践 ７７
６　課題研究とのリンクを図る教科指導 ８２
７　授業評価・学習実態調査による授業改善・・・・・・・・・・ ８３
８　ＩＣＴ教育・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ８４
９　先進校視察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ８５

３　英語教育
１　英語科の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ９３
２　英語コンテスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ９３
３　ＧＴＥＣの推進・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ９４
４　英語図書の充実・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ９６

４　国際理解
１　台湾研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １０１
２　C-Cube・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １０１
３　コカ・コーラ英語コミュニケーションスキル研修プログラム
OJT プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １０３

５　志教育
１　１年生「総合的な探究の時間」・・・・・・・・・・・・・・ １０７
２　２年生「総合的な学習の時間」・・・・・・・・・・・・・・ １０９
３　３年生「総合的な学習の時間」・・・・・・・・・・・・・・ １１１
４　３年間を見通した進路指導・・・・・・・・・・・・・・・・ １１４
５　類型選択指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １１５
６　ボランティア関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １１５
７　読書啓発指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １１７

６　地域連携
　１　観光客へのアンケート実施にともなう調査員としての協力・　１２１
　２　気仙沼の高校生マイプロジェクトアワードへの参加・・・・　１２１
　３　リトルティーチャー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１２１
　４　条南中学校におけるポスター作成支援・進路講話・・・・・　１２２
　５　プログラミング教室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１２２
　６　海洋教育こどもサミット・・・・・・・・・・・・・・・・・　１２３
　７　気仙沼市防災フォーラム・・・・・・・・・・・・・・・・・　１２３
　８　教職員の連携・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１２３
　９　フィールドワーク・アドバイザーの委嘱・・・・・・・・・・　１２３

７　国内交流
　１　ＳＧＨにかかわる連携・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１２７
　２　震災交流・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１２８

８　防災教育
　１　春季防災訓練・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３１
　２　職員防災研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３１
　３　秋季防災訓練・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３２
　４　秋季防災訓練の振り返り・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３３
　５　生徒防災組織の活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３３
　６　生活防災委員の活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３４
　７　救命講習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３５
　８「みやぎ防災副読本」の活用・・・・・・・・・・・・・・・・　１３５
　９　外部組織との連携について・・・・・・・・・・・・・・・・　１３５
　１０　地域連携の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３５

関係資料
　運営指導委員会記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３９
　ＳＧＨ通信（２１号～２８号)・・・・・・・・・・・・・・・・　１４３
　令和元年度教育課程表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１５１

気仙沼高校
SGH事業

地域起点のグローバル・リーダーを育成

地域を超えたリーダーを育成

地域のリーダーを育成

協働型学習プログラム

東日本大震災復興プログラム

3学年

2学年

1学年

授業改善（8小事業）	英語教育（4小事業）	国際交流（5小事業）	（創造類型）課研Ⅱ／教科選出（8名）	（3学年全員）総学　志教育／3学年教員	（創造類型）課研Ⅰ／教科選出（8名）	（2学年全員）総学　志教育／2学年教員	（1学年全員）地域社会研究／1学年教員＋他学年選出	（1学年全員）総学　志教育／1学年教員	防災教育（4小事業）	地域連携（4小事業）	国内交流（3小事業）
全教員	英語科教員	英語科教員中心							全教員	事業主中心	事業主中心

大学

企業

NPO

地域組織

保護者

スモールステップアプローチ

ダイレクトラーニングアプローチ

教員専門性開発アプローチ

一事業一事業主制　　課題・改善表

全教科・全職員　研究企画部

令和元年度研究報告【全体】

研究開発完了報告書

目標設定シート

令和元年度の成果と課題

（別紙様式３）

令和２年３月３１日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　宮城県仙台市青葉区本町三丁目８－１
管理機関名　　宮城県教育委員会
代表者名　　教育長　伊　東　　昭　代　印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間
　平成３１年４月１日～令和２年３月３１日

２　指定校名
　学校名　　宮城県気仙沼高等学校
　学校長名　　狩野　秀明

３　研究開発名
　海を素材とするグローバルリテラシー育成～東日本大震災を乗り越える人材をめざして～

４　研究開発概要
　協働型学習プログラムでは，１学年学校設定科目「地域社会研究」，２学年学校設定科目「課題研究Ⅰ（創造類型）」と総合的な学習の時間「学問領域課題研究（人文・理数類型）」，３学年学校設定科目「課題研究Ⅱ（創造類型）」を実施した。「課題研究Ⅱ」では担当教員８名のうち３名を英語科教員とし，英語による発表スキルの向上と論文作成に取り組んだ。東日本大震災復興プログラムにおける「防災教育」では，生徒主体の避難訓練・避難所設営や防災手帳の作成，宮城県教育委員会作成の防災副読本を活用した各教科における防災学習の実施計画の作成と，教科横断的なＡＬ型防災学習に取り組んだ。「志教育」ではマスタープランに基づいた探求的な進路学習に取り組み，３学年では高校での学びを振り返り「学びの設計図」を作成させることで，高校卒業後も学び続ける意識の向上を図った。

５　管理機関の取組・支援実績
（１）実施日程

NO	業務項目	実施日程											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①	運営指導委員会							○			○		
②	指定校との打合せ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③	非常勤職員（海外交流アドバイザー）の雇用	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④	SSH，他 SGH 指定校等との連携							○	○	○	○	○	○

（2）実績の説明

①　運営指導委員会

運営指導委員については，昨年度からの継続で４名の委員にお願いした。

第１回運営指導委員会を１０月２５日（金）に実施。２学年創造類型「課題研究Ⅰ」中間発表会・３学年「課題研究Ⅱ」最終発表会を参観していただき，各学年の１年次からの変容を見ていただいた。委員会では，上半期の活動報告と４年目の事業計画の説明，台湾研修計画の説明を行い，出席した３名の委員から指導・助言を得た。

第２回運営指導委員会は１月２５日（土）に実施。昨年度同様，地域社会研究・課題研究Ⅰの最終発表会参観の上，１０月以降の事業報告及び事業評価を説明し，出席した３名の委員から指導・助言を得た。

②　指定校との打合せ

昨年度からの継続で，フィールドワークや課題研究発表会等，様々なイベントがスムーズに企画運営できるよう，大学や関係諸機関と綿密な連携を図りながら事業を進めた。

管理機関としては，本事業が教育課程の研究開発を主旨としていることから，評価方法の改善，気仙沼高等学校がねらいとする資質・能力の育成を目指した授業実践に取り組むよう助言した。

③海外交流アドバイザー（非常勤職員）雇用

海外交流アドバイザーは，台湾研修にかかる現地高校や大学の連絡調整，現地との交流コーディネートなどの業務に当たるとともに，プレゼンテーション講座等の生徒への直接指導範囲を広げた。

④　ＳＳＨ，他ＳＧＨ指定校等との連携

ＳＧＨ指定校である気仙沼高校の全体発表会，ＳＳＨ指定校である仙台第三高校のＧＳフェスタなどの開催に関する指導・助言及び運営支援を行った。また，気仙沼高校がＳＧＨ全国高校生フォーラムへ参加するにあたり，主催者側との連絡調整などを行った（東北地区ＳＧＨ課題研究発表会フォーラムは中止）。今後も，気仙沼高校におけるＳＧＨ課題研究の進捗状況を勘案しながら，具体的な調整を行っていく予定である。

６　研究開発の実績

（1）実施日程

NO	業務項目	実施日程											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①	教育課程の研究	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②	課題研究活動	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③	志教育	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④	授業改善の企画・実践	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤	英語教育	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑥	国際交流		○	○	○	○	○	○	○	○			
⑦	防災教育	○		○	○		○	○	○	○	○		○
⑧	地域連携活動		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑨	国内交流		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑩	成果の普及			○	○		○	○	○	○	○	○	○
⑪	事業全体の評価に関する事項		○	○		○		○		○	○	○	○
⑫	第４年次報告書									○	○	○	○

（2）実績の説明

①　教育課程の研究

・指定を受けた平成２８年度より，「協働型学習プログラム」を学校設定科目，「東日本大震災復興プログラム」を総合的な学習の時間における志教育とＡＬ型防災学習を中心に実施した。

・課題研究を学校設定科目，防災教育・志教育を総合的な学習の時間で実施することにより，２つのプログラムでねらいとした「グローバルリテラシーの育成」と「社会貢献意欲と学び続ける意欲を兼ね備えた復興の担い手育成」を計画的かつ効果的に進めることができた。

②　課題研究活動

イ　学校設定科目「地域社会研究」１学年全員　１単位

・水曜日６校時に配置。総合的な探究の時間（水曜日７校時）や土曜授業日を活用し，全６５時間実施。

・担当教員は１学年所属１４名に他学年所属４名を加えた１８名。

・海を素材として「海と産業」「海と人間」「海と防災」「海の文化」「三陸の自然」の５領域を設定。５月にガイダンス，地域理解講座，６月にテクニカル講座（研究スキル習得）を実施し，７月から８月にかけて研究班を決定し研究テーマを決定。９月の研究計画書作成，１０月のフィールドワークⅠ，１１月の中間発表会（スライド発表），１２月のフィールドワークⅡを経て１月に全体発表会（ポスター発表）を実施。２月に論文を作成。

・領域ごとに大学の教員をアドバイザーとして依頼し，フィールドワークや中間発表会に加えメールでも指導・助言をいただいた。

ロ　学校設定科目「課題研究Ⅰ」２学年（創造類型１クラス）　２単位

・火曜日６校時，金曜日７校時に配置。総合的な学習の時間（火曜日７校時）や土曜授業を活用し，全８３時間実施。

・担当教員は国語科１名・数学科１名・社会科２名・英語科１名・理科２名・保健体育科１名の８名。

・個人研究とし，１年次の地域課題からグローバル課題へと発展しやすいようにＳＤＧｓ１７目標と関連したテーマを設定。ＳＤＧｓの目標ごとにゼミを作り上記８名の教員が担当した。

・４月には１年次の振り返りと思考ツールを学ぶ講座を実施，５月フィールドワークⅠ，６月テーマ発表会，７月フィールドワークⅡ，１０月中間発表会（スライド発表），１２月台湾研修及びフィールドワークⅢを経て１月に全体発表会（ポスター発表）を実施。２月に論文を作成。

ハ　学校設定科目「課題研究Ⅱ」３学年（創造類型１クラス）　１単位

・木曜日６校時に配置。総合的な学習の時間（木曜日７校時）を活用し，全３６時間で実施。

・担当教員は国語科１名・数学科１名・社会科１名・理科１名・情報科１名・英語科３名の８名。

・４月に２年次の研究内容を見直し「課題研究Ⅰ」の論文を修正，５月から英語論文の作成を開始した。６月からは論文作成と併せて各種コンテストに研究成果を応募する準備を進めた。９月からは英語のポスター作成を行い，１０月に最終発表会を開催。１１月から英語論文の修正を行い１月までに論文を完成させた。

ニ　総合的な学習の時間「学問分野別課題研究」（２学年人文・理数類型）」　１７時間／５０時間

・担当教員は２学年人文類型（３クラス）・理数類型（２クラス）の正・副担任。

・将来の進路を見据え，１年次より研究テーマの自由度を拡大。生徒個々の興味関心に応じた研究を行わせることにより研究活動をとおして大学での学びや将来のビジョンを描くきっかけとした。

・グループ研究を原則としたが個人研究も可とし，アンケートで分野ごとにグループを分け，担当教員を配置。

・５月に仮テーマを設定させ研究計画書を作成。夏季休業中には課題研究読書レポートを課し，９月から本格的に研究活動を実施。１０月に分野ごとの発表会，１１月の全体発表会では各分野の代表がスライドによる口頭発表を行った。

ホ　探究型学習センターの充実

・「地域社会研究」「課題研究Ⅰ」「課題研究Ⅱ」で作成した３年間のスライドやポスターをデータベース化し，先行研究検索の効率化を図った。

・イ～ニの探究型学習を進めるための客観的な情報を入手するためにＳＧＨ指定初年度より，ＣＡＳＡの導入や朝日新聞，読売新聞，河北新報の三紙の新聞記事検索サービスを導入。生徒の利用率も年次進行で増加した。
・課題研究の参考となる書籍を２８年度より計画的に購入。英語教育に関する書籍の充実に努めた。特に３学年は，入学から卒業まで書籍の貸出数が多い学年であった。

３学年	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	技術	産業	芸術	言語	文学
H29	２６	５５	２８	１７８	１１０	５８	６５	５９	５７	４７３
H30	５８	１２５	７５	２７０	２６５	２０５	３５	１３８	８１	８０７
R1	３７	７１	６０	３０４	１８６	１６０	４１	１４４	７２	５３９

③　志教育
・総合的な学習の時間において「志教育マスタープラン」に沿った３年間を見通した体系的な学習を実践した。
・１学年では「社会の一員としてどう生きるかを考える」をテーマとして，職業探求や３４名の社会人を講師としたキャリアセミナーを実施し，将来の生き方を構想する「１０年後の私」を作成した。
・２学年では「『志望』進路を思い描く」をテーマとして，１年次の学びを振り返り，進路希望に関連する学問領域についての「課題研究」，進路希望別のガイダンスを実施し，「志望理由書」と「学びの中間報告書」を作成した。
・３学年では「『強い志』を持って前進する」をテーマに，２年間の学びを振り返り，社会問題を中心としたディベート，進路希望別のガイダンスなどを実施し，３年間のまとめとなる「学びの報告書」と「学びの設計図」を作成させることにより高校卒業後も学び続ける志を高めた。
④　授業改善の企画・実践
イ　授業改善
・統合２年目の今年度は，４月に「授業ヒント集」の活用方法などの授業の進め方とＳＧＨ事業内容を全職員対象の研修で確認。昨年度に引き続き授業改善の重点を「単元指導計画」に置いて研究授業を実施した。また「主体的・対話的で深い学びのための授業改善」をテーマに「授業力向上プログラム」を計画し，月２回平均で研究授業を実施した。１０月には，岩手県立盛岡第三高等学校から２名の先生を講師として招き，職員研修会を実施した。
・ＰＢＬ指導法については，７月と９月に東北大学大学院の酒井聡樹准教授を講師として「地域社会研究」「課題研究Ⅰ・Ⅱ」など年間を通した課題研究活動の指導力向上をねらいとした研修会を実施。この研修会には市内小中高の教員も参加した。１月には課題研究におけるルーブリック表を用いたパフォーマンス評価の精度を高めるために，昨年度までに生徒が作成したポスターや論文を用いて評価に関する研修会を実施した。
・生徒による学校評価では「学ぶ意欲を高める授業が実施されている」の項目で「そう思う・大体そう思う」と回答した生徒の割合は1年生８８．７%，２年生８４．４%（1年次８５．５%），３年生８６．２%（2年次８０．７%）と生徒全体を通して高率となった。同評価「授業以外の学習時間を確保している」の項目では１年生７２．１%（前年度１年生６８．１%），２年生は５９．５%（1年次６８．１%），３年生は８２．５%（2年次７２．７%）となった。１年生は増加の傾向，３年生は高率で安定しているが，２年生の減少が目立つ。
・生徒による授業評価では，設問ごとに４，３，１，０点で点数化した５教科平均値で「授業における教師の説明は分かりやすかった」(H27:2.92→H28:3.19→H29:3.23→H30:3.24→R1:3.20)，「板書や配付資料が授業に役立った」(H27:3.07→H28:3.28→H29:3.30→H30:3.33→R1:3.34)という結果となった。３点を超える平均値は，継続的授業改善の成果と捉えているが，項目によっては評価を下げたものもあった。
ロ　学習評価法の研究・企画・実践
・教科における学習評価では，今年度も観点別評価を実施。定期考査における観点別作問が定着し，パフォーマンステストや授業プリントを中心とした「思考・判断」「関心・意欲・態度」の評価精度も向上している。そのことにより「知識・理解・技能」に偏らない３観点のバランスが取れたコンピテンシーを意識した評価ができ

ているものと捉えている。

⑤　英語教育

・昨年度に引き続き，英語科教員の指導力向上及び小中高の連携促進を目的に，東北学院大学と連携した研修会を実施した。講師として文学部教育学科教授である村野井仁氏を招き，市内の小中学校の先生方に参加いただきながら，気仙沼高校英語科教員による研究授業の後に『主体的な学びを促す領域統合型の英語指導－リスニング指導を中心に－』をテーマとした研修会を行った。村野井氏からは，自律的な英語学習者を育てるためのストラテジーや，主体的な学びを促すリスニング指導の具体的な進め方について御指導いただき，参加者からは「高校の授業を実際に見て，小中でどのような授業が求められるか，改めて考えるきっかけになった」「中学校でも導入可能な指導内容で大変参考になった」といった感想が寄せられた。

・アウトプット能力の育成・伸長を図るため，各学年ともパフォーマンステストを年間３回以上実施した。１学年では英語による自己紹介に始まり，主張・理由根拠・支持・結論の構成を意識したエッセイライティング，イラストに基づくインタビューテストなどを実施した。２学年では，教員の質問に答えるインタビューテスト，イラスト内の人物描写，実際に起こりうるシチュエーションでの英会話，与えられたテーマに対する意見文の作成などを実施した。３学年では，与えられた英文の要約や，自分の好きなものについて紹介する Show and Tell などを実施した。

・キャリア・異文化理解・創造性の３つを軸に英語力強化を目指すプログラム「C-cube」を，本校英語科教員全員で分担しながら展開した。Career course では，各学年担当者が生徒の資格取得に向けて外部試験対策指導を行った。Cross-cultural course では，気仙沼市在住の海外出身者を講師に招いての講座，ＡＬＴとの会話練習，スカイプを通じた外国人学生との交流などの機会を提供し，異文化交流・異文化理解を促進した。Creation course では，創造性の伸長と成果物の発表を目的に英語コンテストを開催し，１年生がクラス対抗暗唱コンテストに，２年生がテーマ選択型のプレゼンテーションコンテストにそれぞれ参加した。

⑥　国際交流

・今年度から「課題研究Ｉ」と関連した台湾研修を２学年創造類型全員（３７名）で実施した。また，ＮＰＯ法人等による海外研修には「TOMODACHI サマー2019」４名，「夏の充実留学 2020」（iTTTi ジャパン主催）１名，「海外ホームステイプログラム in カナダ」（Support Our Kids 実行委員会主催）１名が参加した。海外研修参加者計は４３名である。

・前記「C-cube」の異文化理解講座はアメリカやオーストラリア出身の外国人講師を招き全５回実施。内容も充実し生徒も多数参加した。

・６月にはイエール大学の学生２名が気仙沼高校を訪問し，１，２年生と交流を図った。

・１２月には市役所の地域づくり推進課で設置している「気仙沼市小さな国際大使館」と連携し，市内在住の６か国８名の外国人を講師として国際理解セミナーを実施。研究活動に必要な情報収集に大いに役立った。

⑦　防災教育

・生徒主体の避難訓練・避難所設営や防災手帳の作成及び，宮城県教育委員会作成の防災副読本を活用した各教科における防災学習実践計画の作成により，教科横断的なＡＬ型防災学習に取り組んだ。

・防災を研究テーマにしている生徒が，気仙沼市防災フォーラムに参加し，研究成果を広く発信した。

⑧　地域連携

・課題研究における市内のフィールドワーク先が年々増加。ＳＧＨの取組が地域で浸透してきている。

・学校独自で委嘱しているフィールドワークアドバイザー２名による相談会を年間８回，特に５月～７月では５回実施し，相談内容についても共有を図るなど，アクティブな研究活動の展開につながった。

・「観光」や「街づくり」をテーマに研究を進めている生徒が，気仙沼市の観光課が実施する観光客へのアンケート実施に伴う調査員として協力。調査活動を行うことで得られた貴重な情報を研究に反映させた。

・気仙沼市が主催する「気仙沼の高校生マイプロジェクトアワード」には１０名を超える生徒が参加。課題研究の成果を実践という形で生かすことのできるイベントであり，伴走者（市内在住の若者）とともに街づくりを中心

としたアクションプランを実践した。また，生徒３名が「マイプロジェクト全国 Summit」に東北地区代表として参加した。

・「海洋教育子どもサミットｉｎひろの」に２学年２名が参加。海に関する研究成果の発表を行った。

・昨年度から継続して，九条小学校と条南中学校との連携で志教育に取り組んだ。課題研究を生かした連携では，高校生による中学生のポスター作成支援や職員研修会への相互参加などを実施した。

⑨　国内交流

・１１月の仙台第三高校「ＧＳフェスタ」，１２月の「ＳＧＨ全国高校生フォーラム」，２月の古川黎明高校「黎明サイエンスフェスティバル」，東京大学主催「全国海洋教育サミット」に参加することで全国の小中高生と交流し，課題研究に関して深い学びを得ることができた。

・震災交流には生徒会や生活防災委員を中心に多く生徒が参加。特に９月には「「世界津波の日」2019 高校生サミット in 北海道」に生徒３名が参加し，国内外の高校生と交流を深めた。また，震災以降交流を続けている富山県立魚津高校，神奈川県向上高校，埼玉県立川口高校，北海道立滝川高校，大阪府立北摂つばさ高校を中心とした「がんばろう！つばさネットワーク」との交流内容も年々充実している。特に今年度は５月に早稲田大学高等学院２年生が，７月には愛知県立豊橋南高等学校１年生が訪問し，気仙沼高校の生徒と積極的な意見交換を行った。平成３１年３月の気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館のオープン以降，防災学習で気仙沼市を訪れる学校が増加傾向にあることから，市や関係機関との連携を一層強化しこれからの防災学習の形を開発していきたい。

⑩　成果の普及

・ＳＧＨ通信を発行し，保護者並びに関係機関に配布するとともに，ホームページに掲載した。

・先進校としての課題研究に関する発表会を４回実施。大学のアドバイザーの他，フィールドワーク先，学校評議員，市内小中学校の教員，県内及び連携した高校，市長，市議会議員，地元選出の県議会議員，地元ＮＰＯ法人，保護者，地域報道機関等に案内を送付した。

・発表会への外部参加人数は以下のとおりである。１０月：課題研究Ⅰ中間発表・課題研究Ⅱ最終発表（２６人），１１月：地域社会研究中間発表会（６人），１月：地域社会研究・課題研究Ⅰ全体発表会（６０人）

・校外における成果の普及については，⑦防災教育，⑧地域連携，⑨国内交流を参照。

・気仙沼市ＥＳＤ／ＲＣＥ円卓会議，ユネスコスクール全国大会，ユネスコスクール北海道・東北ブロック大会などを活用し，ユネスコスクールとして気仙沼高校が取り組んでいる課題研究・国際理解・地域連携を軸としたＥＳＤの取組を広く発信した。その結果として，第１回ユネスコスクール北海道・東北ブロック大会では実践大賞を受賞するなど評価された。

⑪　事業全体の評価に関する事項

・昨年度に引き続き，生徒対象「グローバル化アンケート」，事業全体に係るルーブリック表に基づく「ＧＬ生徒自己評価」，生徒による「授業評価」・「学校評価」を基本として事業評価を実施した。加えて，４年間の取組ついてＳＧＨ運営指導委員，学校評議員，課題研究のアドバイザー（大学の教員）から指導・助言をいただいた。

・上記以外にも，生徒が実感しているＳＧＨ事業の成果と課題について把握するため，課題研究に３年間取り組んだ創造類型３８名と人文・理数類型で推薦・ＡＯ入試を利用した生徒を対象にアンケート並びに聞き取り調査を実施した。

７　目標の進捗状況，成果，評価

（１）目標設定シート１－a　自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数･･･２２７名

昨年度より増加。大きな成果として，これまでの地域のイベント支援や清掃活動に加え，主体的に研究成果を生かし，「ぬまフェス」や気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館での語り部など地方創生につながるイベントを自主的に開催した生徒が増えたことが挙げられる。また，台風１９号で浸水被害を受けた南三陸町歌津でのボランティア活動は，現地への移動途中に中止が決定したものの１２０名の生徒が参加する大がかりなものとなった。校内の縦・横のつながりに加え他校生と連動したイベントも行われ，今後も，気仙沼高校生が市内の高校生，地域住民

たちと協力して社会貢献に取り組む機運が高まっていくことが期待できる。
（2）目標設定シート１－b　自主的に留学又は海外研修に行く生徒・・・４３名
　海外の研修プログラムに参加した生徒は２年連続して減少した。生徒自身は希望していても，家庭の旅行費用負担が厳しく，実現に至らないのが現状である。また，震災支援による海外研修も減っている状況にある。研修プログラムの情報収集，生徒への情報提供，手続きの指導体制等を改善し，１人でも多くの生徒が海外研修に参加できるよう努めたい。
（3）目標設定シート１－c　将来留学したり，仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合・・・２４％
　「グローバル化に関する意識アンケート」の調査によると，「ぜひしたい」の回答割合は４年間で大きな変化はなかった（H28:21%→H29:20%→H30：20%→R1:24%）。「できれば」を加えた割合は，全体的に１年次に比べて２年次に減る傾向が見られるが，創造類型では年次進行で増加しており，課題研究を中心としたＳＧＨプログラムの成果が表れているものと考える。
（4）目標設定シート１－d　公的機関から表彰された生徒数，又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数･･･８名
　○全国高等学校デザイン選手権大会（入賞１名：３年）
　○けせんぬまマイプロジェクトアワード（市長賞１名：２年，共感賞２名：２年）
　○全国マイプロジェクトアワード東北サミット（入賞・全国大会出場権獲得２名：２年）
　○日本福祉大学主催「３６℃の言葉」（第４分野「世の中のどうして？部門」最優秀賞１名：３年）
　○尚絅学院大学「環境マルシェ」（学長賞１名：３年）
など授業や課題研究の成果が高く評価され，入賞する生徒が増えている。この他，学校全体の取組として第１回ユネスコスクール北海道・東北ブロック大会では実践大賞を受賞した。
（5）目標設定シート１－e　卒業時の生徒の４技能の総合的な英語力 CEFR B1～B2 レベルの生徒の割合･･･　４％
　３学年が１年次より受験してきたＧＴＥＣのスコアと英語検定試験の合格者数から判断すると，Ｂ１レベル相当に達した生徒は昨年度の卒業生と同じ１２名となった。目標とする３０％達成への道のりは険しいと言わざるを得ないが，３学年の CEFR レベルＡ２以上の人数はＳＧＨ指定前に比べ８７名増え１２７名(H27:40 名→H28:56 名→H29：60 名→H30:70 名→R1:127 名)，１・２学年全員が受験したＧＴＥＣの結果では４技能のトータルスコアでＢ１以上が１学年４名，Ａ２レベルは１学年１００名，２学年１１８名となっており，６（2）⑤で記した実践の，一定の効果はあった。
（6）目標設定シート１－f　十分なコミュニケーション力を身に付けていると考える生徒の割合･･･５．２％
　「グローバル化に関する意識アンケート」結果では，「十分身に付けている」の回答割合は全体で５．２％，「まあまあ身に付けている」を加えた全体割合は５２％と昨年度とほぼ同様の結果となった。（H28:41%→H29:48%→H30:51%→R1:52%）。
＜添付資料＞目標設定シート

８　次年度以降の課題及び改善点
（1）教育課程の研究開発の状況について
　指定初年度より１年生必履修の学校設定科目「地域社会研究」をスタートさせ，地域の宝である海を素材として，多種多様な地域課題を理解させるとともに，批判的・科学的思考力やプレゼンテーション力を中心としたコミュニケーション力を育成するための取組を行った。初年度の実践から，次年度以降は課題の解決に向けて設定した仮説を検証する研究活動を重視していくこととした。
　２年目に２年生創造類型対象の学校設定科目「課題研究Ｉ」がスタートし，「地域社会研究」での経験を踏まえ，他の地域や海外との比較をし，グローバル課題と関連づけることで研究活動の深化を図った。そして，多くの生徒が外部発表会で発表する機会に恵まれ，このような経験が研究発表や内容の進歩を後押しした。また，２年生人文・理数類型の「総合的な学習の時間」において，「地域社会研究」で学んだことを生かし，自らの進路を見据え，

自由度を拡大し生徒個々の興味・関心に応じた課題研究を実施した。

３年目は３年生創造類型対象の学校設定科目「課題研究Ⅱ」が始まり，これにより全ての学年の教育課程上に探究活動が位置づけられた。「課題研究Ⅱ」では２年生で研究を重ねた「課題研究Ⅰ」を発展させ，科学的探究活動の習熟と文理融合をさせた研究を目指した。同時に英語による海外発信を可能とするコミュニケーション力の育成を図った。年度当初は英語での活動に苦手意識を持っていた生徒が多かったが，苦戦しながらもやり通したことが生徒の自信につながった。

４年目である今年度は，課題として残っていた課題発見能力・テーマ設定能力や批判的思考力・科学的思考力の向上に努めた。「地域社会研究」「課題研究Ⅰ」では，テーマ設定前に地域課題やＳＤＧｓに対する理解を深める学習や，クリティカルシンキング育成の授業を多く取り入れている。

（２）高大接続の状況について

東北大学，宮城教育大学，宮城大学，東北工業大学等と連携し，各種講演会の講師，フィールドワークでの指導，発表会でのアドバイザー等の協力をいただいている。今年度当初に「ＳＧＨのねらい，育成すべき人物像，年間の連携計画及び連携内容」についての大学側への説明を行うこととしていたが，６月上旬までずれ込む結果となった。次年度は速やかに対応し，連携強化に努めたい。また，大学ごとの要望を確認し，アドバイザーの負担とならぬよう学校側で交通整理を行いながら効果的な運用に努めたい。

（３）生徒の変化について

気仙沼高校生は，ＳＧＨ指定前からグローバル社会に対する関心が高く（平成２７年度実施アンケート「将来，グローバル社会で通用する人材になりたいですか」…８１％），国際交流の機会にも比較的恵まれてきたが，語学力やコミュニケーション力を不安視しており，日常の英語学習にも生かされていないという点が課題であった。

指定後は，探究活動や講演会，校内外での発表会を通じた生徒の変容が調査結果にも表れており，今年度末に実施したグローバル化社会に関するアンケートでの「将来，グローバル社会で通用する人材になりたいですか」という質問に対して，今年度１年生は８８．３％が肯定的評価だった。また，その他の質問についても前向きな評価となっているものが多い。

一方，ＧＬ自己評価では「批判的・科学的思考力」における段階３以上の割合は１学年４４．４％，２学年５６．７％，３学年４５．６％と，約半数の生徒が「考える」という習慣が身についていない状況であり，これまでの取り組みが期待ほど結びついていない面があることがわかった。ＳＧＨ運営指導委員会においても昨年同様「論理に飛躍があり，根拠と結論が結びつかない発表も見受けられた。」という指摘もあり，研究活動や授業において「生徒と対話する機会」を増やしながら，「深く考える」習慣を身につけさせたい。

（４）教師の変化について

課題研究として，ＳＧＨ初年度から「地域社会研究」「課題研究Ⅰ」「課題研究Ⅱ」を進めてきた。平成２８年度は本校に在籍する主幹教諭・教諭４２名中１８名，４３％の教員が研究担当であったが，４年目の今年度は主幹教諭・教諭４５名中４２名，９３％が担当を経験するまでになり，ゴールイメージの共有を進めてきた。また，３年目のカリキュラム完成年度までは，テーマ検討，研究の進め方については教員が誘導する部分が多かったが，４年目では，高校生らしい着眼点で自走を促す部分も出てきた。現在，校内で研究の主担当経験者は５名，海外研修引率者は５名であり，担当の引き継ぎを進める必要性を感じる。テーマ決めやディスカッション等について，担当者以外からのアイディアが出てきている部分を大切にしながら意見を引き出す研修会を企画していきたい。

（５）学校における他の要素の変化について（授業，保護者等）

「６　研究開発の実績」（２）④のイにあるとおり，各４点を満点とする授業評価では「授業における教師の説明は分かりやすかった」や「板書や配付資料が授業に役立った」等，上昇傾向にあるものが多くなっている。また，授業中に積極的な発言や行動をする生徒の数は確実に増加している。このことは「授業力向上プログラム」など，気仙沼高校の授業改善の体制づくりが一定の成果を挙げているものと捉えることができる。

ＳＧＨ事業に対する保護者の協力も得られているが，学校に対する期待度は，学校評価の他項目と比較すると高くない状況である。台湾研修や各種発表会を通してこの取組への関心を高め，肯定的評価の向上に努めたい。

（6）その他課題や問題点について

宮城県は訪日教育旅行誘致促進事業を展開しており，その一環として台湾の高級中学や職業学校の校長ら９名が２月に来日し，気仙沼高校を訪れた。ＳＧＨ指定後，気仙沼高校は台湾研修を実施し，同世代との意見交流等を積極的に行っているが，台湾の学生・生徒の訪問交流は，気仙沼市の地理的問題等もあり進展していない状況にある。今回の視察をきっかけに，台湾からの教育旅行団を迎え交流を深めることで，日台のさらなる親睦につなげていきたい。

また，気仙沼市には３００人を超える外国人技能実習生が生活している。その大半をインドネシア人が占め，夏に行われる「気仙沼みなとまつり」では「インドネシアパレード」が催され，市民たちとの交流の機会となっている。気仙沼高校生との交流行事はこれまでも行ってきたが，県観光課や観光連盟との連携を図りながら，一層の進展を図っていきたい。

（7）研究開発完了後の持続可能性について

「地域社会研究」等の探究活動については，学習指導要領改訂に伴う教育課程の変更にあたり，学校設定科目として継続していくか，総合的な探究の時間の中で実施していくか等の検討が必要となっているものの，基本的には今後も計画的かつ組織的に取り組むことで，これまでの成果を生かした活動の持続が期待できる。台湾研修については，今年度より２年生創造類型全員を対象としたが，研究開発完了後も同様の内容で実施できるよう，検討しているところである。

指定期間終了後，教科等指導のＳＧＨ化（グローバルな視点を有する課題解決・社会参画型学習）や生徒の資質・能力の伸長を測る到達度による評価方法の研究によって得られた成果をベースに，県独自のグローバル人材育成や社会参画に必要な資質・能力の育成に係る研究事業において研究を発展させ，裾野の広い取組に成長させたい。

【担当者】

担当課	高校教育課教育指導班	ＴＥＬ	０２２（２１１）３６２４
氏　名	高木　伸幸	ＦＡＸ	０２２（２１１）３６９６
職　名	主幹（指導主事）	e-mail	takagi-no557@pref.miyagi.lg.jp

【別紙様式7】

ふりがな	みやぎけんけせんぬまこうとうがっこう	指定期間	H28～R2
学校名	宮城県気仙沼高等学校		

平成２８年度スーパーグローバルハイスクール　目標設定シート

１．本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

		H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度	目標値(R2年度)
a	自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
	SGH対象生徒:			100人	178人	191人	227人	人	300人
	SGH対象生徒以外:	100人	80人	人	人	人	人	人	人
	目標設定の考え方:各部活動やジュニアリーダー等で地域の奉仕作業を行っており，その数をもとに目標を設定する								
b	自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
	SGH対象生徒:			9 人	34 人	28人	43人	人	60人
	SGH対象生徒以外:	41人	17人	人	人	人	人	人	人
	目標設定の考え方:本校1・2年生で調査したグローバル化に関する意識調査の結果をもとにして目標を設定する								
c	将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
	SGH対象生徒:			21%	20%	20%	24%	%	50%
	SGH対象生徒以外:	―	24%	%	%	%	%	%	%
	目標設定の考え方:本校1・2年生で調査したグローバル化に関する意識調査の結果をもとにして目標を設定する								
d	公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
	SGH対象生徒:			0 人	5人	7人	8人	人	10人
	SGH対象生徒以外:	―	2人	人	人	人	人	人	人
	目標設定の考え方:今年度の5倍の10人を目標とする								
e	卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
	SGH対象生徒:			2%	2%	4%	4%	%	30%
	SGH対象生徒以外:	2%	2%	%	%	%	%	%	%
	目標設定の考え方:今年度の15倍の30%を目標とする								
f	十分なコミュニケーション力を身に付けていると考える生徒の割合								
	SGH対象生徒:			9%	6%	6%	6%		20%
	SGH対象生徒以外:	―	6%						%
	目標設定の考え方:本校1・2年生で調査したグローバル化に関する意識調査の結果をもとにして目標を設定する								

２．グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）

		H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度	目標値(R2年度)
a	課題研究に関する国外の研修参加者数	0人	0人	0 人	17 人	12人	37人	人	40人
	目標設定の考え方：2・3年次の創造類型の生徒を中心とする数（40人）で算出								
b	課題研究に関する国内の研修参加者数	0人	0人	28 人	77人	107人	97人	人	300人
	目標設定の考え方：1年次240人全員，2年次創造類型40人，3年次希望者20人で算出								
c	課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数	0校	0校	2校	2校	2校	2校	校	6校
	目標設定の考え方：構想では大学1校，高校1校の連携から始まり，4大学，2高校を目標とする								
d	課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）	0人	0人	47人	118人	92人	98人	人	90人
	目標設定の考え方：研究6領域を各大学の研究者6人及びアシスタント12人程度で5回指導（1年2回，2年2回，3年1回）と設定する								
e	課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）	0人	0人	31 人	43 人	47人	59人	人	100人
	目標設定の考え方：構想では国際機関（5機関）・地域の企業（45社）の2回と設定する								
f	グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数	1人	2人	2 人	12 人	6人	11人	人	20人
	目標設定の考え方：今年度の参加人数をもとに，10倍の参加数を目標とする								
g	帰国・外国人生徒の受入れ者数（留学生も含む。）	0人	0人	0人	0人	0人	0人	人	3人
	目標設定の考え方：留学生として3人の受け入れを目標とする								
h	先進校としての研究発表回数	0回	0回	3回	4回	5回	4回	回	2回
	目標設定の考え方：地域や連携先に向けた報告会，年度末の一般発表会を行うことを目標とする								
i	外国語によるホームページの整備状況 ○整備されている　△一部整備されている　×整備されていない	×	×	○	△	△	△		○
	目標設定の考え方：指定1年目は一部英語で，3年以内には英語で開設できるよう担当部署と共にシステムの変更を促す								
j	スカイプによる海外の学生とインターネット交流をする生徒数	40人	26人	20人	13人	24人	7人		50人
	目標設定の考え方：構想では現在の約2倍の参加数を目標とする								
k	気仙沼地域のために行動しようと考える生徒の割合	－	－	91%	90%	91%	88%	%	80%
	目標設定の考え方：構想では将来，地域に戻ろうとしたり，域外から地域を考えようとする生徒数の割合を設定する								

＜調査の概要について＞

1．生徒を対象とした調査について

	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度
全校生徒数（人）	788	753	714	679	832	758	0
SGH対象生徒数			714	679	832	758	
SGH対象外生徒数			0	0	0	0	

【ＳＧＨ事業全体の成果と課題】

（１）検証方法

今年度の取組による生徒の変容について以下の調査・評価結果を中心に考察する。

① グローバル化社会に関するアンケートの結果

② ルーブリック表を用いた「グローバルリテラシー（以下ＧＬと表記）到達度自己評価」

③ スモールステップ表に基づいた評価

（２）結果

１）グローバル化社会に関するアンケートより

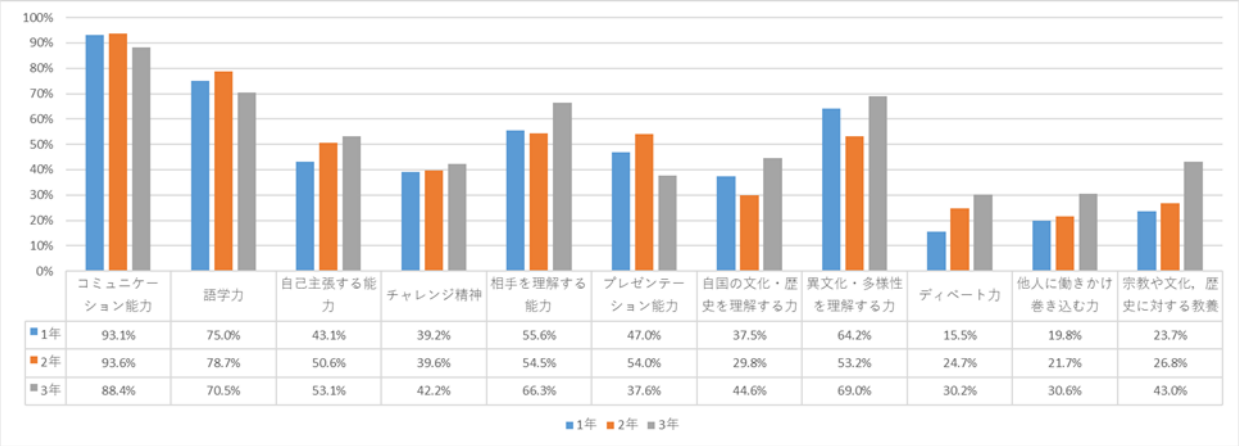
表１　将来へのグローバル化による影響について（数字は%）

	R1 1年	R1 2年	R1 3年	H30 2年	H29 1年	H29 創造2年	H30 創造2年	R1 創造2年	H30 創造3年	R1 創造3年
ある	56.0	54.0	70.2	64.1	67.7	76.5	81.8	67.6	79.4	88.6
ない	1.7	5.1	3.5	5.0	1.5	5.9	0.0	5.4	2.9	0.0
わからない	42.2	38.7	24.8	30.9	30.8	17.6	18.2	27.0	17.6	8.6

表２　将来，グローバル社会で通用する人材になりたいか（数字は%）

	R1 1年	R1 2年	R1 3年	H30 2年	H29 1年	H29 創造2年	H30 創造2年	R1 創造2年	H30 創造3年	R1 創造3年
ぜひなりたい	21.1	23.4	27.5	25.6	30.2	47.1	54.5	45.9	41.2	51.4
できればなりたい	67.2	64.7	58.5	61.5	60.5	50.0	42.4	43.2	55.9	45.7
あまりなりたいと思わない	10.3	8.1	11.2	11.5	8.2	0.0	3.0	5.4	2.9	0.0
まったくなりたいと思わない	0.4	1.6	1.6	1.1	1.0	0.0	0.0	5.4	0.0	0.0

表３　グローバル社会で通用する人材になるために必要な力は，次のうちどれだと思いますか



	コミュニケーション能力	語学力	自己主張する能力	チャレンジ精神	相手を理解する能力	プレゼンテーション能力	自国の文化・歴史を理解する力	異文化・多様性を理解する力	ディベート力	他人に働きかけ巻き込む力	宗教や文化，歴史に対する教養
1年	93.1%	75.0%	43.1%	39.2%	55.6%	47.0%	37.5%	64.2%	15.5%	19.8%	23.7%
2年	93.6%	78.7%	50.6%	39.6%	54.5%	54.0%	29.8%	53.2%	24.7%	21.7%	26.8%
3年	88.4%	70.5%	53.1%	42.2%	66.3%	37.6%	44.6%	69.0%	30.2%	30.6%	43.0%

表１「自分の将来にグローバル化の影響はあると思いますか」という質問に「ある」と答えた生徒の割合はＳＧＨ事業が始まる前年度の平成２７年度は１年生５４．１%，２年生５７．５%であった。ＳＧＨ事業が始まった平成２８年度以降６０%以上の割合で推移していたが，今年度１年生５６．０%，２年生５４．０%と，６０%を割り込んだ。一方，課題研究を軸とするカリキュラムを展開する創造類型では７６．５%と比較的高い数字を維持している。

表２「将来，グローバル社会で通用する人材になりたいですか」という質問に対して，「ぜひなりたい」「できればなりたい」という肯定的回答の割合は，ＳＧＨ指定前の平成２７年度は約８１%であったが，平成２９年度入学生（現３年生）は３年間８６%を上回り，今年度の１年生も８８．３%と高率であった。

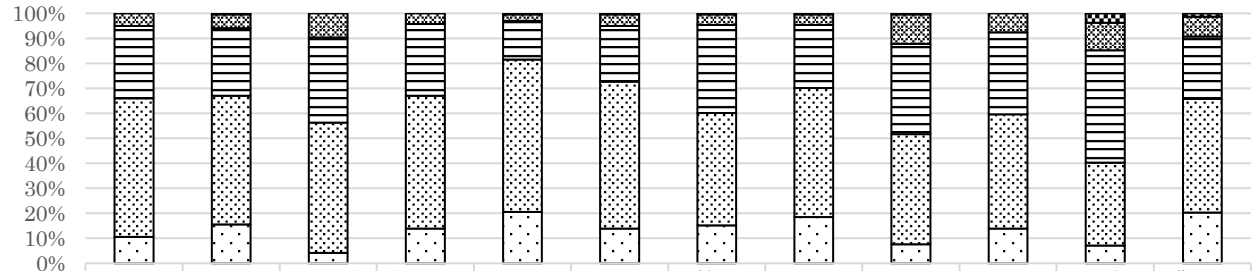
表３では，これまで同様「ディベート」「巻き込む力」「宗教や文化」の割合が全学年で低くなっている。これら項目の必要性は課題研究だけでは実感しにくいものであり，授業や特別活動を利用した学校全体の取組を推進したい。

２）ＧＬ到達度自己評価より

この評価はルーブリック表を用いて，本校のねらいとするＧＬの到達度を生徒による自己評価で行うもので，平成２８年度から始めたものである。昨年度は１年生が５月（地域社会研究開始時）と２月，２年生は２月，３年生は１月，今年度は１年生が地域社会研究に半年取り組んだ後の１１月と２月，２年生は２月，

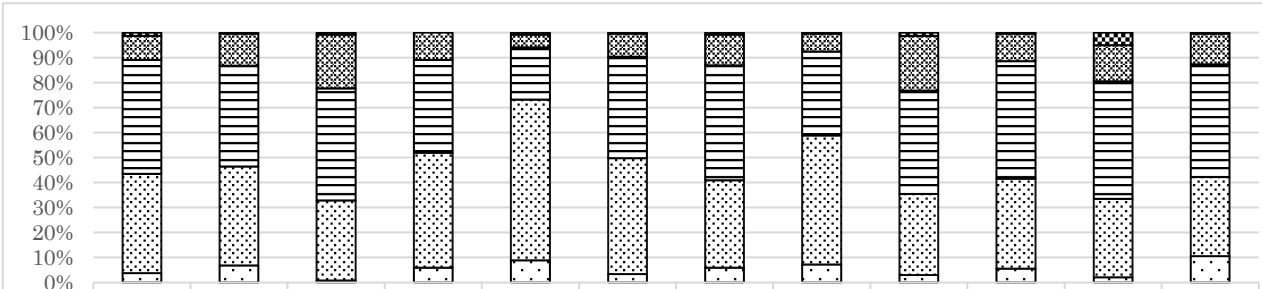
３年生は１月に実施した。各ＧＬは５段階とし，その内容を「１：努力を期待する段階」「２：もう少しの努力を期待する段階」「３：気高生として到達して欲しい段階」「４：気高生の模範となる段階」「５：全国レベルで高校生の模範となる段階」としている。また，段階３以上（本校が求める段階以上に到達した）と答えた生徒は，その達成に関係したと思われるもの「１９の取組」の中から最大３つを選ぶという調査も同時に実施した。

表４　１年生１１月（回答数２３８名）　テーブルの数字は人数



	知識・技能	学ぶ方法	批・科思考力	総・未思考力	語学力	言語コミュ力	情報活用力	多様性	協働性	行動力	健康・体力	豊かな人間性
5	0	1	0	0	1	1	1	1	1	0	9	3
4	12	13	23	10	6	11	10	10	28	18	26	19
3	69	64	81	68	37	53	84	60	86	78	107	59
2	132	122	124	126	145	140	107	123	105	109	79	108
1	25	37	10	33	49	33	36	44	18	33	17	48

表５　１年生２月（回答数２３８名）　テーブルの数字は人数



	知識・技能	学ぶ方法	批・科思考力	総・未思考力	語学力	言語コミュ力	情報活用力	多様性	協働性	行動力	健康・体力	豊かな人間性
5	3	1	2	0	2	1	2	1	3	1	12	1
4	23	30	51	26	12	22	29	17	52	26	34	29
3	108	95	106	88	49	96	109	79	98	111	111	107
2	94	93	76	109	151	110	83	122	77	85	74	75
1	9	16	2	14	21	8	14	17	7	13	5	25

表４・表５より，全ての項目において段階３以上の割合が増加しており，知識・技能，学ぶ方法，批判的・科学的思考力，言語コミュニケーション力，豊かな人間性の５項目については１．５倍を超える高い伸びを示している。特に，言語コミュニケーション力は１１月の６５人から２月は１１９人と大きく増加している。理由としては「スライドやポスターセッションによる発表の機会を多く得たこと」や「グループ研究の中で他者との意見交換を活発に行えるようになったこと」をあげている生徒が多い。

図６はそれぞれの段階を点数にして，項目ごとの平均値をレーダーチャートで表したものである。図６からも，１１月に比べて２月の結果が全項目で高くなっていることがわかる。昨年同様他の項目に比べて語学力の平均値が低くなっているが，ルーブリックの段階３が「段階２に加え，授業で培った英語の４技能を様々な場面で活用している。」という内容

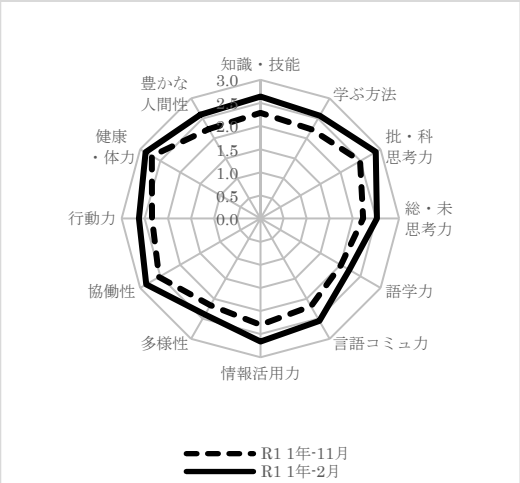
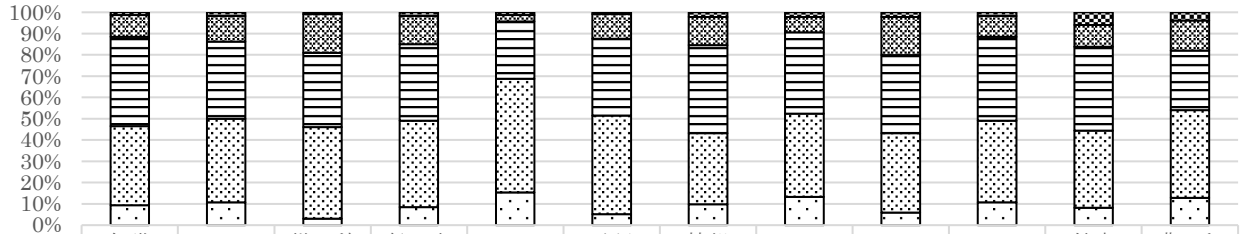


図６　１年生の平均値の推移

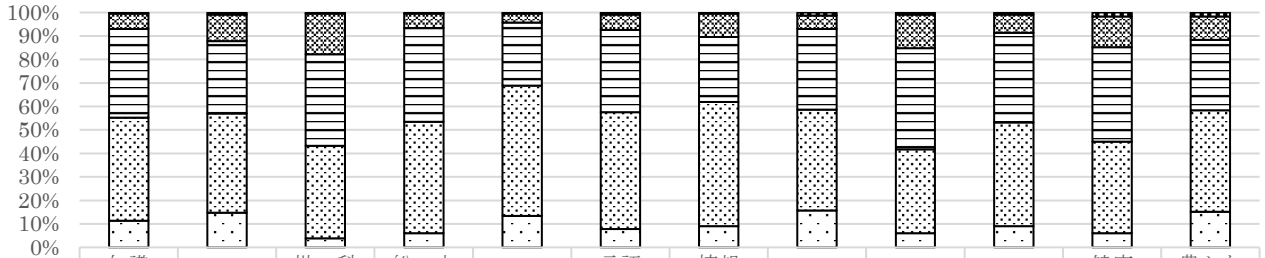
であり，卒業後までに身につけることを想定しているため，割合自体は低いものの，人数でみると１１月の４４名が２月では６３名と，１．５倍近い伸びとなっている。また，過半数の生徒が評価している段階２は「授業以外の場面で，日本語や英語で原稿を作成すれば自分の意見を発表することができる。」という内容であることから，段階２以上の生徒は，語学力を生かしたプレゼンテーション能力がある程度向上したことを実感していると思われる。

表７　平成３０年度１年生２月（回答数　２３４名）　テーブルの数字は人数



	知識・技能	学ぶ方法	批・科思考力	総・未思考力	語学力	言語コミュ力	情報活用力	多様性	協働性	行動力	健康・体力	豊かな人間性
5	3	4	2	4	3	2	5	5	5	4	14	9
4	24	28	42	31	7	27	31	17	42	23	24	33
3	98	84	81	84	63	84	97	89	86	92	92	65
2	87	91	100	95	125	108	78	91	87	90	85	96
1	22	25	7	20	36	12	23	31	14	25	19	30

表８　令和元年度２年生２月（回答数　２３１名）　テーブルの数字は人数



	知識・技能	学ぶ方法	批・科思考力	総・未思考力	語学力	言語コミュ力	情報活用力	多様性	協働性	行動力	健康・体力	豊かな人間性
5	1	2	1	1	1	2	1	3	2	2	4	4
4	15	26	40	14	9	15	23	13	33	18	30	23
3	87	71	90	92	62	81	64	79	99	88	93	69
2	101	97	91	109	128	115	122	99	82	102	90	100
1	26	34	9	14	31	18	21	36	14	21	14	35

１年次（表７）と２年次（表８）を比較すると，「批判的・科学的思考力」と「協働性」は段階３以上の割合が増えている。ルーブリックにおける「批判的・科学的思考力」の段階２と３の大きな違いは「合理的,客観的な根拠」の有無であり，１年次の「地域社会研究」では結論の根拠が曖昧なまま発表を迎える生徒もいたが，２年次の創造類型「課題研究Ⅰ」，人文・理数類型「総合的な学習の時間」で継続して課題研究活動を行うことで，不足していた「合理的，客観的な根拠」を用いて結論を述べる能力を身につける機会になったものと捉えている。「協働性」については学年進行に従って集団における自らの役割を自覚し，学校生活における中核として活躍していきたい思いの表れと考える。

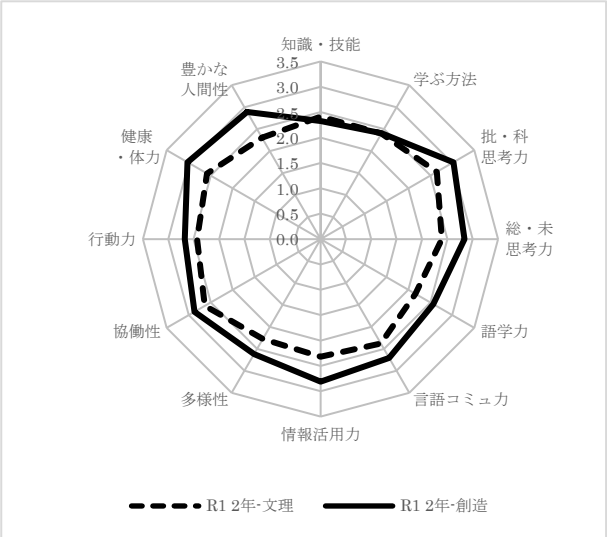
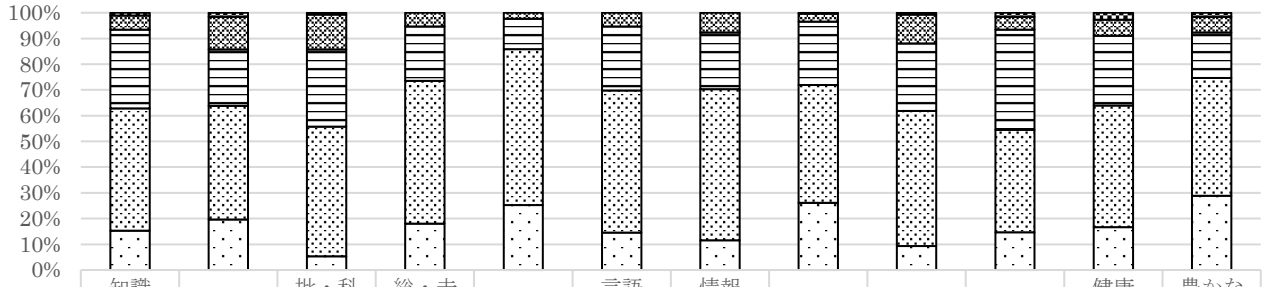


図９は，人文・理数類型と創造類型の平均値（集計方法は１年生と同じ）をレーダーチャートで表したもの

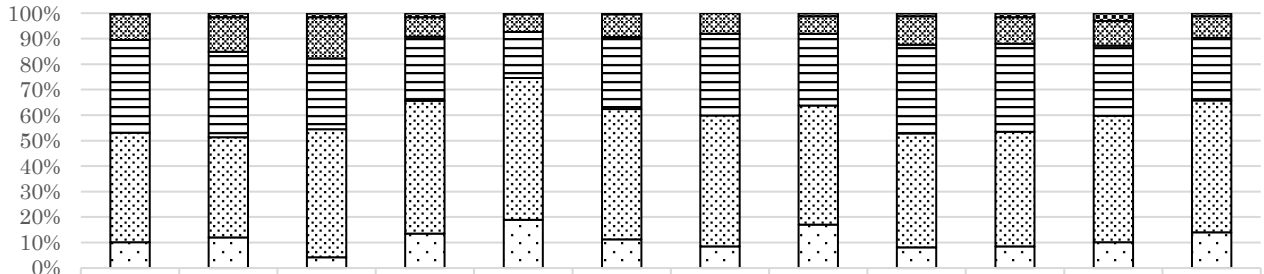
である。ほぼ差異のない知識・技能と学ぶ方法以外の項目で創造類型の平均が上回った。創造類型は，探究活動の成果を校外で発表する機会が多く，フィールドワークで情報を収集し，専門家から指導助言を受ける機会にも比較的恵まれていることから，このような結果に結びついたものと分析する。

表１０　平成３０年度２年生２月（回答数　２６１名）　テーブルの数字は人数



	知識・技能	学ぶ方法	批・科思考力	総・未思考力	語学力	言語コミュ力	情報活用力	多様性	協働性	行動力	健康・体力	豊かな人間性
5	3	4	2	0	0	0	0	1	2	4	7	4
4	14	33	35	14	6	14	20	8	29	13	16	16
3	80	57	78	55	31	65	57	64	68	101	70	46
2	124	115	131	145	158	144	152	119	136	103	122	119
1	40	51	14	47	66	38	30	68	24	38	43	75

表１１　令和元年度３年生１月（回答数　２５９名）　テーブルの数字は人数



	知識・技能	学ぶ方法	批・科思考力	総・未思考力	語学力	言語コミュ力	情報活用力	多様性	協働性	行動力	健康・体力	豊かな人間性
5	1	4	4	4	1	1	0	3	3	4	8	3
4	26	35	42	20	18	23	21	18	29	27	25	22
3	94	86	72	65	47	73	83	73	90	89	71	63
2	111	101	130	135	144	132	133	121	116	116	128	133
1	26	31	11	35	49	29	22	44	21	22	26	36

表１１は３年生１月に実施したＧＬ自己評価の結果である。段階３以上の割合は，全項目で２年次を上回る結果となった。図１２から創造類型３６名のＧＬ伸張が，全体を押し上げた要因としてあげられるが，授業改善で重点を置いた「教科における習得→活用→探究をベースとした『単元指導』の充実」と「スモールステップ表を活用したＧＬ育成」の効果が現れているものと考える。教科指導において探究型授業を実践している教員は「授業力向上プログラム」等の実施の結果増加傾向にあり，また，１年次に生徒全員が「地域社会研究」で研究手法を学んでいることが，探究型授業を展開しやすい環境を醸成していると考えられる。

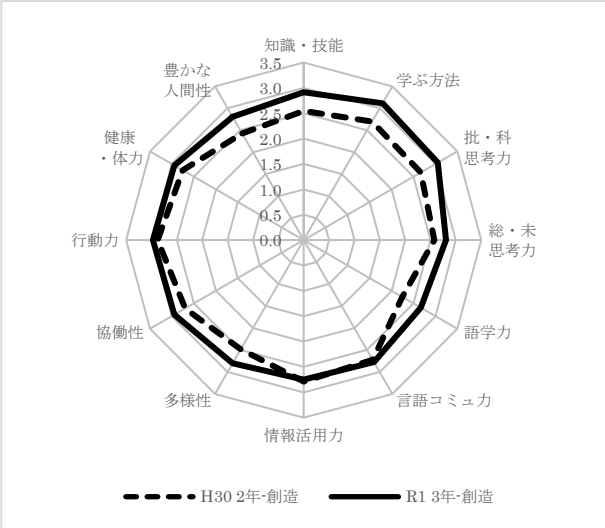


図１２　創造類型の平均値の推移

３）スモールステップ表に基づいた評価より

スモールステップ表は，目標となる資質・能力を具体化し，それらの育成に向けて活動ごと・学年ごとに指導

観点及び評価規準を明確にしたものである。表１３は，定期考査やパフォーマンステストの結果を基に担当者が「○：達成（８０％以上)」「△：概ね達成（６５％以上)」「×：不十分（６５％以下)」の３段階で評価した一覧であるが，昨年度と比較すると「多様性」「協働性」における「達成」の評価が多くなっており，授業や探究活動を通じて，自然や社会システムの多様性について理解を深め，他者を尊重し協力し合う姿勢が育まれている。

表１３　主要５教科と課題研究のスモールステップに基づいた評価一覧

資質・能力		国語	数学	英語	地歴・公民	理科	地社研 （1年全員）	課研Ⅰ （2年創造）	課研Ⅱ （3年創造）
基礎的・基本的な知識・技能		①○ ②○ ③○	①△ ②○ ③△	①△ ②△ ③△	①△ ②○ ③○	①○ ②○ ③○	△	△	○
思考力	批判的思考力・科学的思考力	①○ ②△ ③△	①△ ②× ③△	①× ②△ ③○	①△ ②△ ③△	①△ ②△ ③○	△	△	△
思考力	総合的思考力・未来思考力	①○ ②○ ③△	①△ ②○ ③△	①× ②△ ③△	①○ ②○ ③○	①△ ②△ ③△	△	△	△
コミュニケーション力	語学力	①△ ②△ ③○	①× ②○ ③△	①△ ②△ ③△	①○ ②○ ③○	①○ ②○ ③×	○	△	△
コミュニケーション力	言語的コミュニケーション力	①○ ②○ ③○	①○ ②△ ③×	①△ ②△ ③△	①△ ②○ ③○	①△ ②△ ③△	△	○	×
コミュニケーション力	情報活用力	①○ ②△ ③△	①△ ②○ ③△	①× ②× ③△	①△ ②○ ③○	①△ ②△ ③△	○	△	△
多様性		①○ ②△ ③○	①○ ②△ ③△	①△ ②△ ③○	①○ ②○ ③○	①○ ②× ③×	△	△	○
協働性		①○ ②○ ③○	①△ ②△ ③△	①○ ②○ ③○	①△ ②△ ③○	①○ ②○ ③○	○	○	△
行動力		①○ ②○ ③○	①× ②△ ③△	①× ②△ ③△	①△ ②○ ③○	①○ ②○ ③△	△	○	○

【国語】　【評価】○達成：80%以上，△概ね達成：65%以上，×不十分：65%未満
※評価していない資質・能力は斜線

資質・能力		R1評価	内容（○は全学年，①～③は各学年での観点）
基礎的・基本的な知識・技能		①○ ②○ ③○	○話す・聞く・書く・読むことの活動をそれぞれ関連づけながら，知識の定着とその活用の能力を高める。
思考力	批判的思考力・科学的思考力	①○ ②△ ③△	①文章の構成や話の展開を意識して読んだり聞いたりする。 ②文章の構成や話の展開を意識し，内容や表現の仕方について評価したり，話し手や書き手の意図をとらえながら読んだり聞いたりする。 ③問題の背景にある事象を正しく理解したうえで論理的に思考し，問題解決の方法を自分の言葉で話したり書いたりする。
思考力	総合的思考力・未来思考力	①○ ②○ ③△	①自分以外の他人の意見や考えを叙述に即して的確に読んだり聞いたりする。 ②自分以外の他人の意見や考えを叙述に即して的確にまとめ，話したり書いたりする。 ③問題の背景にある事象を正しく理解し，他人や自分の意見を尊重したうえで，問題解決の方法を話したり書いたりして，発信していく。
コミュニケーション力	語学力	①△ ②△ ③○	①さまざまな言葉の成り立ちや基礎的な意味，豊かな表現に触れ，語彙を豊かにする。 ②幅広い作品に接し，語句の優れた用い方や表現方法について，感想を述べたり批評文を書いたりする。 ③目的に応じて文体や語句を工夫し，適切な表現方法を用いて自らの考えを話したり書き表したりする。
コミュニケーション力	言語的コミュニケーション力	①○ ②○ ③○	①状況に応じた身近な話題について，相手を尊重しつつ自分の考えを持って話し合う。 ②相手の主張や表現の仕方について，適切に評価しつつ聞き取り，自分の話し方や言葉遣いに反映させる。 ③相手や目的に応じた語句及び技法を用い，討論や論文作成の場で効果的に自分の意見を発表する。
コミュニケーション力	情報活用力	①○ ②△ ③△	①さまざまなメディアによって表現された情報を読み取り，内容を理解する。 ②一つの話題について，幅広いメディアから関連する情報を選び取り，読み比べて評価する。 ③情報の適切な引用をもとに構築された自らの意見に，検証を加え，論理性を追究した文章やスピーチを作成する。
多様性		①○ ②△ ③○	①自国で生まれ，時代を経て様々に変遷を遂げてきた言語や文化ついて関心を持つ。 ②自国の言語芸術や文化について考えを深め，他国文化との違いを理解する。 ③国語と他国の言語を比較して両者の特色について考え，それぞれの文化を尊重する姿勢を持つ。
協働性		①○ ②○ ③○	①互いの立場や考えを尊重しながら意見を交換する姿勢を持つ。 ②互いの立場や考えを尊重しながら意見の共通点と相違点とを明確にしようとする姿勢を身につける。 ③互いの意見の相違を理解した上でさらに発展的，創造的なアイデアをともに作ろうとする意欲・態度を身につける。
行動力		①○ ②○ ③○	①相手の意図や文章の趣旨を理解しようとする。 ②相手の意図や文章の趣旨を共有し，自分の立場を明確にしようとする。 ③相手の意図や文章の趣旨を踏まえ自らの意見を持ち他者に発信しようとする。
◆評価規準　◇評価対象			◆教材に興味を持って学習に取り組んでいる。 ◇授業での発言，構造理解 ◆文章の構成や展開を意識し，内容を的確に要約できるとともに，自分の考えを文章で表現できる。 ◇ノート，ワークブック，小論文 ◆文法事項を理解し，それらを用いて正しく読解できるとともに，それぞれの時代の物語文学を味わい，その歴史的な流れを理解し，知識を深めることができる。 ◇小テスト，課題，ノート，考査

【数学】

【評価】〇達成:80%以上，△概ね達成:65%以上，×不十分:65%未満
※評価していない資質・能力は斜線

資質・能力		R1評価	内容（〇は全学年，①～③は各学年での観点）
基礎的・基本的な知識・技能		①△ ②〇 ③△	〇数学的活動を通して数学における基本的な概念や原理・法則の体系的な理解を深める。
思考力	批判的思考力・科学的思考力	①△ ②× ③△	①事象とデータやその分析結果を相互に結びつけようとする。 ②事象とデータやその分析結果を相互に結びつけ，傾向や特徴を判断する。 ③事象とデータやその分析結果を相互に結びつけ，データの裏に見える関係等を論理的・科学的に解明する。
	総合的思考力・未来思考力	①△ ②〇 ③△	①学習内容を生活に関連付ける。 ②学習内容を生活に関連付け，発展させ，課題に主体的に取り組む。 ③得られた数値や内容から，数式等を用いて今後の予測を論理的に考える。
コミュニケーション力	語学力	①× ②〇 ③△	①体験から感じ取ったことを数学的に表現する。 ②情報を数学的に分析・評価し，論述する。 ③課題について，構想を立てて実践し，評価・改善する。
	言語的コミュニケーション力	①〇 ②△ ③×	①概念・法則・意図などを解釈し，説明したり活用したりする。 ②互いの考えを伝え合い，自分の考えや集団の考えを発展させる。 ③事象を数学的に表現したり，思考の過程を考え，発表やディベート・討論を行う。
	情報活用力	①△ ②〇 ③△	①グラフや図から適切な情報を読み取る。 ②グラフや図から適切な情報を読み取り，分析や比較する。 ③グラフや図から適切な情報を読み取り，データ解析に活用できる。得られた結果をグラフや図で表現し，他者に伝える。
多様性		①〇 ②△ ③△	①数学的活動を生かしたり，ペア学習で意見を述べ合う。 ②数学的活動を生かしたり，グループ学習で意見を述べ合う。 ③数学的活動を生かしたり，グループ学習で意見の多様性を認め合う。
協働性		①△ ②△ ③△	①グループ学習やペア学習において数学的活動を行う。 ②作業を分担しつつも，互いに協力し合い，数学的根拠を議論する。 ③作業を分担しつつも，互いに協力し合い，数学的根拠を深められる。
行動力		①× ②△ ③△	①様々な事象を数学的な考察をもとに行動しようとする ②様々な事象を数学的な考察をもとに行動する ③様々な事象を数学的な考察から課題解決方法を見つけることができる
◆評価規準　◇評価対象			◆数学における基本的な概念，原理・法則などを体系的に理解し，知識を身に付けている。 ◇中間テスト，考査 ◆数学の論理や体系に関心を持つとともに，数学のよさを認識し，それら事象の考察を積極的活用して数学的論拠に基づいて判断できる。 ◇中間テスト，考査 ◆事象を数学的に表現・処理する仕方や推論の方法などの技能や数学的な見方，考え方を身に付けている。 ◇課題，中間テスト，考査

【地歴・公民】

【評価】〇達成:80%以上，△概ね達成:65%以上，×不十分:65%未満
※評価していない資質・能力は斜線

資質・能力		R1評価	内容（〇は全学年，①～③は各学年での観点）
基礎的・基本的な知識・技能		①△ ②〇 ③〇	①平和で民主的な国家・社会の有為な形成者としての自覚を持つ。 ②世界の歴史を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けさせ，現代の諸課題を知る能力を身につける。 ③現代における政治，経済，国際関係についての諸課題を解決するのに必要な手立てを知る能力を身につける。
思考力	批判的思考力・科学的思考力	①△ ②△ ③△	①歴史的事象や現代の社会現象について自分の意見を論拠をもって話す姿勢を身につける。 ②歴史的事象や現代の社会現象について自分の意見を論拠をもって話す。 〇歴史的事象や現代の社会現象について，課題の設定や資料を用いた追究・調査をし，考察・まとめ・表現・討論（ディベート，模擬投票，模擬裁判など）を行う。
	総合的思考力・未来思考力	①〇 ②〇 ③〇	①歴史的事象や現代の社会現象について，それらの諸課題を解決するための手立てを考える姿勢を身につける。 ②歴史的事象や現代の社会現象について，それらの諸課題を解決するための手立てを考える。 〇歴史的事象や現代の社会現象について，諸課題を解決すべく，他分野からの資料や先行研究等も用いながら，建設的な考察や解決策を論じ，プレゼンテーションを行う。
コミュニケーション力	語学力	①〇 ②〇 ③〇	〇原典・原語を参照しながら、基本的な用語を理解しようとする姿勢を育む。 ②原典・原語を参照しながら、基本的な用語を用いて、社会的な事象・問題を理解しようとする姿勢を育む。 ③原典資料を活用して、社会的な事象や問題への理解を深める。
	言語的コミュニケーション力	①△ ②〇 ③〇	①歴史的事象や現代の社会現象について，自分の意見をプレゼンテーションを行う ②歴史的事象や現代の社会現象について，一つのテーマに対して小グループで話し合いに取り組む 〇歴史的事象や現代の社会現象について，グループごとに意見をまとめ，ディスカッションを円滑に行う
	情報活用力	①△ ②〇 ③〇	①地図，統計表，年鑑，白書，画像，新聞等の読み取り学習を積極的に行う。 ②各種資料を使用しての情報収集，調査，研究を行い，グループごとに論を構築する。 ③パワーポイント等の情報ソフトや機器を活用し，グループごとに意見をプレゼンテーションを行う。
多様性		①〇 ②〇 ③〇	①自国文化や他文化の多様性・複合性について理解を深める。 ②自国文化や他文化における価値について理解し，意見を共有する。 ③自国文化や他文化における価値について理解し，意見の共有をした上で各文化の価値を尊重する。
協働性		①△ ②△ ③〇	①歴史的事象や現代の社会現象について，諸課題に対する問題意識をグループごとに共有する。 ②歴史的事象や現代の社会現象について，一つの課題に対して小グループで話し合いをした上で，結論を出す。 ③歴史的事象や現代の社会現象について，出した結論を集団内で共有し，より高次の解決策や方策を打ち出す姿勢を身につける。
行動力		①△ ②〇 ③〇	①地理的事象や歴史的事象の調査・探究（フィールドワーク）に積極的に取り組む。 ②調査・探究（フィールドワーク）によって得た見識をもとに，グループ内で役割分担をして分析を行う。 ③調査・探究（フィールドワーク）から導いた分析をもとに，プレゼンテーションまでの段取りを円滑に進める。
◆評価規準　◇評価対象			◆主題を設定し，作業的・体験的な学習に主体的に参加している。 ◇ノート，ワークシート，授業での発言 ◆既知の事項をもとに，各事項について構造的に理解し，自分の言葉で表現することができる。 ◇ノート，ワークシート，授業での発言 ◆既知の事項となる言葉の意味，内容，人物，年号等の基本事項が身に付いている。 ◇考査，ノート，ワークシート，小テスト，課題 ◆副教材や補助資料の地図や図版を活用できる。 ◇考査，ノート，ワークシート，小テスト，課題

【英語】

【評価】〇達成:80%以上, △概ね達成:65%以上, ×不十分:65%未満

※評価していない資質・能力は斜線

資質・能力		R1評価	内容(〇は全学年, ①～③は各学年での観点)
基礎的・基本的な知識・技能		①△ ②△ ③△	各科目や校内外における英語を使用しての活動を通じて, コミュニケーション能力を養うという目標のもと, 〇英語学習を通じて, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢を身につける。 〇英語学習を通じて, 「聞く・読む・話す・書く」の4つの技能を統合的に身につける。 〇英語学習を通じて, 適切に構成された言語使用場面の中で, 実際に情報の受け手や送り手となり, インプットとアウトプットを一体化して協働的に取り組む。 全員参加型の英語コンテスト(1・2年), 英語による意見文作成やプレゼンテーション活動への取り組みを通じて, 自分の考えや研究結果を論理的に表現する力を段階的に身につける。
思考力	批判的思考力 ・ 科学的思考力	①× ②△ ③〇	①教科書の内容をもとにして構成されたテーマについて, 賛成・反対の立場をとり, 具体的な論拠を挙げながら自分の意見を述べる。 ②関心のある社会的なテーマについて, 自分の考えを支える情報を的確に選び, 適宜組み入れ, 論理的に自分の主張を述べる。 ③幅広い分野のテーマについて, 英語による意見文やポスター作成, スピーチやプレゼンテーション活動を通じ, 自分や他者の考えや研究を批判的・科学的視点で考察し, よりよいものとなるよう考え, 表現する。
	総合的思考力 ・ 未来思考力	①× ②△ ③△	①教科書で取り上げられているテーマについて, 関連する情報を収集し, 教科書の内容を超えて, 当該テーマの現状や課題などを多面的に捉える ②①に加え, 問題や課題の解決策を, 集めた情報や自分の知識・経験を基にして考える ③②に加え, あるべき未来像とその達成手段などについて考える
コミュニケーション力	語学力	①△ ②△ ③△	①英語の仕組み、言葉の持つ意味や働きを的確に理解し, 多少の誤りを恐れず積極的に活用する姿勢を身につける。 「聞く」…説明や会話をおおよその内容や全体的な流れ, 必要な情報や話し手の主な考えなどの重要なポイントをヒントを頼りにとらえる。 「読む」…重要な事実等や, 登場人物の言動やその理由をとらえながら全体の要旨を理解し, 読んだ内容について賛成や反対などの意見や簡単な感想を述べる。 「話す」…得られた情報や考えに基づき, 互いに質問したり, 個人やグループで意見を交換する。 「書く」…得られた情報や考えに基づき, 平易な表現に置き換えたり, 情報の順序を変えたりして読み手に分かりやすく書く。 ②多様な場面や状況に応じた言語表現を理解し, 活用する。 「聞く」…①と比べ, より専門的な話題についての紹介や討論を聞いて, 情報や考えなどを理解したり, 概要や要点をとらえたりする。 「読む」…何のために読むのかをあらかじめ理解し, 目的に応じて速読や精読を行う。 「話す」…得られた情報や経験したことについて①に加え, 結論をまとめる活動を段階的に行う。 「書く」…得られた情報や経験したことについて①に加え, 書く目的や読み手を明確に設定してから論理性を意識して複数の段落からなる文章で書く。 ③外部との交流のなかで自己の語学力を実践的に活用し, さらなる向上を目指して学び続ける。 「各種技能」…①と②で表現した能力をさらに伸ばし, 実際の社会生活において活用できる英語の能力を身につける。 〇スピーチコンテストの評価や, GTECのスコアシートを利用して, 自分の語学力を客観的に把握し, 学習カウンセリング等を活用しながら学習法の改善や学習意欲の向上を図る。
	言語的 コミュニケーション力	①△ ②△ ③△	英語の音声的な特徴や内容の展開などに注意しながら, ①日常的な話題, 関心のある話題に関して, 自分が何を伝えたいのかを明確にした上で, 対話や英作文を通じ, 相手に伝える。 ②関心のあるテーマについての自分の考えや研究内容を, 内容の構成や発表の仕方を工夫した上で, スピーチやディスカッション, 論文などの形式を用いて相手と伝達し合う。 ③幅広いテーマに関して, 自分の考えや研究内容を効果的に伝えるだけでなく, 表現した内容に対する相手からの質問や意見を理解し, 的確に対応する。
	情報活用力	①× ②× ③△	情報活用の実践力, 情報の科学的な理解, 情報社会に参画する態度をバランスよく育成するために, ①課題や目的に応じて, 必要な情報の主体的な収集を行い、情報モラルや情報に対する責任を正しく理解する。また, 収集した情報を分析し, 取捨選択しながらまとめることが出来る。 ②①に加え, 客観的事実を交えながら, 自分の意見を論理的にまとめ, 「引用」・「出典」・「参考」を正しく用いることが出来る。 ③①・②に加え, 自分の意見に相反する意見についても正しく理解し, 反論を交えながらより説得力のある表現にすることが出来る。 〇情報を活用するために, 図書館や情報処理室の利用方法, パワーポイントやICT機器の基本的な使い方を習得することが出来る。
多様性		①△ ②△ ③〇	①自国の文化や地域へ関心を持つ。また, 英語を共通のツールとして用い, 他者や異なる文化的背景を持つ人と積極的に関わろうとする姿勢を養う。 ②自国の文化や地域について,他者や異文化との比較の中で捉える。また,英語を用いての対話や研修・体験活動を通じ, 国内外の人と直接関わる。 ③地球規模・長期的視点で取り組むべき幅広い分野に関して, 自国の文化や地域を十分に理解し,他者や異文化の持つ多様性を認めながら,建設的な方策を考える。
協働性		①〇 ②〇 ③〇	ペアワークやグループワークを通じ, ①身近な社会問題について, 同じような考えをもつ仲間と協力しながら, より良い考えをまとめることが出来る。 ②関心のある分野について, 解決すべき課題を見つけだし, 自分と同じような考え・自分とは違う考えを持つ仲間との多様性を認め合いながら協働して解決に向けて行動することが出来る。 ③幅広い分野に関して, 協力して課題発見・解決するとともに, その過程・結果に対する他者の意見を理解し, 論理的・客観的な方策を導くことが出来る。
行動力		①× ②△ ③△	①グループごとに関心のある社会問題を見つけ, その解決に向け,役割分担を行い, 方策を考えることができる。 ②グループごとに考えた課題解決法を自分の役割に責任を持ち,実践し,その結果を分析することができる。 ③グループごとに得られた結果を他者に伝え, 広く活用されるよう働きかける。
◆評価規準 ◇評価対象			◆英語によるコミュニケーションに関心を持ち, 積極的に言語活動を行い, コミュニケーションを図ることができる。 ◇スピーキングテスト(ALTとの対話を含む) ◆事実や意見などを多様な観点から考察し, 論理の展開や表現の方法を工夫しながら,英語で伝えることができる。 ◇授業での発言, ノート, ポスター, 論文 ◆英語やその運用についての知識を身につけるとともに, 言語の背景にある文化などを理解している。 ◇考査, 課題(ワークブック等), 小テスト, ワークシート

【理科】

【評価】〇達成:80%以上, △概ね達成:65%以上, ×不十分:65%未満
※評価していない資質・能力は斜線

資質・能力		R1評価	内容(〇は全学年, ①～③は各学年での観点)
基礎的・基本的な知識・技能		①〇 ②〇 ③〇	〇自然事象に関する性質や規則性, 科学的な概念について理解する。 〇観察・実験器具の名称とその扱い方, レポート作成や記録の大切さについて, 理解しまとめる。
思考力	批判的思考力 ・ 科学的思考力	①△ ②△ ③〇	①科学的探究の課題の設定, 観察・実験, 考察, 結論の各段階のトレーニングを行う。 ②得られた実験結果を考察する力を伸長し,研究を深める。 ③観察・実験を増設し, 課題に対する根拠をもって結論に至る。
	総合的思考力 ・ 未来思考力	①△ ②△ ③△	①探究活動, DAL(ディープアクティブラーニング)の設定による総合化と構想力を学ぶ。 ②探究活動, DALの設定による総合化と構想力を深める。 ③探究活動, DALの設定による総合化と構想力を身につけ, 課題解決力を身につける。
コミュニケーション力	語学力	①〇 ②〇 ③×	①観察・実験の結果について的確な言葉を用いて, 表現するためのトレーニングを行う。 ②観察・実験の結果について的確な言葉を用いて, 表現できる。 ③基本的な科学用語の英語表記を学び, 実験方法を英語で表現できる。
	言語的 コミュニケーション力	①△ ②△ ③△	①観察・実験で得られた結果について議論する。 ②観察・実験で得られた結果について議論し, 他者の意見を聞いて, 再度結果を考察する。 ③論文やポスターを作成し,結果を多くの人に伝え, 議論することができる。
	情報活用力	①△ ②△ ③△	①調べ学習を行い, 膨大な情報の中から課題に必要な情報を選ぶことができる。 ②調査・研究で得られた情報を精査し, 有効数字等を考えながら適切に表現できる。 ③観察・実験で得られた結果について, PCを用いて論文やポスターを作成し, 広く研究結果を伝える
多様性		①〇 ②× ③×	①自然システムの説明を重視する。 ②フィールドワーク(特に創造類型)を重視する。 ③フィールドワークの増設(特に創造類型)を行う。
協働性		①〇 ②〇 ③〇	①各観察・実験をグループ内でペアになり、結果から考察を協力して導く。 ②各観察・実験をグループ内で分担し、個別に行い、それぞれの結果や考察を持ち寄り共有する。 ③各自で観察・実験を行い、まとめた考察を他者と共有したり議論したりする。
行動力		①〇 ②〇 ③△	①自然の事物・現象に対して関心や探究心を持つ。 ②自然の事物・現象に対して関心や探究心を持って, 意欲的・科学的に解決しようとする。 ③自然の事物・現象に対して関心や探究心を持って, 意欲的・科学的に解決し, 科学的な自然観を身につける。
◆評価規準 ◇評価対象			◆自然の事物・現象に対して関心や探究心を持ち, 意欲的にそれらを探究するとともに, 科学的態度及び主体的に学習に取り組む態度, 学習意欲を身に付けている。 ◇考査, 小テスト, 実験レポート, ワークシート ◆観察, 実験などの技能を習得するとともに, 目的意識を持って観察, 実験等を行い, 科学的に探究する方法を身に付け, それらの過程や結果を自らの考えで表現できる。 ◇器具の操作, 実験観察計画, 結果の処理, 発表内容

【地域社会研究:1学年】

【評価】〇達成:80%以上, △概ね達成:65%以上, ×不十分:65%未満
※評価していない資質・能力は斜線

資質・能力		R1評価	内容(〇は全学年, ①～③は各学年での観点)
基礎的・基本的な知識・技能		△	①〔海〕海との関わりで, 地域の基本的な課題を理解する。 ①〔課題設定〕中学校での学習や予備調査・講義に基づいて地域課題を設定する。 ①〔研究計画〕具体的な研究計画を立てる。 ①〔研究実行〕アドバイザーやTAによる指導を活用しながら, 適切な方法で研究を行い, 丁寧に記録する。 ①〔まとめ・発信〕報告書やポスターの内容を工夫して作成し, ポスターセッションで発表する。適切に相互評価する。
思考力	批判的思考力 ・ 科学的思考力	△	①〔海〕海と関わる地域課題について, 教科横断的に知識を使い, 科学的に研究する。 ①〔課題設定〕科学的に解決可能な課題を設定する。 ①〔研究実行〕科学的手法を理解する。 ①〔まとめ・発信〕科学的に分かりやすくまとめ, 未解決な課題を明確化する。
	総合的思考力 ・ 未来思考力	△	①〔まとめ・発信〕科学的に, 分かりやすくまとめ, 未解決な課題を明確化する。
コミュニケーション力	語学力	〇	①〔研究立案〕先行研究について講演を聞いたり, 文献を読んだりして基礎的な知識を得る。 ①〔まとめ・発信〕ポスターを使用してのプレゼンテーションを行う。
	言語的 コミュニケーション力	△	①〔研究立案〕研究分野における現状分析から議論をし, 研究を立案する。 ①〔研究実行〕協働的に課題解決に向けて取り組む。 ①〔まとめ・発信〕ポスターセッションの技法を理解し, 質疑に対し, 適切に対応する。
	情報活用力	〇	①〔全体〕新聞や書籍, 講演等から適切な情報を選び出し, 課題の設定・研究・まとめ活動を行う。
多様性		△	①〔海〕調査等を通じ, 海と関わる社会や自然をシステムとして理解する。 ①〔全体〕地域に愛着を持ち, 将来的に地域に貢献したいと考える。 ①〔全体〕多様な意見を取り入れ研究を改善する。 ①〔まとめ・発信〕研究への取り組みや結果を適切に評価する。
協働性		〇	①〔全体〕グループ内やグループ間, 社会との間で情報交換や意見交換を積極的に行う。
行動力		△	①〔全体〕地域の未来像について, 主体的な提案を行う。 ①〔全体〕地域の未来像に向かって, 積極的に行動しようとしている。 ①〔全体〕地方創生イノベーションスクールに積極的に参加する。
◆評価規準 ◇評価対象			◆〔全体〕 地域から地球規模へという広い視野を持ち, 海を起点とした各種課題に関し, 他者や異文化への理解に基づきながら, 協働的・科学的に検討し, 未来に向かって行動しようとする。 〔海〕 海に関わる社会や自然のシステムや課題を, 多面的に理解し, その持続に向けた方策を考え, 行動に移す。 〔研究課題の設定〕 ①予備調査・講義に基づき, 科学的に解決可能な地域課題の設定ができる。 〔研究計画の立案〕 ①具体的な研究計画を立てる。 〔研究計画の実行〕 ① 事実に基づいた研究内容を記録し, 科学的な考察を行っている。 ①外部指導を活用しながら, 科学的手法を理解し, 研究活動に協働的に取り組んでいる。 〔まとめ・発表・発信活動〕 ①研究の内容をグラフやデータ等を用いて工夫してまとめ, 発表している。 ①未解決な課題を明確化している。 ①適切に評価を行うことができる。 ◇自己評価シート, アンケート, ワークシート, ポスター, 論文, 各種発表活動

【課題研究Ⅰ:2学年創造類型】

【評価】○達成:80%以上，△概ね達成:65%以上，×不十分:65%未満
※評価していない資質・能力は斜線

資質・能力		R1評価	内容（○は全学年，①～③は各学年での観点）
基礎的・基本的な知識・技能		△	②〔海〕海との関わりで，課題を発展的に理解する。 ②〔課題設定〕地域社会研究で得られた成果や各教科の学習で得られた知識を用いて，発展的な課題を設定する。 ②〔研究計画〕科学的手法を駆使する研究計画を立てる。 ②〔研究実行〕積極的に研究活動を行う。 ②〔まとめ・発信〕論文作成の方法を理解する。
思考力	批判的思考力・科学的思考力	△	②〔海〕地域社会研究の課題を更に発展させた海に関する課題を設定し，科学的に解決する。 ②〔課題設定〕科学的に解決可能な地域性のある課題や地域からグローバルな視点に移行した課題を設定する。 ②〔研究実行〕科学的手法を効果的に用い，研究結果を論理的に考察を行う。 ②〔まとめ・発信〕科学的視点を持ち，根拠に基づいた発表を行う。 ②〔まとめ・発信〕未解決な課題を明確化する。
	総合的思考力・未来思考力	△	②〔全体〕各教科での学び成果を研究過程に生かす。 ②〔まとめ・発信〕積極的に対外的発表に取り組み，その成果を適切に記録し，伝承する。
コミュニケーション力	語学力	△	②〔研究立案〕先行研究について講演を聞いたり，文献を読んだりして基礎的な知識を得る。 ②〔まとめ・発信〕地方創生イノベーションスクール参加者を中心に，英語による発表・情報交換に挑戦する。 ②〔まとめ・発信〕論理的表現を用い，必要な構成要素を満たした論文を書く。
	言語的コミュニケーション力	○	②〔研究実行〕協働的な課題解決の方法を身につけたうえで研究を行う。 ②〔まとめ・発信〕和文論文やポスターを作成し，それをもとに互いに議論をする。
	情報活用力	△	②〔全体〕書籍や調査，実験結果等から得られたデータを適切に処理・分析し，課題の設定・研究・まとめ活動を行う。
多様性		△	②〔海〕海と関わる社会や自然のシステムを理解し，持続させるための方策を考える。 ②〔全体〕多様な意見を取り入れて研究を継続する。 ②〔まとめ・発信〕評価結果を生かして研究の改善を目指す。
協働性		○	②〔全体〕グループ内やグループ間，学年間や社会との間で，情報交換を積極的に行う。 ②〔まとめ・発信〕地域高校間，小中学校間，SGH・SSH校との間での発表や情報交換を積極的に行う。
行動力		○	②〔海〕地域から地球規模へと視野を広げる。 よりよい未来像について，方策を提案する。 ②〔全体〕高校での各種体験や知識に基づき進路選択を行い，実現に向けた方策を練る。 学びの報告書・学びの設計図の構想を練る。 ②〔まとめ・発信〕学術論文作成や，全国規模で開催している論文大会への応募を行う地方創生イノベーションスクールの成果を国際的に発信する。
◆評価規準　◇評価対象			地域から地球規模へという広い視野を持ち，海を起点とした各種課題に関し，他者や異文化への理解に基づきながら，協働的・科学的に検討し，未来に向かって行動しようとする。 〔海〕 海に関わる社会や自然のシステムや課題を，多面的に理解し，その持続に向けた方策を考え，行動に移す。 〔研究課題の設定〕 ②地域の観点を踏まえ，発展的な課題の設定ができる。 〔研究計画の立案〕 ②科学的手法を駆使する研究計画を立てる。 〔研究計画の実行〕 ② 科学的手法を駆使し，協働的な課題解決の方法を身につけている。 ②科学的手法に習熟している。 〔まとめ・発表・発信活動〕 ② 和文論文の作成技法を理解し，必要な構成要素を満たした科学論文を書いている。 ②ポスターの内容を論理的な構成にしたがってまとめ，効果的な発表の技法に挑戦している。 ②研究内容・成果等を積極的に国内外に発信し，英語による発表・情報交換に挑戦している。 ②改善をめざす評価を行っている。 ②未解決な課題を明確化し，自分の研究を関連づけている。 ②成果を後輩に受け継ごうとしている。 ◇自己評価シート，アンケート，ワークシート，ポスター，論文，各種発表活動

【課題研究Ⅱ:3年創造類型】

【評価】○達成:80%以上，△概ね達成:65%以上，×不十分:65%未満
※評価していない資質・能力は斜線

資質・能力		R1評価	内容（○は全学年，①～③は各学年での観点）
基礎的・基本的な知識・技能		○	③〔海〕海との関わりで，地域・日本・世界の課題を発展的に理解する。 ③〔全体〕世界へ向けて情報を発信する際，英語の学習成果を活用する。 ②〔まとめ・発信〕英語論文作成の方法や発表方法について理解する。
思考力	批判的思考力・科学的思考力	△	③〔海〕海との関わりで，課題を発展的・科学的に解決する。 ③〔研究実行〕課題研究Ⅰで未解決な課題について，様々な視点を加えながら，再度研究する。 ③〔まとめ・発信〕英語を用いた論文作成・発表を行う。 ③〔まとめ・発信〕未解決な課題を明確化している。
	総合的思考力・未来思考力	△	③〔海〕地域・日本・世界の課題について，海との関わりから独自の考えを持つ。 ③〔全体〕学習成果を総合的に活用して，未来について予想し説得力ある説明ができる。 ③〔まとめ・発信〕自らの志と研究とを関連づけ，その成果を適切に保存し，今後研究を継続しようとする姿勢を持つ。
コミュニケーション力	語学力	△	③〔研究立案〕先行研究について海外の文献も読み基礎的な知識を得る。 ③〔まとめ・発信〕専門用語や数字の英語表記について理解しし，英語による論文やポスターを作成する。 ③〔まとめ・発信〕英語によるプレゼンテーションやディスカッションの技法について習得し，実践する。
	言語的コミュニケーション力	×	③〔全体〕世界へ向けて情報発信し，世界の人たちと研究についてディスカッションする。 ③〔研究実行〕研究ノートの記録においても英語を用いる。
	情報活用力	△	③〔全体〕ICT機器，参考文献等の活用に習熟し，課題設定，研究実行，まとめを行う。その際，英語による情報や論文も活用する。
多様性		○	③〔全体〕地域創生に貢献できる方策を考える。 ③〔海〕海と関わる社会や自然のシステムを理解し，持続させるための方策を考え，地球規模の視野に基づき提案する。 ③〔まとめ・発信〕研究成果を，異文化交流や海外研修・連携の際に活用する。
協働性		△	③〔全体〕協働的な取り組み方を研究の手法として身に付ける。 ③〔まとめ・発信〕地域高校間，小中学校間，SGH・SSH校との交流で，協働性を発揮する。 ③後輩を導く具体の行動をとる。
行動力		○	③〔海〕海に関わる社会や自然の課題について，主体的・全球的な提案を行う。 ③〔全体〕研究成果を進路選択に活かす。 ③〔まとめ・発信〕学術論文や全国規模で開催している論文大会に応募する。 ③後輩を導く具体の行動をとる。
◆評価規準　◇評価対象			地域から地球規模へという広い視野を持ち，海を起点とした各種課題に関し，他者や異文化への理解に基づきながら，協働的・科学的に検討し，未来に向かって行動しようとする。 〔海〕 海に関わる社会や自然のシステムや課題を，多面的に理解し，その持続に向けた方策を考え，行動に移す。 〔研究課題の設定〕 〔研究計画の立案〕 〔研究計画の実行〕 〔まとめ・発表・発信活動〕 ③・英語による論文作成・発表活動を積極的に行っている。 ③研究の成果を自らの進路と関連づけている。 ③未解決な課題を明確化し，解決方法を思案している。 ③成果の発表機会においても協働性を発揮し，後輩を導く具体の行動をとっている。 ◇自己評価シート，アンケート，ワークシート，ポスター，論文，各種発表活動

（３）研究開発の成果および今後の課題

１）仮説の検証

【仮説１】「協働型学習プログラム」に取り組むことで，ＧＬとしての思考力，コミュニケーション力，多様性・協働性・行動力を育成できる。

図６，図９，図１２，表１３から，１年「地域社会研究」，２年創造類型「課題研究Ⅰ」，３年創造類型「課題研究Ⅱ」を中心とした協働型学習プログラムがＧＬを育成する上で有効であると考えられる。特に，「地域社会研究」において，１年生全員が地域を起点とし実感を伴った課題研究活動に取り組むことにより，総合的な学習の時間における「学問分野別課題研究（２年人文・理数類型)」や教科の探究型学習など，２年次以降の創造類型以外のプログラムについても効率的かつ効果的に進めることができた。

【仮説２】「東日本大震災復興プログラム」に取り組むことで，大震災の経験を活かすスケールの大きな復興の担い手を育成できる。

志教育，防災教育，地域連携，国内交流を柱としたプログラム展開を行った。生徒の意識調査では「気仙沼地域のために行動しようと考えている」に肯定的に答えた生徒の割合は H28：91%，H29：90%，H30:91%，R1:88%となり，構想段階で目標とした８０％を上回る結果となった。特に，地域連携による社会人との交流や震災交流・各種発表会における同年代との交流から刺激を受け，復興の担い手・未来社会の創造者としての意識が高まり，自主的に研究成果を活かした地域貢献活動を実践する生徒が年々増えていることは大きな成果である。

【仮説３】「教員専門性開発アプローチ」による全校あげての取組，地域と連携した一貫性ある人材育成への取組で，【仮説１・２】に対する活動を一層推進できる。

ＳＧＨ指定からの４年間で課題研究を指導した教員は延べ１０９名となり，新転任者を除きほぼ全ての教員が指導経験者となった。確かに，本校教員は経験の浅い若年層が多い職員集団ではあるが，専門家を講師とした研修会や新旧担当者による指導計画の見直しを繰り返し実施し，アドバイザーの指導助言を活用することで研究活動の質を向上させている。また，気仙沼市役所，気仙沼市教育委員会，地元企業・ＮＰＯ法人との連携により，ユネスコスクールとしての取組も充実・発展し，【仮説２】で記載した生徒の自主的な社会貢献活動が増えるなど，幼保小中高が連携した「気仙沼ＥＳＤ」最終段階としての人材育成の成果が現れている。

２）全体的な成果

○意識の変化

・これまで８つの事業からなる２つのプログラム（p. ４ポンチ絵を参照）を展開してきているが，３年生の調査結果から，グローバル社会で通用する人材になりたいという意識を高めつつ，ＧＬの育成が図られていると評価している。創造類型の希望者も１学級相当の数を確保できている（H29：34 名→H30:37 名→H31:38 名→R2:38 名)。最終年度は研究開発完了報告書の８に記載した課題に取り組み，さらに発展した事業を展開していきたい。

・「卒業後，気仙沼高校の教育活動に関わりたいと思いますか？」という調査では，１３名が「課題研究活動のアドバイスや伴走者をしてみたい」，１１名が「社会人講話などの講師として話をしてみたい」，４１名が「場所の提供や活動資金など間接的に協力したい」と答えている。昨年度より総数は減少しているが，ＯＢ・ＯＧとして母校に対し貢献したいという意欲は感じ取ることができる。

・学校評価の質問８「地域のニーズや期待，伝統などに根ざした特色ある学校づくり」についての肯定的回答が生徒・保護者ともに増加傾向にある。公開発表会を中心とした本校の取組・普及の効果の現れであると認識している。

・学校全体でＳＧＨ事業に取り組む体制が整ったと思われる。教員を対象とした学校評価の質問１７「ＳＧＨ事業が学習意欲に結びついている」の肯定的回答は９１．３％となり，ＳＧＨ事業がほとんどの教員にとって有効なものとして認識されている。

３）主な課題および改善点

①評価内容・方法の見直し

・スモールステップ表に基づき，教科や課題研究におけるＧＬ達成度の評価を実施したが，教科内検討の時間を十分に確保することができず，また，評価方法を一任する形となり，結果として評価の緻密

さに欠ける面があった。教科の特性により，全てのＧＬを効果的に育成することが難しいという声もあり，スモールステップの内容および評価方法を検討していきたい。

②台湾研修のあり方

・今年度台湾研修を２年生創造類型全員参加となったため，多くの生徒が海外を経験することができ，研修の各場面で級友と協力する様子が見られた。一方で，特に英語でのやりとりが必要な場面において，英語の苦手な生徒が得意な生徒に頼ってしまい，英語を話さないまま終わってしまう場面も多く見られた。したがって，生徒全員が英語でのやりとりをできる方法を準備することが課題となる。また，事前指導・連携校との交流内容・事後指導の在り方を見直し，課題研究との関連性をさらに高められるようにしていきたい。指定終了後の海外研修の在り方については，次年度具体的に検討を進める。

③課題研究とその他の要素との関連性

・学校評価「課題研究を通して身近なものに疑問を持つようになった」の生徒の肯定的回答は１年生６２．８％，２年生５４．０％，３年生５７．６％であった。「何のために研究をするか」という目的意識をしっかりと持ち，課題研究自体が目的にならぬように，普段の生活・課題研究・教科指導の関連性を高める必要がある。

課題研究活動

１－１　学校設定科目「地域社会研究」

（１）目標

地域の海を素材として，多様な地域課題を理解させるとともに，科学的探究の各段階の手法を身に付けさせながら，批判的・科学的思考力，プレゼンテーション能力を中心としたコミュニケーション力を育成する。

（２）対象学年

１学年２４１名

（３）内容

水曜日６校時に地域社会研究を配置し，表１－１の内容で全６５時間実施した。テーマ設定までは「研究を行う意義」や「テーマの探し方」，「研究を進める上でのさまざまな技術」について学んだ。

７月に，５領域２４分野から希望をとったうえで，３～７名の班を作った。各班に１名ずつ教員を配置し，指導や評価，フィールドワークの引率を担当した。各班が取り組んだテーマが表１－２になる。

表１－１　実施内容一覧

月	学習テーマ	学習内容	時数
5	ガイダンス	地域社会研究の概要について理解する。	2
	①地域理解講座	地域が抱える課題や現状についての講演をきき，今後の研究テーマ決定への準備を進める。	5
6	②テクニカル講座	研究を進めるうえで必要となる技術について学ぶ。	3
7	研究領域とテーマを知る	研究活動の導入を体験し，研究分野を決定する。	1
	課題テーマの決定	前回学んだ手法とコンピュータを使い，研究テーマの焦点を絞る。	2
	③「研究の進め方」講演会	研究の意義，テーマの探し方，研究全体にわたるスキルを学び，研究内容を向上させる。	2
	④震災・防災講演会	災害安全・生活安全における自助のための知識を得る。	2
8	⑤課題図書レポート	研究領域に関わる課題図書を読み，研究テーマとの接点を探りながらレポートを作成する。	-
	研究計画書の作成	研究計画書を作成し，今後の計画への見通しを立てる。	2
9	フィールドワーク事前調査	質問事項を整理する。	1
１０	⑥フィールドワークⅠ	市内施設等を訪問し，研究に関する新たな知識を得る。	3
	グループ研究α	中間発表会に向けて研究計画を見直す。	2
	グループ研究α	担当教員の指導を受けながら，研究を深める。	2
	校内発表会見学	２～３学年の発表を見学する。	1
	グループ研究α	中間発表会に向けてスライド作成の等準備を進める。	2
１１	グループ研究α	中間発表に向けて，口頭発表や質問の仕方を学習する。	2
	グループ研究α	２年生の研究発表を見学し，今後の研究の参考にする。	2
	⑦中間発表会	パワーポイントを用いて，ここまでの研究成果について口頭で発表する。	3
１２	グループ研究β	担当教員から助言を受け，研究を深める。	2
	グループ研究β	フィールドワークに向けて準備を進める。	2
	⑧フィールドワークⅡ	課題研究のテーマに関連する施設や大学での指導を受けることで，研究内容をより高いものにする。	4
	グループ研究β	フィールドワークを受けて，研究を深める。	2
1	グループ研究β	発表会に向けて，ポスターの完成を進める。	1
	グループ研究β	口頭発表の準備やポスターの修正を行う。	2
	領域発表会	担当教員に向け，ポスター発表を行い，助言を受ける。	2
	⑨学年発表会	ポスターセッションにより，研究成果を発表する。	4
2	まとめ	資料やデータの整理を行う。	1

表１－２　研究領域とテーマ一覧

領域		班名	テーマ	人数
海と産業	海洋資源	112-1A	どのようにすれば気仙沼の定住者を増やすことができるのか	6
	海洋資源	112-1B	観光客を呼び込むには何をすべきか。	6
	海洋資源	112-1C	観光業を盛り上げるために気仙沼の高校生にできること	5
	海洋資源	112-1D	観光客を気仙沼によびこむには？　～高校生が創る気仙沼HP	5
	観光業	134-2	海洋資源と観光キャラクターなどを利用して観光業を発展させる	7
	商業・商店街	134-3	気仙沼の商店街を活性化させることで気仙沼は発展するのか	5
	交通	134-4	“気仙沼”の観光を推進させる産業を生かした取り組みとは	3
	海洋資源	156-1	気仙沼で未利用な資源をどう活用できるか。	4
	観光業	156-2A	気仙沼を活性化することで観光客は増えるのか	6
	観光業	156-2B	気仙沼に訪れた観光客を，地域ならではのイベントを行うことによってリピーターにさせることは可能か	5
	交通	156-4	BRTの第二の活用法	3
海と人間	教育・スポーツ	112-6A	どうすれば海外から観光客を呼び込むことができるか	7
	教育・スポーツ	112-6B	どのようにすれば，気仙沼をスポーツで活気づけることができるか	7
	保健・医療・福祉	112-7	気仙沼の保育環境を整えるためには	5
	人口・過疎	134-5	気仙沼の魅力とは何か。また、気仙沼の魅力を発信することで過疎化にどのような影響があるのか。	5
	教育・スポーツ	134-6A	スポーツ企画を利用し，気仙沼外から人を呼び込むには？	7
	教育・スポーツ	134-6B	教育やイベントを通して気仙沼の子どもの社会性を高めるには	7
	保健・医療・福祉	134-7	気仙沼の小児科の待ち時間を有効に使うには	4
	人口・過疎	156-5A	Uターン者が及ぼす人口減少への影響とは	5
	人口・過疎	156-5B	人口流出を抑えるにはどうすればよいか。	4
	保健・医療・福祉	156-7	福祉の従事者の負担を軽減させるのにコミュニケーションは有効な手段か。	7
	コミュニティ	156-8	学校と地域の連携を高めるために高校生が出来ることは何か	4
海の文化	伝統文化	112-9A	伝統行事，伝統文化を継承して気仙沼を活性化(観光客増加，商売繁盛)できるか。	5
	伝統文化	112-9B	気仙沼の漁業を観光業に生かすことによって発展につなげるには	5
	国際化	112-12	外国人誘致と防災	5
	伝統文化	134-9	みなとまつりを通して，気仙沼の伝統文化を継承し気仙沼を活性化させるためには。	4
	衣・食・住	134-10A	郷土料理が，身近に感じられ次世代へとつなげていくためには。	5
	衣・食・住	134-10B	これからの漁業がどう発展することが気仙沼にとって有益なのか	4
	国際化	134-12	気仙沼の良さを伝えるには	6
	伝統文化	156-9	みなと祭りは他市が気仙沼を知るための魅力になっているのか	5
	衣・食・住	156-10	気仙沼が今，行っている漁業（こと）は伝統文化として語り継いでいけるか	5
	国際化	156-12A	外国人と気仙沼の人達をつなぐために私たちができることは何か。	5
	国際化	156-12B	観光客とバス利用者を増やすためにできることとは	4
三陸の自然	エネルギー	112-14	リアス海岸の活用法を増やすことによる地域のこれから	3
	環境	134-13	今，私たちが海のごみを減らすためにすべき保全活動とは	3
	三陸の海	134-15	気仙沼の海の生態系の変化に対してどのような対応をすべきなのか	7
海と防災	地震・津波	112-17	東日本大震災によって気仙沼の漁業は変わったのか	6
	震災の記録・伝承	112-18	浸水水域に建物を再建するのはなぜか。	3
	防災教育	112-19	減災につながった取り組みとは	6
	減災	112-22	災害から得た教訓を減災につなげるためには	4
	災害医療	112-23	気仙沼で外国人が災害に遭った時のための体制は十分なのか	3
	減災	134-22	次に来る100年に一度の規模の津波の被害を抑えるために私たちができること。	7
	災害医療	134-23	気仙沼の医療従事者を増やすために高校生ができること	6
	防災教育	156-19	東日本大震災遺構・伝承館が果たす役割と人々に与える影響・効果とは何か	3
	復旧・復興	156-20	避難所での子供の心のケアのために私たち，そして大人ができることはあるか。	3
	減災	156-22	防災クイズを作り，知識を高められるか	5
	災害医療	156-23	気仙沼（被災地）の心のケアについて	5
	心のケア	156-24	被災地の高校生がどのような防災教育をすべきか	7

（４）具体の内容

①　地域理解講座

ねらい：地域が抱える課題や現状について地域で活躍されている方を講師としてお招きし，講演していただく。この講座を通して，講話の中から興味が湧いたテーマや関心が高まったキーワードを書き出し，今後の研究テーマ決定に活かせるようにする。

日　時：５月１５日（水）５～７校時，２２日（水）６～７校時

講　師：「海と産業」　気仙沼市役所　産業再生戦略課主幹　小松　志大　氏
「海の文化」　リアス・アーク美術館　副館長兼学芸係長　山内　宏泰　氏
「海と防災」　気仙沼市役所　危機管理課主幹兼防災情報係長　小山　隆晴　氏
「海と人間」　気仙沼市役所　震災復興企画部長　小野寺憲一　氏
「三陸の自然」　ＮＰＯ法人・森は海の恋人　研究員　白幡　勝美　氏

総　括：研究活動を始めるにあたって，気仙沼が抱える諸課題を意識することができる最適な講座だと感じた。今年度は，生徒が５領域すべての講話を受けることで，さまざまな視点から気仙沼をとらえることができた。

②　テクニカル講座

ねらい：課題研究を行う上で必要となる，情報検索方法の種類や媒体による特徴の理解，各システムの使い方，文章の書き方について学ぶことで，今後研究を進める上での基礎知識・技能を身につけさせる。

日　時：６月１９日（水）　５～７校時

内　容：３講座を２クラスずつローテーションで受講

講座名	会場	担当教員
A：IT 活用講座	第１・２ＰＣ室	鮎貝（情報科）・内海秀（研究企画部）
B：図書情報講座	視聴覚室	山本（図書情報）・二階堂（司書教諭）・菊田（司書）
C：レポート文章講座	大講義室	金谷・髙橋健（国語科）

A：IT 活用講座
インターネットを用いての情報検索方法，新聞データベース検索，論文検索について学ぶ。

B：図書情報講座
書籍分類や探し方，校内外の蔵書検索方法について学ぶ。

C：レポート文章講座
思考方法の広げ方，説得力ある意見文の書き方について学ぶ。

総　括：さまざまな技術について学んだことで今後の研究活動の円滑化の一助になると感じる一方，インターネットに重きを置きがちにならないよう，文献調査の重要性なども強調すべきだと感じている。

③　「研究の進め方」講演会　※２学年創造類型の生徒とともに

ねらい：２年生・１年生ともに研究を本格化させるこの時期に，研究全体にわたるスキルを学び，研究内容を向上させる。また，本校職員の課題研究指導力向上の機会を設けるとともに，気仙沼市内の学校の先生方にも参加してもらい，課題研究指導における気仙沼市内全体のボトムアップにつなげることをねらいとする。

日　時：７月１２日（金）　６，７校時
※１６：１０～１７：１０　「教員対象講演会」も開催

講　師：東北大学大学院生命科学研究科　准教授　酒井　聡樹　氏

内　容：研究の意義や方法，テーマ設定の工夫，効果的なまとめ方（ポスター・スライド作成），論文作成の大切さなど。

総　括：そもそも「研究」とは何なのか，何を調べることが研究となるのかという根本的なものから，研究の進め方やその発表の仕方について，わかりやすく説明していただいた。生徒だけではなく，教員も含めて，この後の研究活動をどのように進めていくべきなのかということについての指針を得ることができる良い機会となった。

④　震災・防災講演会

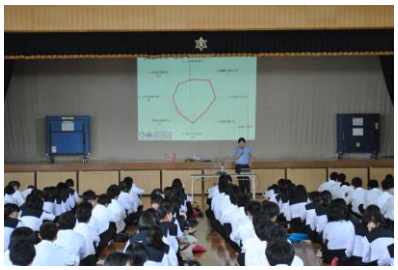
ねらい：災害安全・生活安全における自助のための知識を身につけさせる。また，将来直面する課題に対し，適切な意志決定を行い，的確な行動が選択できる能力を育成する。

日　時：７月１７日（水）　６，７校時

講　師：東北大学災害科学国際研究所　准教授　佐藤　翔輔　氏

内　容：講演「災害科学の超基礎＋α」
ワークショップ「講演内容をワークショップで振り返る」

総　括：震災から数年が経ち，次第に薄れつつある防災意識をもう一度高める良い機会となった。また，被害をどうすれば最小限に食い止めることができるかという「減災」という考えがあることを知ることもでき，今後の研究に生かせる有意義な取り組みだった。



⑤ 課題図書レポート

ねらい：研究テーマに関する知識や視点を増やす

内　容：夏季休業中に課題図書を１冊以上読み，レポート提出を提出。図書館から借用する以外で，自ら用意した図書を用いたい場合は，担当教員に申し出て，許可をもらう。

日　程：　７月１０日（水）・１６日（火）　　生徒による下見
７月２４日（水）　　課題図書貸し出し
８月２０日（火）　　レポート提出締切
１０月３０日（水）　　担当者による評価・返却

総　括：研究テーマがまだはっきりと決まっていない中で，どの図書を選ぶべきか迷った生徒は少なくなかったように思われる。今後は年間指導計画を見直し，適切な時期を検討していきたい。

⑥　フィールドワークⅠ

ねらい：研究のテーマに関連する市内施設・企業等を訪問し，研究を深める新たな知識を得る。

日　時：１０月２日（水）　５～７校時

内　容：市内施設や企業からのその分野における現状や課題の説明を受ける。または，質疑応答を通して，研究を行う上での助言を受ける。

１３：００　方面別に学校出発（バス６台）
１３：３０　訪問
１５：００　終了・移動
１５：３０　学校到着・点呼

場　所：気仙沼市役所（計４２名）
水産課（２６名），地域づくり推進課（９名），総合交通政策室（７名）
気仙沼市教育委員会（４２名），一般社団法人まるオフィス（２０名）
気仙沼商工会議所（１９名），気仙沼市立病院（１３名）
気仙沼児童センター（気仙沼市役所子ども家庭課）（１２名）
みやぎ心のケアセンター気仙沼地域センター（８名）
気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館（気仙沼市役所企画課）（３名）
学校（気仙沼市役所危機管理課・観光課）（８２名）

総　括：（６）全体的な総括を参照

⑦ 中間発表会

ねらい：これまでの研究を口頭で発表し，生徒やアドバイザーから助言をもらうことで，研究をより深化させる。

日　時：１１月１３日（水）　５～７校時

内　容：１０枚程度のスライドを発表する。発表５分・質疑応答２分・指導助言３分。

教室割・アドバイザー一覧

	題数	人数	会場	アドバイザー	担当教員
教育・スポーツ	9	51	大講義室	認定ＮＰＯ法人底上げ　理事 成宮　崇史　氏	内海秀 芳賀弘 高橋唯
地域資源・伝統	9	49	生物室	東北工業大学工学部　教授 上杉　　直　氏	織田 袖野 最上龍
地域活性化･観光	10	48	視聴覚室	東北工業大学ライフデザイン学部　教授 小祝　慶紀　氏	佐藤佑 小野寺将 菅原希
海洋資源・環境	10	47	物理室	東京海洋大学　准教授 川名　優孝　氏	石山 山本 金谷
防災・減災・医療	10	46	地学室	東北大学災害科学国際研究所　准教授 佐藤　翔輔　氏	大沼宏 芳賀雅

※小会議室：講師控室　　参観者控室：作法室

総　括：（６）全体的な総括を参照

⑧　フィールドワークⅡ

ねらい：大学や市内事業所等へ出向き，さまざまな知識を得ることで，研究を深化させる。

日　時：１２月１４日（土）

●大学グループ（計７６名）

号車	人数	フィールドワーク先
1	52	東北大学災害科学国際研究所
2	24	宮城教育大学

７：３０　気仙沼高校発（友愛団地・階上公民館・津谷・志津川で途中乗車）
１０：３０　各大学着（研究室等訪問）
１３：００　各大学発（志津川・津谷・階上公民館・友愛団地で途中降車）
１６：００　気仙沼高校着

●市内活動グループ（計６５名）

号車	人数	フィールドワーク先
3	39	気仙沼市魚市場，気仙沼観光コンベンション協会
4	19	気仙沼商工会議所，BRT 営業所
徒歩	7	リンデンバウムの杜

８：３０　学校へ登校　その後フィールドワーク先へ移動
１２：２０　現地解散

●国際理解セミナー（計１００名）

気仙沼市震災復興・企画部地域づくり推進課と外国人講師の方８名（アメリカ・中国・ウクライナ・台湾・フィリピン・インドネシア）を招き下記の時程で交流を行った。

時程	内容	形態	詳細
9:00～9:15	開会行事 講師紹介	一斉	外国人講師の紹介
9:15～9:45	交流会	グループ	外国人の方からのお話（気仙沼で驚いたことや日本・気仙沼で暮らしてみて感じたこと等）
9:45～10:35			生徒からの質問
10:35～10:55	休　憩・フリータイム		
10:55～11:00	閉会行事	一斉	閉会行事終了後に事務手続きを行う

総　括：（６）全体的な総括を参照

⑨　学年発表会

ねらい：研究の成果をポスターを用いて発表し議論することで，今後の研究に向けて課題を見つけるとともに，発表する態度や聞く姿勢について学ぶ。

日　時：１月２５日（土）

内　容：ポスターセッションによる発表。全４８班をＡ～Ｃの３グループに分け，各グループで発表５分，質疑４分で同じ内容を４回発表する。発表時間以外は，聴衆としてその時間にやっている発表を自由に見学する。

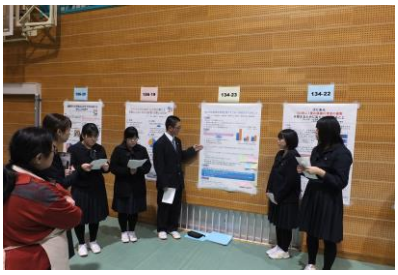
地域社会研究担当教員が審査をし，各領域から優秀賞・優良賞を１班ずつ選出する。

１０：００　開会行事
１０：１５　第①セッション（４０分間）
１１：００　第②セッション（４０分間）
１１：４０　休憩
１１：５０　第③セッション（４０分間）
１２：３０　ポスター撤去・ワークシート記入
１２：３５　閉会行事

受賞班

領域	賞	班	タイトル
海と産業	優秀賞	156-2B	気仙沼に訪れた観光客を，地域ならではのイベントを行うことによってリピーターにさせることは可能か
	優良賞	156-4	BRT の第二の活用法
海と人間	優秀賞	156-5B	人口流出を抑えるにはどうすればよいか。
	優良賞	134-6A	スポーツ企画を利用し，気仙沼外から人を呼び込むには？
海と文化	優秀賞	134-9	みなとまつりを通して，気仙沼の伝統文化を継承し気仙沼を活性化させるためには。
	優良賞	112-12	外国人誘致と防災
三陸の自然	優秀賞	134-15	気仙沼の海の生態系の変化に対してどのような対応をすべきなのか
	優良賞	112-14	リアス海岸の活用法を増やすことによる地域のこれから
海と防災	優秀賞	156-22	防災クイズを作り，知識を高められるか
	優良賞	156-19	東日本大震災遺構・伝承館が果たす役割と人々に与える影響・効果とは何か

総　括：ポスターデザインがこれまでよりも見やすくなっているという評価が見られた一方で，結論ありきでの論理構成，テーマと結論の矛盾など，内容面ではまだ改善すべき点が見られた。年間での指導内容をいま一度精査し，研究を行ううえでの論理的な考え方などが身につくような指導をしていきたいと考える。



（５）評価について

学校設定科目であることから，表１－３の観点により表１－４の配点で評価を行った。課題図書レポートやフィールドワークなど，活動ごとにルーブリック表を用いて，担当教員によって，できるだけばらつきが出ないように評価している。

今年度も昨年度同様，学年発表会実施前に，担当教員を対象に，ルーブリック評価研修会を実施した。昨年度の発表映像や実際に使われたポスターを用いて，各評価項目で判断にばらつきが生じる可能性がある点について整理した。

学年発表当日は担当教員２名を１班とし，４班ずつを割り当て，評価した。

表１－３

評価項目（観点）	具体的な活動
a 地域課題を理解している。	地域を起点とした課題に対して，他者や異文化への理解に基づきながら，協働的・科学的に検討し，未来に向かって行動しようとする。中学校での学習や予備調査・講義に基づき地域課題を設定する。
研究手法を身に付けている（①知識・技能）	先行研究について新聞や書籍，講演等から適切な情報を選びだしたり，講演を聞いたり，文献を読んだりして，基礎的な知識を得る。アドバイザーやＴＡによる指導を活用しながら適切な方法で研究を行い，丁寧に記録する。
b 批判的・科学的思考力を身に付けている（②思考・判断・表現）	地域課題について，教科横断的に知識を使い，科学的に研究する。未解決な課題を明確化する。対話を通じて批判的にテーマについて考え，研究をより良いものとするよう努力する。研究活動を通じて，論理的に研究を深める力を養う。
c 主体的に解決しようとする態度を身に付けている（③主体的に学習に取り組む態度）	社会や地域が抱える諸課題について関心を持ち，主体的に解決しようとする態度を養う。設定したテーマに関して探究的に取り組む。ポスターセッションやオーラルセッションなどのプレゼンテーションの技法を理解し，相手に適切に伝えるとともに，質疑に対し適切に対応する力を身に付ける。また聞き手として，種々の疑問に対して自ら発問し，議論していく積極的な姿勢を養う。

表１－４

			a	b	c	小計
６月	テクニカル講座	ワークシート	3			3
夏休み	課題図書	レポート	3	4		7
８月	研究計画書	研究計画書の内容	3			3
10 月	フィールドワーク①	事前事後レポート	4			4
11 月	創造類型発表会	ワークシート	3			3
12 月	中間発表会	感想用紙，聞く態度		3	3	6
12 月	フィールドワーク②	事前事後レポート	4			4
１月	領域発表会	論の構成，発表態度	１５	5	１５	３５
	学年発表会	論の構成，発表態度	１０	１０	5	２５
		感想		3	3	6
２月	まとめ	ファイル	4			4
			４９	**２５**	**２６**	**１００**

（６）全体的な総括

別紙１－１の集計結果が別紙１－２となっている。

Q2 において，生徒が最も有意義だったと解答したものは「フィールドワークⅡ」だった。「地域理解講座」や「研究の進め方講演会」に比べ，２回の「フィールドワーク」や「学年発表会」を有意義だと答える割合が高い。これらのイベントが，研究活動が本格的に開始される夏季休業以降であるという開催時期の影響もあるだろう。しかし，大学や企業に実際に足を運んで生の声をきくことや，多くの聴衆の前で自分たちが構築した理論を発表するという経験は生徒たちにとって，普段は経験できない大きな刺激になったのではないだろうか。

Q3 では，地域社会研究の学習を通して身についた能力として，「情報活用力」や「協働性」を挙げる割合が高かった。年間を通して，学習活動の中でインターネットの検索やグループでの発表の練習に充てる時間が多かったことを考えると，この結果は妥当であると考える。一方で，「思考力」や「コミュニケーション能力」，「行動力」に関してはまだ十分ではないと答える傾向がみえた。

思考力の育成については，年間学習計画の見直しが必要であると考える。論理の飛躍がみられるという点は昨年度も助言者から指摘されたものであり，十分な改善がなされていない。「どのようにテーマを設定すればよいのか」「自分たちが考えついた結論が本当に立証できるのか」ということをグループで考える時間は，学習計画全体の中で圧倒的に少ないと言わざるをえない。１単位という限られた学習時間のなかで，どのように論理的思考力を育成するか，他教科との連携を図りながら改善していかなければならない。

一方で，コミュニケーション能力や行動力が身についていないと答える割合が高いことについては，前向きにとらえることもできるのではないだろうか。自らの考えを多くの聴衆の前で発表すれば，「伝える力が不足している」「もっとこのような研究活動をしておけばよかった」という感想をもつのは自然な反応であると考える。今後，私たち指導する側がなすべきことは，むしろこのような自分の能力の不足を感じさせる機会を，生徒たちにより多く経験させることだろう。学習計画の中で，自分の考えた論をブラッシュアップさせていくような活動，生徒たちの知的好奇心を刺激するような活動をより多く設定し，より有意義なものにしていかなければならない。

地域社会研究　事後アンケート

1

Q1　将来、震災復興や地元のために貢献したいと思いますか。

- ○　貢献したいと強く思う
- ○　できれば貢献したい
- ○　あまり貢献したいとは思わない
- ○　まったく貢献したいとは思わない

Q2　地域社会研究で、有意義だったイベントを選んでください。（複数解答可）

- ○　地域理解講座（5月　5領域に関する講演）
- ○　テクニカル講座（6月　文章の書き方・情報の調べ方・図書館の活用）
- ○　研究講演会（7月　東北大学大学院准教授　酒井聡樹氏の講演）
- ○　防災講演会（7月　東北大学災害科学准教授　佐藤翔輔氏のワークショップ）
- ○　課題図書レポート（夏休み）
- ○　フィールドワーク①（10月　市内各企業・事業所）
- ○　中間発表会（11月　スライドによる発表）
- ○　フィールドワーク②（12月　大学・市内・国際理解）
- ○　領域発表会（1月　本校各教室）
- ○　学年発表会（1月　本校体育館）

Q3　あなたは、次の能力や姿勢について、どの程度身につきましたか。あてはまるものにマークしてください。

		十分身についている。	まあまあ身についている。	あまり身についていない。	まったく身についていない。
基礎的・基本的な知識・技能	地域の基本的な課題を理解し、具体的な研究計画を立てることができる。担当教員やアドバイザーによる指導を活用しながら、適切な方法で研究を行い、丁寧に記録できる。	○	○	○	○
批判的思考力 科学的思考力	地域課題について、教科横断的に知識を使い、科学的に研究する手法を理解している。論理的に分かりやすくまとめ、未解決な課題を明確化することができる。	○	○	○	○
総合的思考力 未来思考力	過去や現在、世界の状況を踏まえて、気仙沼や日本のあるべき未来像を創造し、シミュレーションすることができる。	○	○	○	○
語学力	先行研究について講演を聞いたり文献を読んだりして、要約をしたり自分の考えを書くなど、基礎的な知識を得ている。ポスターを使用してのプレゼンテーションを行う語学力がある。	○	○	○	○
言語的コミュニケーション力	希望する研究分野における現状分析から議論をし、研究を立案することができる。ポスターセッションの技法を理解し、質疑に対し、適切に対応することができる。	○	○	○	○
情報活用力	新聞や書籍、講演等から適切な情報を選び出し、課題の設定・研究・まとめの活動に活かすことができる。	○	○	○	○
多様性	地域に愛着を持ち、将来的に地域に貢献したいと考える。多様な意見を取り入れ研究を改善することができ、研究への取り組みや結果を適切に評価することができる。	○	○	○	○
協働性	他者の考えを理解し、グループ内やグループ間、社会との間で情報交換や意見交換を積極的に行うことができる。	○	○	○	○
行動力	地域や日本の未来像について主体的な提案を行い、地域の未来像に向かって、積極的に行動しようとしている。外部発表会などのイベントに積極的に参加したいと考えている。	○	○	○	○

別紙１－２　別紙１－１の事後アンケートの結果（回答数２２１　回答率９２％）

Ｑ１　将来，震災復興や地元のために貢献したいと思いますか。

	人数	割合
貢献したいと強く思う	41	17.9%
できれば貢献したい	168	73.4%
あまり貢献したいとは思わない	18	7.9%
まったく貢献したいとは思わない	2	0.9%

Ｑ２　研究を進める上で，有意義だったイベントを選んでください（複数回答可）。

		地域理解講座	新聞活用講演会	震災・防災講演会	テクニカル講座	課題図書レポート	ＦＷⅠ	研究の進め方講演会	中間発表会	ＦＷⅡ	領域発表会	学年発表会
R1	人数	19		28	42	19	124	16	47	140	28	128
	割合	8.3%		12.2%	18.3%	8.3%	54.1%	7.0%	20.5%	61.1%	12.2%	55.9%
H30	人数	41	7	13	49	15	128	51	90	135		114
	割合	17.3%	3.0%	5.5%	20.7%	6.3%	54.0%	21.5%	38.0%	57.0%		48.1%
H29	人数	34		18	27	11	126		58	103		84
	割合	17.3%		9.2%	13.8%	5.6%	64.3%		29.6%	52.6%		42.9%

Ｑ３　次の力を現時点で持っていると思いますか。あてはまるものにマークしてください。
（①：十分持っている　②：まあまあ持っている　③：あまり持っていない　④：まったく持っていない）

	①		②		③		④	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
基礎的・基本的な知識・技能	42	17.7%	180	75.9%	11	4.6%	1	0.4%
批判的思考力・科学的思考力	22	9.3%	155	65.4%	51	21.5%	3	1.3%
総合的思考力・未来思考力	39	16.5%	128	54.0%	64	27.0%	2	0.8%
語学力	38	16.0%	154	65.0%	39	16.5%	0	0.0%
言語的コミュニケーション力	34	14.3%	130	54.9%	62	26.2%	3	1.3%
情報活用力	54	22.8%	156	65.8%	18	7.6%	0	0.0%
多様性	48	20.3%	152	64.1%	28	11.8%	2	0.8%
協働性	77	32.5%	128	54.0%	20	8.4%	3	1.3%
行動力	29	12.2%	108	45.6%	87	36.7%	7	3.0%

１－２　学校設定科目「課題研究Ⅰ」

（１）目標

地域の海を素材として，多様な地域課題を理解させるとともに，科学的探究の各段階の手法を身に付けさせながら，批判的・科学的思考力，プレゼンテーションする力を中心とするコミュニケーション力を育成する。

（２）対象学年

第２学年創造類型３８名

（３）内容

火曜日６校時，金曜日７校時に課題研究Ⅰを配置し，７２時間実施した。また，他類型が総合的な学習の時間で課題研究をおこなった１１時間も，創造類型の生徒が自らの研究を進める時間として活用した。地元の自然に触れ合うフィールドワークⅠを実施し，ＳＤＧｓについての理解やクリティカルシンキング育成の授業を経てから，個人でテーマ設定を行った。７月のフィールドワークⅡで，大学の先生から助言をもらい，研究を行う流れを組んだ。担当教員を８名配置し，教員１名につき４，５名の生徒を担当して日々の指導や評価に当たった。中間発表会，秋以降の外部発表会に参加することで，プレゼンテーション能力の伸長をはかった。１２月の台湾研修は今年度から３８名全員参加となり，英語での研究発表や交流を通して，コミュニケーション力を伸ばすとともに，各生徒の研究に海外との比較という視点を取り入れるきっかけを作れるようにした。１月の学年発表会を１つの目標とし，発表を行った。その後，論文執筆活動を行うことで，研究をまとめるとともに，次年度に向けての課題や目標を見つめる。

表３－１　実施内容一覧

月	学習テーマ	学習内容	時数
4	ガイダンス 昨年の振り返り	課題研究Ｉの授業のねらいや，１年の流れを知る 昨年の研究を振り返り，今年の研究のヒントを得る	2
	ＳＤＧｓについて	ＳＤＧｓについて知り，テーマ設定の参考とする。	1
	思考ツールを学ぶ	論理的な物事の考え方について理解する。	1
	先行研究調査	昨年度の課題研究Ｉの論文を読むことでテーマ設定の参考とするとともに，文献を読み方を学ぶ。	1
	言葉の定義・反証可能性	言葉の定義の重要さや，反証可能性の必要さを学ぶ	1
5	ケースメソッド 疑問に持つ力	ケースメソッドを行って，問いを立てる力や，様々な視点から物事を考える力を養う。	2
	フィールドワークⅠ	研究を行う上での心構えを学ぶと同時に，地域にある研究素材について理解し，今後の研究テーマのヒントを得る。	3
	テーマ絞り・研究計画書	昨年度の研究課題やこれまでのテクニカル講座をもとに，研究テーマを見つけていく。	2
6	テーマ発表会	テーマを発表し，他者や教員から助言をもらい内容の改善を図る。他者の発表を批判的に聞く力を養う。	2
	研究 α	テーマ発表会を踏まえて，内容の改善を図りながら研究を進める	4
7	講演会Ⅰ	研究全体にわたるスキル的な部分を学び，研究内容を向上させる。	2
	フィールドワークⅡ	設定したテーマや調査方法に対する改善策や今後の研究方針について，大学の先生から助言をいただき，今後の研究の方向性を修正する一助とする。	3
8	報告会	各自の研究の現状と今後の進め方を考え，中間発表会に向けて見通しを持って研究を進められるようにする。	2
	研究 α		1
9	講演会Ⅱ	研究全体にわたるスキル的な部分を改めて学び，修正点等を見つけ出す。	1
	研究 α		6
10	中間発表会（準備含む）	大学の先生方をはじめとして，多くの人から意見をもらえる場を設定し，研究内容をより良くしていくための助言を受ける。また，発表方法や発表技術について向上を図る。	5
	研究 β	中間発表会での反省を生かしながら，各自の研究を進める。必要に応じて他者と対話をし，多角的な視点から課題について考える。	2
11	２学年他類型見学	２学年他類型の課題研究発表会を見学し，自らの研究を進めるうえでの参考とする。	1

11	１学年地域社会研究見学	１学年地域社会研究の発表会を見学し，自らの研究を進めるうえでの参考とする。	1
	仙台三高ＧＳフェスタ	希望者が参加し，口頭発表やポスター発表の見学をおこなった。課題研究Ｉからは３名がポスター発表を行った	
	海洋教育こどもサミット	課題研究Ｉから２名がポスター発表を行った。	
	台湾研修事前準備	台湾研修での現地の学生との交流に向けての準備をおこなう。また，自分の研究において，「海外との比較」という視点を持てるようにする。	2
	講演会Ⅲ	台湾の文化や習慣について歴史や気候，海との関わりなどの視点から理解し，地域や世代を，国を超えて物事を理解する素地を育成する。	2
12	台湾研修	異文化理解や語学力の向上を図ることはもとより，同世代との意見交換や現地調査によって，グローバルな視点からの思考力や多様性，行動力の育成を図る。現地の大学との交流では，４名が英語での研究発表を行った。	
	研究 β		6
	こども未来博	課題研究Ｉから３名がポスター発表を行った。	
	全国ＳＧＨ高校生フォーラム	課題研究Ｉから１名が英語でのポスター発表を行った。また，４名が高校生同士の英語でのディスカッションを行った。	
	フィールドワークⅢ	大学訪問，地域の企業・団体訪問，アンケート実施などを行い，自らの研究に必要な情報を集める。	4
1	研究 β		3
	ダメだっちゃ温暖化	課題研究Ｉから１名がポスター発表を行った。	
	発表準備	効果的な発表方法について探る。	4
	学年発表会	ポスターセッションによる発表会	4
	論文作成	論文の書き方について学び，論文を作成する。	3
2	古川黎明高校サイエンスフェスティバル	課題研究Ｉから２名がポスター発表を行った。	
	まとめ	情報の整理，アンケートを実施して，１年間の活動を振り返る。	1
3	東北地区ＳＧＨ発表会	課題研究Ｉから２名が英語での口頭発表，２名が日本語での口頭発表を行った（今年度は中止）。	

表３－２　研究テーマ

No.	テーマ	備考
1	子どもの自然離れの原因とは	優秀賞
2	プラスチックごみがあふれた環境に対して気仙沼で取り組めることはあるか	
3	効率のいい英語の発音練習とは	
4	目にとまるポスターとは	
5	内側から行うまちづくりのアイデア⊟地域愛着がもたらす活力を利用する～	
6	工学技術は高齢者の死亡リスクを減らせるか	
7	家庭から出る食品ロスを減らすには	
8	気仙沼は5年間でどのように変わりうるのか	
9	家庭から出る生ごみの量を減らすには	
10	冬でも観光が活発な南三陸町にするには	
11	大島大橋効果は持続できるか	
12	気仙沼への観光客を増やし、気仙沼の活性化に貢献することはできるか	
13	大島を訪れる外国人観光客の満足度を上げるためには	
14	動物の殺処分に対する関心を高めることはできるのか　～殺処分0に向けた高校生のアイディア～	
15	外国人向けのお土産品開発で「インターナショナルな田舎」はつくれるか	
16	サブカルチャーを使って観光客を増加させるためには	
17	気仙沼の再生可能エネルギーの利用率をあげることができるか	
18	CEFR　A2レベルのスピーキング力を有するには	
19	「女子力」は男女平等の妨げになるか	優秀賞
20	都市部と地方部のLGBTQに対する認知度と恐怖度差はどれほどか。また、その差を縮めるには。	
21	海洋プラスチックの現状と緩和のために私たちに求められること。	優秀賞
22	捨てられる食品を減らすためには	
23	気仙沼のコミュニティを広げるためには　～コミュニティカフェの活用～	
24	どうして気仙沼の海離れは進んだのか　～気高生から分かること～	優秀賞
25	気仙沼の養殖業を活性化させるには	
26	人間による野良猫への虐待を高校生が減らすことはできるのか	
27	小学校での道徳教育はいじめの防止に効果があるのか	
28	高校生が考える大島の観光戦略と戦術	
29	これからの気仙沼に必要な観光とは	
30	リアス海岸に適した津波の避難行動	
31	学校教育における動物愛護教育の必要性	
32	今の日本の高等学校に制服は必要か	優秀賞
33	孤独に対する考え方を変えるにはどうすればよいか	
34	遠隔医療の将来性とは	
35	自然遊びが子供に与える効果と、それを生かした地方の取り組みとは	
36	農業や水産業で出た廃棄物を用いたバイオガス発電	
37	気仙沼の商店街を活性化するにはどうしたらよいか	
38	なぜ児童虐待は増え続けるのか。また、それを減らすために私たちが出来る事はあるか。	優秀賞

（４）具体の内容

① フィールドワークⅠ

ねらい：研究を行う上での心構えを学ぶと同時に，地域にある研究素材について理解し，今後の研究テーマのヒントを得る。

日　時：５月２４日（水）　５～７校時

内容：

	１班	２班	３班
13:30	全体ガイダンス		
13:35			
13:40			
13:45			
13:50	乗船	湿地へ移動	桟橋ネット採水
13:55	水質計 バンドン採水		顕微鏡観察
14:00		湿地到着	
14:05		解説 曳網見学	
14:10			
14:15	終了 上陸	仔稚魚観察	
14:20			湿地へ移動
14:25	顕微鏡観察		
14:30		湿地出発	湿地到着
14:35			解説 曳網見学
14:40		研究所到着	
14:45		乗船	
14:50	湿地へ移動	水質計 バンドン採水 ネット採水	仔稚魚観察
14:55			
15:00	湿地到着		湿地出発
15:05	解説 曳網見学		
15:10		終了 上陸	研究所到着
15:15			乗船
15:20	仔稚魚観察	顕微鏡観察	水質計 バンドン採水
15:25			
15:30	湿地出発		
15:35			
15:40	研究所到着		終了
15:45	終了あいさつ		

② 講演会Ⅰ

ねらい：２年生・１年生ともに研究を本格化させるこの時期に，研究全体にわたるスキル的な部分を学び，研究内容を向上させる。また，本校職員の課題研究指導力向上の機会を設けるとともに，気仙沼市内の学校の先生方にも参加してもらい，課題研究指導における気仙沼市内全体のボトムアップにつなげていきたい。

講　師：東北大学大学院生命科学研究科准教授　酒井聡樹氏

日　時：７月１２日（金）６～７校時

１３：４５　来校・打ち合わせ　（講師控室：小会議室）

１４：００～１５：３０　生徒対象講演会（教員の聴講も可）

１６：１０～１７：１０　教員対象講演会（於：会議室）

１７：３０　終了

内　容：研究の意義や方法，テーマ設定の工夫について。

③ フィールドワークⅡ

ねらい：設定したテーマや調査方法に対する改善策や今後の研究方針について，大学の先生から助言をいただき，今後の研究の方向性を修正する一助とする。

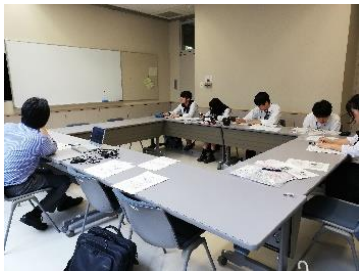
日　時：７月１７日（水）と７月１９日（金）の２組に分かれてフィールドワークを実施

７月１７日（水）

訪問先	人数	降車	訪問時間	乗車
宮城大学大和Ｃ	１２人	１０：１０	１０：３０～１２：３０	１２：４０

７月１９日（金）

訪問先	人数	降車	訪問時間	乗車
宮城教育大学	９人	１１：４０	１２：００～１３：４０	災害研から乗車
東北大学災害研	４人	宮教大で降車	１２：２０～１３：５０	１４：００
東北工大八木山Ｃ	５人	１１：５０	１２：３０～１４：００	１４：１０
東北工大長町Ｃ	８人	１２：００	１２：３０～１４：００	１４：２０



④ 講演会Ⅱ

ねらい：２年生は中間発表会，３年生は最終発表会に向かうこの時期に，研究全体にわたるスキル的な部分を改めて学び，修正点等を見つけ出す。また，本校職員の課題研究指導力向上の機会を設ける。

講　師：東北大学大学院生命科学研究科准教授　酒井聡樹氏

日　時：９月６日（金）６～７校時

１４：２０　来校・打ち合わせ　（講師控室：小会議室）

１４：４０～１５：３５　生徒対象講演会（教員の聴講も可）

１６：１０～１７：００　教員対象講演会（於：会議室）

内　容：研究の効果的なまとめ方とプレゼンテーション（ポスター作成等），論文作成のポイントなど。

⑤ 中間発表会

ねらい：大学の先生方をはじめとして，多くの人から意見をもらえる場を設定し，研究内容をより良くしていくための助言を受ける。また，発表方法や発表技術について向上を図る。また，２学年と３学年の縦のつながりをつくり，研究への多角的な見方を養う。今までの研究を発表し，生徒同士の議論やアドバイザーの先生方から助言をもらうことで，後半の研究に向けて課題を見つける。

日　時：１０月２５日（金）　５～７校時

内　容：１０枚程度のスライドを発表する。発表５分・質疑応答３分。

グループ	人数	アドバイザー	担当
A　宮城大学	6	宮城大学　食産業学群　笠原　紳　教授	豊島
B　宮城大学	6	宮城大学　事業構想学群　石内　鉄平　准教授	谷内
C　東北工業大学	6	東北工業大学　工学部電気電子工学科　丸山　次人　教授	高橋智
D　東北工業大学	7	東北工業大学　ライフデザイン学部　猿渡　学　准教授	西城
E　宮城教育大学	7	宮城教育大学　理科教育講座　出口　竜作　教授	長根
F　東北大学	6	東北大学災害科学国際研究所　佐藤　翔輔　准教授	大竹

総　括：（５）全体的な総括を参照

⑥ 講演会Ⅲ

ねらい：台湾の文化や習慣について歴史や気候，海との関わりなどの視点から理解し，地域や世代を，国を超えて物事を理解する素地を育成する。

講　師：菅原　綉花　氏（台湾出身の気仙沼市内在住者）

日　時：１１月１４日（木）６～７校時

内　容：台湾に関する講演，質疑，中国語講座（あいさつ・日常会話）

⑦ 台湾研修

ねらい：海洋問題，特に水産資源や海洋自然環境，ジオ資源（地質・歴史・文化資源），防災対策において，気仙沼・日本との比較研究を実施する上で極めて適する地域である。現地を訪問し異文化理解や語学力の向上を図ることはもとより，同世代との意見交換や現地調査によって，グローバルな視点からの思考力や多様性，行動力の育成を図る。

期　日：令和元年１２月１日（日）～５日（木）　４泊５日

期日	内容
１２月１日(日)	気仙沼高校　－（バス）－　仙台空港　－（飛行機）－　桃園空港　－（バス）－ホテル（台北市）
１２月２日(月)	ホテル　－（バス）－　台北駅　－（台湾高速鉄道）－　台南駅　－（バス）－　成功大学　－（バス）－　台南高級海事学校　－（バス）－　観夕平台　－（バス）－　ホテル
１２月３日(火)	ホテル　－　方面別フィールドワーク　－（バス）－　ホテル－（バス）－　台南駅　－（台湾高速鉄道）－　台北駅　－　ホテル　－　台北市内フィールドワーク　－　ホテル（台北市）
１２月４日(水)	ホテル　－　国立海洋技術博物館　－（バス）－　九份　－（バス）－　故宮博物院　－（バス）－　忠烈祠　－（バス）－　ホテル－（バス）－　ホテル（台北市）
１２月５日(木)	ホテル　－（バス）－　桃園空港　－（飛行機）－　仙台空港　－（バス）－　気仙沼高校

内　容：

１２月２日（月）　午前：成功大学　午後：台南高級海事水産職業学校

午前は国立成功大学工学部水利海洋工学科を訪問した。本校生徒が研究発表４題を英語で行い，研究に関する質問や，日本人とは違う視点から見た意見をもらった。大学の教授陣からの英語での質問にも，何とか英語で答えようとする姿が見られた。また，発表した４名以外の生徒も，発表や質疑応答のやりとりから刺激を受けているようであった。その後の教授陣や大学院生を交えた交流では，英語に苦慮しながらも気仙沼の紹介や各自の課題研究についての意見交換などを行い，日本と台湾の考え方や価値観の違いに気づくことができた。それぞれの生徒が事前に各自の研究テーマについて英語で説明する準備をしたことも，よい経験となったようである。

以下は生徒の感想である。モニターを使って発表していた４人に対するアドバイスから，何を対象とし，どういった手段を用いるのかの重要性を改めて感じることができた。／クラスの４人の発表後の大学の先生のアドバイスを聞いて自分との考え方の違いを知ることが出来たし，思っていなかったことを知ることができて良い経験になりました。／発表が終わったあとの，大学生との話し合いの場もとてもためになるものばかりだった。／英語を文章で話さず，自分が伝えやすい簡単な単語を使って話すことができた。／学生がすごく親切に自分の質問に答えてくれた。／課研の発表が緊張しました。その後の質問で，聞かれた内容は理解できたのですが，その答えがすぐに浮かばず，まだ考え中だということを英語で伝えられなかったことが悔しかったです。／自分の地域の捉え方が違っており，考えを共有する時に大きな気づきを得られた。／実際に面と向かって英語で話してみると，あまり伝わらない表現の仕方や意思疎通が出来ない様子が見受けられたのが印象に残りました。もっと楽しくコミュニケーションを取るためには私たちが勉強やジェスチャー，ほかの例えを提案する柔軟性，臨機応変に対応出来る力を備える必要があるのかな，と感じました。／大学生との交流では，伝えたいことを英語で伝えるのが大変だったけど，大学生の方は私たちが理解できていないとき，言葉を変えて伝えようとしてくれたり，気を遣ってくれて，やさしいと思った。／大学生の方がとても頭の良い方で，こちらの拙い英語でも十分に意味を汲み取ってくれため，とても話しやすかったです。ただ，私自身もうちょっと英語を勉強していた方が良

かったなと後悔している部分もあります。

午後は国立台南高級海事水産職業学校を訪問。本校生徒３７名を２グループに分け，それぞれのグループに海事の生徒がほぼ同数付いて，食品系の教室と漁業系の教室に分けて案内していただいた。それぞれ，キャンドル作りやパイナップルケーキ作りを体験しながら，英語でのコミュニケーションを取ることができた。その後，本校生徒と海事の生徒３人ずつの６人グループで，それぞれの住む街のことや文化について英語でやりとりをした。

以下は生徒の感想である。英語で会話ができるように，単語を並べてなんとか伝えようと頑張った。なかなか伝わらなくて難しかったけど，しっかり伝わって意思疎通できた時は嬉しかった。／スマートフォンの力に依存せずに会話するくらいの英語力をつけておくべきだった。／最初に教室に入った時の歓迎は驚いたし，嬉しかったです。2 つに別れて行動したときパイナップルケーキを一緒に作った時は優しく教えてくれて楽しく過ごせました。今も連絡を取っているので台南海事に行けて良かったです。／台湾の友達が出来，英語で会話しようとする力や英語でメールを送る力が伸びたと思う。／台湾の同世代と交流することが出来たのはとても良い経験となった。／グループで話した時，日本語が話せる生徒や日本のアニメが好きな生徒がいて，日本の文化の影響力を実感しました。／日本に帰ってきてからも連絡を取りあったり英語で会話したりしていて，交流を持ち続けていられることももちろんだけど，お互いの学びになっていていい経験が出来ていると思う。／キャンドル作りを通して積極的に英語を使ってコミュニケーションをとることが出来た。また普段の学校生活や日本に対するイメージなどを細かく知れることができて楽しかった。／相手の生徒が英語が上手かった。相手はいつも中国語を話していて，こちらも日本語を話している状態でどちらも母国語では無い言語でコミュニケーションを図っているのを考えると少し不思議な感じがしました。歳が近いこともあり，共感する部分や親しみやすい部分がありとても楽しかったです。／外国で，話の内容が分からなくても，日本の高校生と同じように楽しく雑談したり，真剣に相談していて，同じなんだなと思った。／同じ高校生とは思えないほど英語が上手で，自分ももっと頑張らないとと思いました。

１２月３日（火）　午前：台南市内フィールドワーク　午後：台北市内フィールドワーク

午前は３つのコースに分かれ，台南市内でフィールドワークを行った。それぞれの場所をめぐる中で，高校生や大学生に台湾の文化や生活，学校での様子など，実際に自分で見て確かめたりした。

１班「市内中心部」　気仙沼高校１９名＋成功大学４名

地元の食材が並ぶ市場やオランダ人が築いた赤崁楼，日本人が作った台湾で一番古いエレベーターがある林百貨店など，台南市の街づくりや市民生活，歴史について大学生と街を巡

りながら確認した。以下は生徒の感想である。日本との町並みの違いや文化の違いについて知れてよかった。／大学生の方が付いてくださったので台南市内の歴史などを詳しく，分かりやすく教えてくださった。日本で見られない建物や，台湾独特の風景，看板など，身をもって台湾を感じられた。／台湾最古の学校や商店街のような場所を歩いてまわる中で，スクーターの数がとても多いことに気がつきました。歩道も駐車したスクーターで埋まっていて，日本とは大きく異なる点だと思いました。買い物をした百貨店では，店員さんの丁寧な対応と何気なく買った肉饅の美味しさに感動しました。／日本の都会と台湾の都会のビルの違いや，交通量の違いを知ることが出来た。／台南市内の表通り・裏通りの両方を見ることができました。裏通りにある商店街のようなところでは地元のデザートを食べるなどすることもでき，台南の文化に多く触れることができました。

２班「安平地区」　気仙沼高校８名＋台南海事学校４名

オランダ占領下の軍事要塞である安平古堡やガジュマルの樹に覆われた安平樹屋を台南海事学校の生徒に紹介してもらいながら巡った。以下は生徒の感想である。台南の高校生との会話のやり取りを通して，日本と台湾との関係をより新鮮な気持ちで知ることが出来，城の案内だけでなく，安平の街並みを堪能しながら高校生同士で仲良くなれたことがなにより良かった。／前日に知り合った友達に案内して貰えたので楽しかったし，安平の歴史を知ることが出来た。／安平で海事の高校生に案内してもらって台湾の文化や歴史に触れることができた。

３班「奇美食品・崇明小学校」　気仙沼高校１０名＋多数の小学生，現地の先生方

台湾の食品工場を見学し，その後，台湾の小学校で授業の見学をした。小学校１年生から英語が必修の台湾。その教育をしっかり目で見て日本の教育との違いを体験することができた。以下は生徒の感想である。台湾の小学校の授業は楽しい！外国語の授業でも楽しめる工夫があるなあと感じた。／奇美食品に行って，現地の有名な食べ物がどのようにして作られているのかや，実際に食べさせて貰ったりしてすごく楽しかった。たくさんお土産も買えて満足だった。現地の小学生がどんな授業を受けているのかや英語と保健の授業を同時に行っているなど効率がいいと思った。／授業の見学をして，台湾の小学生の英語力の高さを知ることができた。／小学校では日本との教育の差に驚きました。小学校の授業は全て英語で行われていて，先生が出した質問にも生徒たちはすぐ英語で答えていました。またコミュニケーション能力も高くしっかりと周りと自分の意見を共有し授業に取り組んでいました。

午後は台北に移動し，夕方から台北市内にある夜市をフィールドワーク。行ってみたい夜市をあらかじめ調べ，経路を自分たちで決定。（各方面に教員がついた。）スマートフォンも日本語も使えないため，分からなくなれば市民の方に英語で質問。日本にはない夜市の賑やかな雰囲気に興奮。思い思いの時間を過ごすことができ，忘れられない経験をすることができた。

以下は生徒の感想である。士林夜市に行くために現地の人に英語で訪ねて，教えてもらうという経験を出来たのでよかった。／夜市は日本にはないもので台湾独自の文化にの文化について学ぶことができたのでとても勉強になった。／夜市としては最大の規模である士林夜市は本当に煌びやかな街並みで，日本とは劇的に違う風景ではあったが，中身はまるでお祭りの屋台のようで，非常に楽しめた。／臭豆腐を食べて現地の人たちが好む味や香りを知る事が出来ました。八角や，臭豆腐は，臭いが強いので，現地の人は臭いが強いものが好きなのではないかと思いました。／自分たちで電車に乗り夜市にたどり着くことができて良かったし，夜市では美味しいものを食べることが出来ました。台湾の人は夕ご飯が夜市らしいので生活を見ることができたと思います。／食べ物も安くて美味しかったし，なにより店員さんがとても優しかった。台湾の人の優しさに触れられたと思う。／日本語のメニューがあったり，お店の人が笑顔で対応してくれたりと，台湾の方の温かさを感じられました。特に印象深かったのは，フライドチキンのお店にて，欧米系の観光客の男性とチキンをシェアした

ことです。予想以上に大きかったそうで，私に半分くれました。観光客同士の交流もできて嬉しかったです。／寧夏夜市は思ってたより小さかったけど，全体をゆっくり見てまわることができた。美味しそうな食べ物がたくさんあって，日本ではこのような場所はできないだろうなと思った。

１２月４日（水）　午前：国立海洋科技博物館・九份　午後：故宮博物院・忠烈祠

午前は基隆市にある国立海洋科技博物館に行き，海を環境・科学・文化の面から総合的に学んだ。科学実験が体験できる設備があり，生徒も夢中になっていた。その後，九份に移動し，各自での昼食時間とした。現地の人とどうにかコミュニケーションを取りながら昼食や買い物をし，集合場所へ戻ってきた。以下は生徒の感想である。

映像やゲーム，蝋人形等，今まで見てきた博物館にはない新鮮なものもあって楽しめたと思う。／海に関しての魚の模型や船の内部など，様々な部分が細部までこだわられていて興味深かった。博物館そのものの作りはあまり日本とは変わらないように感じたが，遊び心が台湾にはあるように思えた。／漁業のことを知れたので，改めて気仙沼の良さを知れました。近くにあるからこそ気にかけないことがあると知りました。／難しい博物館だと思っていたけど文字が少なくてわかりやすいし楽しめました。／日本でもあまり見られないものを見れた。特に深海の生物については驚きばかりだった。深海の生物については興味がある方なのでとてもためになった。／展示物がリアルで，海洋生物の生態などについて楽しく見学することができました。／日本では日本のまわりの海についての情報ばかり得られるため，台湾で現地の情報を実際に見たり説明を受けたりしながら見れたのがよかった。／全部は回れませんでしたが，台湾の昔の暮らし(海に関する)や気流，水位関係などの知らなかった事が知れた気がしました。／海洋生物の生態だけでなく，近代科学や食文化，海洋汚染問題，災害のことなど，様々なジャンルが幅広く学べる施設になっていて，飽きずに楽しめたし，勉強になった。／この博物館では生き物の生態だけではなく海に人間がどのように影響しているかや，海からできた人間の文化やさまざまな問題について取り上げていました。課題研究に役立つと思いました。もう少し時間をかけて見たかったところもありました。

千と千尋の神隠しのモデルとなった九份の風景を目に焼き付けることができた。実際に見てみたかった九份の風景，建物は本当に綺麗だった。／赤い提灯や鮮やかな色の店構えが多く，日本にはあまりないような派手かつ上品な街だった。／歴史的建造物の数々が建ち並び，その中に多種多様なお店があるのがなかなか面白い光景だと思った。／リラックス出来て良かったです。学業成就のお守りや，花文字を買えたことで，受験や日々の勉強へのモチベーションが上がりました。／バスガイドさんの説明で，九份という町の名前の由来や特徴を知れて面白かったし，街並みがとても綺麗で中国らしく楽しかった。雑貨や食べ物も多くて，いろんなものを食べれたし，店の人が声をかけてくれたりしてより一層楽しむことができた。

午後は故宮博物院で，中国大陸の歴代皇帝が受け継いできたコレクションを見学した。今回は，「白菜」が展示されており，混雑していた。また，忠烈祠で衛兵の交代式を見た。以下は生徒の感想である。

ガイドさんの説明のおかげで，展示してあるものがどのようなものなのかが分かって，面白かった。／台湾に持ってきた様々な遺物に関しての歴史的意義に触れることが出来た時間だった。日本の昔の姿とは少々違う歴史の辿り方をしているのが理解できた。／台湾の歴史や日本との古くからのつながりを知ることが出来た。／展示品の龍の指の本数で，どんな身

分の人のものか分かったり，有名な白菜の置物に込められている意味を知ることができて，中国史にとても興味が湧いた。／教科書で見ていたものが実物で見ることができ，感動しました。何故この物は作られたのか，誰のためなのか，などをガイドの方から詳しく聞くことができてタメになりました。建物が広くて，国内関係なく色々な国の方が訪れていてすごいと思いました。国外の歴史に自分で触れることが出来てとても楽しかったです。とても貴重な体験になりました。

台湾の軍隊がどのようなものかわからなかったので，見てとても興味が湧き，楽しい時間だった。／台湾に兵役があるということを今まで知らなかったのですが，現在までこの制度がある歴史的背景や今後の政策についての話を聞き，台湾についての知識が増えました。兵隊さんたちを最前列の真ん中で見ることができ，一糸乱れぬ動きに感動しました。

総　括：　全体を通した生徒の感想は以下のようなものであった。

言葉が通じない体験は初めてでした。どう伝えたらいいのか悩みながら少し伝わったときはほっとしました。また英語を話すことが出来れば，しっかり意思疎通できることが分かり，英語の大切さが身にしみました。／この台湾研修を経て，相手と話してみたいという気持ちをより持つようになり，積極的に話に行けることが出来たと思う。台湾研修での体験を自分の課題研究に生かして行けたらなと思う。これほど英語で話したことはなかったので，不安だらけだったが，台湾の人皆優しかったので不格好ながらも話に行けたと思う。　／異なる文化に触れて，日本で当たり前だと思っていたことが実は違うと気づき，普段から感謝の気持ちを持っていたいと思うようになりました。課研では，他国の男女平等の問題について直接貴重な意見を聞けて良かったです。今回もらったアドバイスを参考にしながら解決策を見つけたいです。／事前に台湾について勉強する機会があってよかった。自分の知識と実際の様子を比べて観光したことでより理解や楽しさが深まった。インターネットやテレビで見るよりずっと面白くて，魅力的で，行ってみてはじめて感じたこともたくさんあり，実際に経験してみることの大切さを学んだ。台湾の人達がみんな優しく，丁寧にもてなしてくれて，自分たちも海外の人たちを迎える時はこんなふうにできたらいいなと思った／異文化に触れることに少し抵抗がありましたが実際に行ってみると自分の英語がしっかりと通じて会話（交流）ができ，うれしかったです。同じアジアでも文化の違う台湾の食や街並みなども知ることができてよかったです。今後は今まで以上に英会話能力を高めて，もっと多くの国からを訪れられるようにしたいです。／初めて海外に行って，気候や土地，建物，人，文化の違いに触れ，その国の特徴を今回一部は知れて，自分が今までどれだけ狭い範囲で過ごしてきたのだということや，そこで言葉も違う人たちとコミュニケーションをとることの大変さや楽しさを感じました。もっとコミュニケーションを多くの人ととれるようになるために英語をしっかり身に付けなければならないと思いました。そのために表現力や語彙力を高めていきたいと思います。

このように多くのことを感じ学ぶことができた。今年度は創造類型の生徒全員（３７名）での台湾研修となったため，昨年度（１２名）よりも多くの生徒が海外を経験

することができた。３７名での台湾研修であったため，研修の各場面で級友と協力する様子が見られた。一方で，特に英語でのやりとりが必要な場面において，英語の苦手な生徒が得意な生徒に頼ってしまい，英語を話さないまま終わってしまう場面も多く見られた。したがって，生徒全員が英語でのやりとりをできる方法を準備することが課題となる。２月に実施したアンケート（別紙１）での「台湾研修で得られたことを課題研究に結びつけることはできましたか」の項目の回答は，できた６名（１６．２％），少しできた１２名（３２．４％），できなかった１９名（５１．４％）となり，研究において海外とのつながりを感じることのできた生徒が少なかった。テーマ設定や現状分析の段階で，地域の課題を明確にすることに加えて，世界的な課題との共通点や，他国での現状分析などの調査にも時間をかけさせる必要がある。同じ調査で「台湾研修の後，現地の高校生と連絡を取り合ったりしましたか」の事項では，６割以上の生徒が研修後も連絡を取り合うことができた。高校生同士の交流の際に英語によるコミュニケーションの重要性を感じた生徒が多かったため，このつながりは学習意欲の向上に与える影響は大きいものである。今後は，継続的に連絡を取り合える生徒が増えるような手立てを講じたい。

⑧ フィールドワークⅢ・国際理解セミナー

ねらい：課題研究のテーマに関連する施設の訪問や街頭での調査，大学の専門家による指導を受けることで，現在の研究内容をより高いものにする。また国際理解セミナーでは外国の講師の方からの講話や交流を通して，課題研究活動に生かす。

日　時：１２月１４日（土）１～４校時

場　所：フィールドワーク→宮城教育大学，東北大学災害科学国際研究所，市内民間企業
国際理解セミナー，フィールドワークアドバイザー相談会→気仙沼高等学校

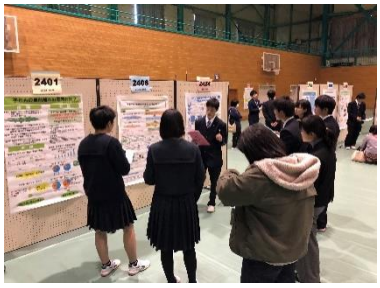
⑨学年発表会

ねらい：研究の成果を発表し議論することで，今後の研究に向けて課題を見つけるとともに，発表する態度や聞く姿勢について学ぶ。

日　時：１月２５日（土）

内　容：ポスターセッションによる発表。３６題の研究をＡ～Ｃの３グループに分け，各グループで発表５分，質疑２分で同じ内容を４回発表する。発表時間以外は，聴衆としてその時間にやっている発表を自由に見て回る。あらかじめ時間を設定し，審査団がまわり審査をし，それをもとに優秀賞を選出する。

１０：００　開会行事
１０：１５　Ａグループ発表（４０分間）
１１：００　Ｂグループ発表（４０分間）
１１：４０　休憩
１１：５０　Ｃグループ発表（４０分間）
１２：３０　ポスター撤去・ワークシート記入
１２：３５　閉会行事



＜成績上位＞

〈令和元年度課題研究Ⅰ成績上位者〉

ルーブリック表（評価の観点と予想される行動例の点数）						評価					
観点	5	4	3	2	1	No.19	No.1	No.21	No.38	No.24	No.32
課題設定	世界に共通する課題や地域と世界を結びつけるテーマを課題とし、問題の背景を総合的な視点で捉え、論点が明確である。	世界に共通する課題や地域と世界を結びつけるテーマを課題とし、問題の背景を部分的にしか捉えていないが、論点が明確である。	グローバル社会と関連していないテーマを課題とし、問題の背景を総合的な視点で捉え、論点が明確である。	グローバル社会と関連していないテーマを課題とし、問題の背景を部分的にしか捉えていないが、論点が明確である。	グローバル社会との関連性のある無しに関わらず、問題の背景を調べておらず、論点が不明確である。	5	4	4	4	4	4
研究活動・実行	課題に対する研究手法が適切であり、事実に基づいた研究内容を記録している。外部指導者等の助言を受けながら、実行している。	課題に対する研究手法が適切であり、事実に基づいた研究内容を記録している。外部指導者等の助言を受けずに、実行している。	課題に対する研究手法が適切であるが、研究内容の記録に不備がある。外部指導者等の助言を受けながら、改善しようとしている。	課題に対する研究手法が適切ではないため、外部指導者等の助言を受けながら、改善しようとしている。	課題に対する研究手法が適切ではないため、外部指導者等の助言を受けて、早急な改善が求められる。	5	4	4	4	5	5
情報の処理	既存のデータのみならず、実験や調査等から得られたオリジナルのデータも適切に処理・加工して使っている。	既存のデータのみならず、実験や調査等から得られたオリジナルのデータを使っているが、処理・加工に不備が見られる。	他人が作成したデータを適切に選び、加工しているが、オリジナルのデータがない。	他人が作成したデータを加工しているが、適切なデータではない。適切なデータを選びなおす必要がある。	科学的なデータや情報が無いため、データによる裏付けが早急に求められる。	5	5	4	5	5	4
情報収集	３種類以上の情報源から５つ以上の情報や資料を集め、引用部分と自分の意見を明確にわけて記載している。	１・２種類の情報源から５つ以上の情報や資料を集め、引用部分と自分の意見を明確にわけて記載している。	複数の情報源から２～４つの情報や資料を集め、引用部分と自分の意見が明確にわけて記載している。	複数の情報や資料を集めてはいるが、引用部分と自分の意見が明確に分けて記載していない。	情報や資料を集めておらず、自分の意見しか記載していない。早急な改善が求められる。	4	4	4	4	4	4
論の構成	主張を裏付ける客観的で有効な根拠が２つ以上あり、反対意見も踏まえ反論できる材料をそろえ、とてもしっかりしている。	主張を裏付ける客観的で有効な根拠が２つ以上あり、自分の立場からの主張はしっかりしている。	主張を裏付ける客観的で有効な根拠が１つあり、自分の立場からの主張はしっかりしている。	主張を裏付ける根拠や証拠を挙げているが、客観性や信ぴょう性が低く有効とは言いがたい。客観性を高める必要がある。	文章の因果関係や論法に誤りがあり、主張や裏付ける根拠が不明確である。論の構成を一つ一つ改善する必要がある。	5	5	4	4	4	4
発表態度	発表では、原稿を見ずに声が通るように大きくはっきりと発言し、聞く人が理解できるようにテンポや強弱、身振りなどに工夫があり、効果的である。	発表では、原稿を見ずに声が通るように大きくはっきりと発言し、聞く人が理解できるようにテンポや強弱、身振りなどに工夫のあとがみられる。	発表では、原稿を見ながらではあるが聞く人が理解できるようにテンポや強弱、身振りなどに工夫のあとがみられる。	発表では、原稿を見ながら声が小さく一部聞き取れない部分がある。テンポや強弱、振りなどに工夫が求められる。	言葉を失う、または声が小さいため発表の大半が聞き取れず、内容が理解できない。原稿のアウトラインを用意するなど改善が求められる。	5	5	5	5	4	5

（５）全体的な総括

別紙１は年度末に実施した課題研究Ｉに関するアンケート調査の結果である。

結果１では年間の小事業の有用性について考える。フィールドワークＩ，フィールドワークⅢでは昨年度よりも割合が上昇している。フィールドワークＩは地元の研究素材である海に行き実施されたが，有意義だったと答えた１０名のうち７名が自然との関わりの深い研究テーマを設定していた。（海洋プラスチック２名・若者の自然離れ３名・再生可能エネルギー２名）このことから，研究対象を実際の目で見ることの重要性が改めて分かる。したがって，それぞれの生徒が，各自のテーマの研究対象を見に行く機会を作ることができれば，生徒の研究が活発になると考えられる。フィールドワークⅢは１２月に各自のテーマに沿ったフィールドワーク先を訪問するものである。今年度は，希望する訪問先との都合が合わずに訪問が叶わなかった生徒も多くいた。来年度以降，それぞれの生徒が現場を見ることのできるような調整をしたい。今年度から「外部発表会」の項目を追加したところ，１１名が有意義であったと回答した。外部発表会へ参加した生徒が１２名であったため，９割以上の生徒が有意義だと感じたこととなる。他校の生徒が発表している様子を見たり，自分の発表に対して外部の方から助言をいただいたりすることは，普段の活動だけでは得られない刺激となるようである。

中間発表会では大学のアドバイザーの先生から現時点での研究の評価をいただいた。このときに大学から専門的なアドバイス（今後の研究方針や現時点での研究への評価など）をいただいたことは，生徒が研究を進める上で有効であった。一方で，大学のアドバイザーの先生から「もっと高校生らしい研究が増えてもよいのでは」という意見もいただいた。また，ＳＧＨ運営指導委員会や発表会のアドバイザーからの指導助言からも研究の内容に関して年々進歩しているとの評価をいただいた。しかしながら論理性に関してかなりの飛躍がある研究もあり，今後の指導方法の改善が求められる。

台湾研修については，昨年度までは少人数での参加で全員に役割を与えられたが，今年度から創造類型全員での参加となり，積極的な生徒とそうでない生徒の差が出るような場面があった。したがって，来年度以降は今年度以上に全員が主体的に参加できるような工夫が求められる。

最後に１学年の社会研究から研究活動がスタートし，地域を起点とした研究を行うことはできている。そこから他の地域や海外との比較をし，課題を広い視点でとらえることに課題がある。そのためには社会の動きやニュースなどをもっと読む必要がある。また教科学習との連動や関連を密に行っていきたい。

別紙１　課題研究Ｉ　事後アンケートの結果（２月１８日実施　回答数３７）

結果１．研究を進める上で有意義だったイベントを選んでください（複数回答可）

	人数	割合	昨年度割合	一昨年度割合
研究基礎	8	21.6	36.1	20.6
ＦＷ１	10	27.0	13.9	14.7
ＦＷ２	22	59.5	75.0	52.9
講演会Ⅰ	9	24.3	47.2	50.0
講演会Ⅱ	8	21.6	―	―
中間発表会	16	43.2	66.7	41.2
ＦＷ３	19	51.4	50.0	52.9
講演会Ⅲ	5	13.5	16.7	14.7
学年発表会	21	56.8	55.6	41.2
外部発表会	11	29.7	―	―

※「講演会Ⅱ」については，昨年度以前と異なる内容での実施となったため今年度の数字のみ
　また，「外部発表会」の項目は今年度より追加した。

結果２．将来，震災復興や地元のために貢献したいと思いますか。

	人数	割合	昨年度割合	一昨年度割合
貢献したいと思う	8	21.62	33.3	26.5
できれば貢献したい	25	67.57	63.9	61.8
あまり貢献したいとは思わない	3	8.11	0	8.8
まったく貢献したいとは思わない	1	2.70	2.8	2.9

結果３．台湾研修で得られたことを課題研究に結びつけることはできましたか。

	人数	割合	昨年度割合	一昨年度割合
できた	6	16.22	33.3	0
少しできた	12	32.43	41.6	52.9
できなかった	19	51.35	25.0	47.1

結果４．台湾研修後，現地の高校生と連絡を取り合ったりしましたか。

	人数	割合	昨年度割合	一昨年度割合
連絡していない・交換していない	13	35.14	0	23.5
１カ月ぐらいはしていたが，今はしていない	14	37.84	75.0	35.5
２カ月（３カ月）ぐらいはしていたが，今はしていない	4	10.81	8.3	5.9
今でも継続して連絡をとりあっている	6	16.22	16.7	35.3

※今年度は１２月上旬に台湾研修を実施したため，アンケート実施日が約３カ月後であった。そのため，昨年度までは「３カ月ぐらいはしていたが，今はしていない」としていた項目を，「２カ月」に変更した。

１－３　学校設定科目「課題研究Ⅱ」

（１）目標

グローバル課題「海洋問題」に対して，２年生で研究を重ねた課題研究Ⅰを発展させ，科学的探究活動の習熟を目指し，文理融合をさせた研究を目指す。グローバルに思考するための批判的思考力・科学的思考力を磨くことで，総合的思考力・未来思考力にまで高め，同時に英語による海外発信を可能とするコミュニケーション力をさらに育成する。

（２）対象学年

３年生創造類型３６名

（３）内容

木曜日６校時に課題研究Ⅱを配置し，総合的な学習の時間（木曜日７校時）を活用し，全３６時間実施した（表３－１）。２年生までの研究をブラッシュアップするとともに，研究を融合することも視野に入れながら，前半は課題の洗い出しに力を入れた。また，夏休みを通して，自らの研究を外部のコンテストに応募することで，研究成果を広く伝え，外部からの評価をうけることを狙いとした。後半は，英語によるポスターや論文作成に向けて活動を行った。

年間を通して，英語科３名，国語・数学・理科・社会・その他（今年度は情報）１名の計８名を配置し，英語の指導は英語科で，それ以外の内容に関する部分は英語科以外の教員で分担して，評価等にあたった。

表３－１　実施内容一覧

<table>
<tr><th>月</th><th>学習テーマ</th><th>学習内容</th><th>時数</th></tr>
<tr><td rowspan="2">4</td><td>ガイダンス
昨年の振返</td><td>求められる能力や課題研究Ⅱの流れについて知る。
他者の論文を読み，分からない部分などを指摘しあい，課題を洗い出す</td><td>1</td></tr>
<tr><td>研究γ</td><td rowspan="2">研究の融合なども見据えながら，まだ残っている課題に取り組む</td><td>2</td></tr>
<tr><td>5</td><td>研究γ</td><td>3</td></tr>
<tr><td>6</td><td>研究γ</td><td rowspan="2">コンテスト応募に向けて調整したり，英語に翻訳することで見えてくる不備を補ったりする</td><td>1</td></tr>
<tr><td>7</td><td>研究γ</td><td>7</td></tr>
<tr><td>夏</td><td>①コンテストへの応募</td><td>自分の研究内容とコンテストの趣旨が合致するコンテストを選び，応募する。</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">9</td><td>②講演会</td><td>東北大学大学院生命科学研究科准教授
酒井　聡樹　氏</td><td>2</td></tr>
<tr><td>研究γ</td><td rowspan="2">研究をまとめ，英語によるポスター作成を行う。随時，英語科教員から添削を受ける。</td><td>3</td></tr>
<tr><td>１０</td><td>研究γ</td><td>4</td></tr>
</table>

	発表練習	英語による発表練習	1
	③最終発表会	英語ポスターによる発表会	3
１１	英語論文作成	英語論文の執筆。英語科教員による添削	4
１２	英語論文作成 まとめ		5

（4）具体の内容

① コンテストへの応募

ねらい：研究成果をひろく発信し，外部の専門家に評価をしてもらうとともに，作品を作る過程で，自らの研究を振り返る。

方　法：　４月１２日　ガイダンス時にコンテスト一覧を配布
その後，要項が掲載され次第，情報を更新して，クラスに掲示する
校内締切を設け集約し，その後担当者が添削等を行い，応募する

応募コンテスト一覧

名称	主催	備考
国際ユース作文コンテスト	公益財団法人 五井平和財団	
全国高等学校デザイン選手権大会	東北芸術工科大学	入選
絵本翻訳コンクール	神戸女子学院大学	
３６℃の言葉	日本福祉大学，朝日新聞社	第４分野「世の中のどうして？部門」最優秀賞
NRI 学生小論文コンテスト	野村総研	
全国高等学校ビジネスアイディア甲子園	大阪商科大学	
環境マルシェ２０１９	尚絅学院大学	学長賞

総　括：（6）全体的な総括を参照

② 講演会　　※課題研究Ｉと共同開催

ねらい：最終発表会にむけて，問いの設定や研究内容のポスター表現方法といった，研究全体にわたるスキルを改めて学び，修正点等を見いだす。

講　師：東北大学大学院生命科学研究科准教授　酒井聡樹氏
※詳細は「１－２課題研究Ｉ　④講演会Ｉ」を参照

総　括：（6）全体的な総括を参照

③ 最終発表会　　※課題研究Ｉと共同開催

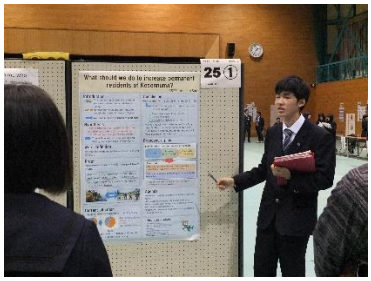
ねらい：今までの研究を英語ポスターで発表し，生徒同士の議論やアドバイザーの先生方から助言をもらうことで，今後の研究に向けて課題を見つける。

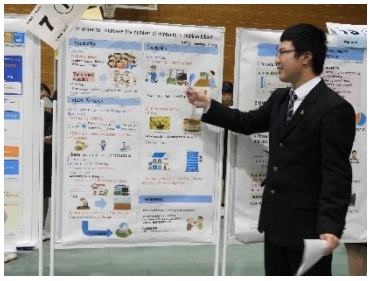
日　時：１０月２５日（金）　５～７校時

内　容：３つのグループに分け，セッションごとに発表する。ポスターは基本的に全員英語で，言語は英語を基本とする。５分間で発表し，その後３分の質疑を設ける。
※詳細は「１－２課題研究Ｉ　⑥中間発表会」を参照

準　備：夏休み前　　昨年の論文をもとに英語に翻訳して提出
夏休み中　　担当の英語教員で添削（夏休み明けにフィードバック）
１０月　４日　英語ポスター提出①（担当の英語教員で添削）
１０月１８日　英語ポスター提出②（印刷）
１０月２５日　発表練習

総　括：（6）全体的な総括を参照





（５）成績について

学校設定科目であることから，表３－２の観点により表３－３の配点で評価を行った。最終学年ということで，研究成果を発信することに力を入れるため，コンテストへの応募を１５点分評価に加えた。評価はルーブリック表（表３－４）を用いて，担当者が行った。更に入賞した生徒は，上位で５点，中位で４点，入賞で３点の加点を行い３名が該当した。発表会や論文においては，内容面の評価を担当者８名で，英語表現に関する部分のみを英語科担当者に行ってもらい，負担感を分散させた。

結果は次のようになった。

	総合	観点ａ	観点ｂ	観点ｃ
平均点	６９．６	２１．１	２１．４	２６．５
最高点	１００	２９	２９	３７
最低点	４１	１２	１３	１６
標準偏差	１２．２	４．３	３．５	４．６

表３－２　課題研究Ⅱの評価年間計画

評価項目（観点）	具体的な活動
a 研究手法を身に付けて活用できている（①知識・技能）	社会や地域が抱える諸課題から世界に目を向け、世界に共通する課題や地域と世界とを結びつけるテーマを自ら設定し、科学的に探究しようとする。 先行研究について新聞や書籍、講演等から適切な情報を選びだし、大学教員や高校教員による指導を活用しながら、適切な方法で研究を行い、丁寧に記録する。研究内容を的確な方法でまとめる。
b 批判的・科学的思考力を身に着けている（②思考・判断・表現）	地域や社会の問題をグローバルな視点からとらえ、目的意識をもって研究活動を行うとともに、論理的・総合的に考察し、科学的に判断している。さらに、これらの一連の過程を的確に効果的な方法で相手に伝え、未解決な課題を明確化しながら発表し議論している。 また、文理融合や他の研究内容との関連性を意識しながら、多方面から課題の解決に取組もうとしている。
c コミュニケーション力を身に着けている（③主体的に学習に取り組む態度）	口頭発表やポスターセッションの特徴を理解し、英語により発表を行い、質疑に対しても適切に対応する。また聞き手として、種々の疑問に対して自ら発問し、議論していく積極的な姿勢を養う。各種コンテストや校外の発表会に参加し、外部に発信する機会を自ら獲得している。

表３－３　課題研究Ⅱの評価年間計画

月	項目	a	b	c	小計
４月	振り返り		2	3	5
６月	講演会		2	3	5
夏休み	コンクール応募	5	5	5	15
１０月	形成的評価	10	10	15	35
	学年発表会		3	2	5
１２月	論文	10	10	10	30
	ファイル・ノート	5			5
加点	校外発表会			(5)	
	コンクール入賞		(5)		
		30	32	38	100

表３－４　コンテストのルーブリック表

観点	5	4	3	1
a コンテストのねらいを理解し、適切な方法で作成している	コンテストの趣旨を理解した内容やまとめ方であり、指導を受けながらさらに良いものになった。		コンテストの趣旨を理解した内容になっているが、まとめ方などにまだ改善の余地がある。	コンテストの趣旨とあっていない内容になっており、改善が求められる。
b 批判的・科学的思考力を身に付けている	自らの研究内容と結び付けながら、複数の視点からの考察があり、論理的・総合的である。	自らの研究内容との結び付きは薄いが、複数の視点からの考察があり、論理的・総合的である。	問題や課題の一部分だけを扱ったものになっており、複数の視点からの考察が今後必要である。	主張を裏付ける根拠が不適切であったり、信ぴょう性が低かったりするため、主張が弱く一貫性に欠ける。
c コミュニケーション力を身に付けている	主語と述語の関係が明確であり、一文の長さも適切である。言葉を吟味し伝わりやすくするなど工夫がみられる。		主語と述語の関係が明確であり、一文の長さも適切である。	主語と述語の関係が不明確であったり、一文が長くなったりしているため、伝わりにくい文章になっている。

（６）全体的な総括

別紙３－１のアンケート調査を行った結果が別紙３－２である。

まず，課題研究Ⅱに該当する部分を分析すると，ポスター・論文作成を挙げている生徒が多い。英語による自分の研究を発表するという高いハードルに苦慮しながらも完成させたことが，有意義であると一定数の生徒が答えたことにつながっていると考える。

Ｑ１の授業内のイベントでは，１・２年生でのフィールドワークを挙げており，大学の専門家への訪問が有意義だったと答えている。その他，地域のNPOを主催しているフィールドワークアドバイザーの方との相談会を積極的に有効活用したことがうかがえる。大学や地域の方の専門知識を持つ大人の方に相談することが研究を進めるとこにつながったのではないか。また，定期的に行われた中間発表会や最終発表会が有意義だったと答えた生徒の割合が多く，研究を他の人に伝えるための論理立てやポスターデザインとその構成，原稿作りのための言葉の精選に多く力を注いだのではと分析する。

３年間を通して分析すると，Ｑ３の結果より外部での発表会への参加は有意義であったと答えた生徒の割合が非常に高くなった。校内における発表会に加え，自ら希望し参加した外部発表会では大きな収穫があったと答える生徒が多かったようだ。フィールドワーク同様，外部の発表会に参加し，異なる地域で気仙沼や海が抱える研究テーマをしたことは自信につながったのではないか。台湾研修やコカコーラ研修会では基本的に英語のみを使用し，研究を発表したり交流したりと印象深いものとなったようだ。

また，Ｑ４から課題研究を行うことで常に地域や世界に目を向けるため，興味関心が増すのは当然としても，知識を融合させる力を実感できた生徒が多くいた。各教科で取り組んでいる基本的知識の習得と思考力の養成の連続が，教科横断の性質を持つ課題研究において，実感できる生徒が増えた大きな要因となったのではないだろうか。

別紙３－３に挙げるグローバルリテラシーの自己評価において，他の類型より全項目で高い数値となった。特に学ぶ方法・語学力・多様性の項目では顕著な数値となっている。課題研究を通して，多様な社会に対応する考え方や価値観に触れる機会が多かったこと，大学教授との交流から生まれた動機付け等がこの数値につながったものと考えられる。３年次では英語ポスターと英語論文の２つの成果物作成に重点的に取り組んできたが，２年生から３年生への伸びも語学力が大きく伸長した。ポスターではSVを用いず句で表現すること，英語論文ではより具体的な表現を用いて説明することに，苦慮しながらも取り組んだことが英語の表現する力が伸

びたと実感しただろう。

授業内・校内外の別を問わず，あらゆるイベントが生徒にとって印象深いものであったものと考える。地域や全国の高校生が集まるイベントへ参加した生徒は自分の研究を日本語・英語で発表したが，その経験を通して周りへの関心がかなり高まったようだ。地域に目を向け研究の素地を経験した地域社会研究から，グローバル社会に目を向け人々が課題としているものをテーマとした課題研究Ⅰ・Ⅱを経験したが，３年間の研究活動を通して，地域や世界，社会への興味関心が増した生徒が半数を超えた。普段の授業と社会が密接にかかわっているという知識を融合させる力につながっていったものと分析する。課題研究を通して進路を明確にした生徒が学級の１/４を占めた。また，中学生の時は人の前で話をすることは大の苦手だった生徒も大学入試の面接で自分の意見を堂々発表することができ，課題研究の成果を出すことができたと話す生徒もいた。以上のことから，３年間課題研究を行うことは，生徒の能力の伸長や進路実現にとって非常に有意義であると考える。

課題研究Ⅱ　事後アンケート

3年間お疲れさまでした。3年間を振り返り、マークしてください。なお、課題研究活動についてのみ考えてください。

各設問は複数回答可です

3

Q1　研究を進める上で、有意義だった**授業内のイベント**を選んでください

- ◯ 地域理解講座（1年生5月　5領域に関する講演）
- ◯ 震災・防災講演会（1年生6月　東北大学　佐藤翔輔准教授）
- ◯ 1年創造類型座談会（1年6月）
- ◯ テクニカル講座（1年生7月　文章の書き方・情報の調べ方・図書館の活用）
- ◯ 課題図書レポート（1年生夏休み）
- ◯ フィールドワークⅠ（1年生10月　市内各企業・事業所）
- ◯ 中間発表会（1年生11月　スライドによる発表）
- ◯ フィールドワークⅡ（1年生12月　大学・市内・講演会・女川等）
- ◯ 学年発表会（1年生1月　アドバイザー来校）
- ◯ 総合学習発表会（1年生3月　代表がステージ発表）
- ◯ フィールドワークⅠ（2年生4月　森は海の恋人）
- ◯ 研究基礎を学ぶ（2年生4月　思考ツール・数字に疑問を持つ）
- ◯ ケーステタディ（2年生5月　100年に一度の干ばつ）
- ◯ フィールドワークⅡ（2年生7月　県内大学・専門学校）
- ◯ 講演会Ⅰ（2年生8月　拓殖大学　李久惟氏「台湾の文化・習慣」）
- ◯ 中間発表会（2年生10月　分野内で口頭、全体でポスター　アドバイザー来校）
- ◯ 講演会Ⅱ（2年生11月　東北大学酒井先生「これから研究を始める高校生のために」）
- ◯ フィールドワークⅢ（2年生12月　県内大学・市内調査・異文化理解セミナー）
- ◯ 講演会Ⅲ（2年生12月　菅原工業「外国人技能実習生」）
- ◯ 学年発表会（2年生1月　ポスター発表　アドバイザー来校）
- ◯ 総合学習発表会（2年生3月　口頭やポスター発表　防災フォーラム）
- ◯ 3年創造類型座談会（2年3月）
- ◯ 各種コンテストへ向けた準備（3年生）
- ◯ 講演会（3年生8月　東北大学　酒井聡樹氏）
- ◯ 英語ポスター・論文作成（3年生）
- ◯ 最終発表会（3年生10月　英語によるポスター発表）
- ◯ その他（　　）

Q2　研究を進める上で、有意義だった**校内のイベント**を選んでください

- ◯ フィールドワークアドバイザーとの相談（随時）
- ◯ CS講座（随時）
- ◯ スカイプセッション
- ◯ 英語スピーチコンテスト（10月）
- ◯ ロス先生英語講座（随時）
- ◯ その他（　　）

Q3　研究を進める上で、有意義だった**校外のイベント**を選んでください

- ◯ サイエンスフェスタ／GSフェスタ（11月　仙台三高）
- ◯ 海洋教育こどもサミットin東北（1年生洋野町、2年生気仙沼市）
- ◯ 気仙沼市防災フォーラム（1月　中央公民館）
- ◯ 全国海洋教育サミット（1年生2月　東京大学）
- ◯ 若狭高校発表会（2月　若狭高校）
- ◯ 東北SGH課題研究発表会（3月　仙台白百合女子大学）
- ◯ 全国SGHフォーラム（2年生12月　東京国際フォーラム）
- ◯ APU研修（3月　大分県　立命館アジア太平洋大学）
- ◯ コカ・コーラ講演会（宮城大　マシューウィルソン氏）
- ◯ 台湾研修（2年生10月　台湾）
- ◯ 自分たちで企画したイベントの実施（随時）
- ◯ 尚絅学院大学環境マルシェ（3年6月）
- ◯ その他（　　）

Q4　研究活動を3年間行って、良かった点や効果があったと思うのは、次のうちどれですか

- ◯ 地域への興味関心が増した
- ◯ 社会や世界への興味関心が増した
- ◯ 知識を融合させる力がついた
- ◯ 教科の授業が楽しくなった
- ◯ 進路先決定に良い影響を及ぼした
- ◯ 行動力がついた
- ◯ 学校が楽しくなった
- ◯ 英語の力がついた
- ◯ 大学等の入試に有効であった
- ◯ その他（　　）

別紙３－２　別紙３－１の事後アンケートの結果（回答数３４　回答率１００％）

Q1 研究を進める上で、有意義だった**授業内のイベント**を選んでください

地域理解講座（１年生５月　５領域	2人	6%
震災・防災講演会（１年生６月　東	4人	11%
１年創造類型座談会（１年６月）	3人	8%
テクニカル講座（１年生７月　文章	8人	22%
課題図書レポート（１年生夏休み）	1人	3%
フィールドワークⅠ（１年生１０月	17人	47%
中間発表会（１年生１１月　スライ	11人	31%
フィールドワークⅡ（１年生１２月	10人	28%
学年発表会（１年生１月　アドバイ	12人	33%
総合学習発表会（１年生３月　代表	5人	14%
フィールドワークⅠ（２年生４月	13人	36%
研究基礎を学ぶ（２年生４月　思考	5人	14%
ケーステタディ（２年生５月　100年	2人	6%

フィールドワークⅡ（２年生７月	18人	50%
講演会Ⅰ（２年生８月　拓殖大学	4人	11%
中間発表会（２年生１０月　分野内	17人	47%
講演会Ⅱ（２年生１１月　東北大学	9人	25%
フィールドワークⅢ（２年生１２月	10人	28%
講演会Ⅲ（２年生１２月　菅原工業	5人	14%
学年発表会（２年生１月　ポスター	18人	50%
総合学習発表会（２年生３月　口頭	6人	17%
３年創造類型座談会（２年３月）	5人	14%
各種コンテストへ向けた準備（３年	9人	25%
講演会（３年生８月　東北大学　酒	3人	8%
英語ポスター・論文作成（３年生）	14人	39%
最終発表会（３年生１０月　英語に	17人	47%
その他（	1人	3%

Ｑ２　研究を進める上で、有意義だった校内のイベントを選んでください

フィールドワークアドバイザーとの	23人	64%
ＣＳ講座（随時）	1人	3%
スカイプセッション	1人	3%

英語スピーチコンテスト（１０月）	5人	14%
ロス先生英語講座（随時）	人	0%
その他（	1人	3%

Ｑ３　研究を進める上で、有意義だった校外のイベントを選んでください

サイエンスフェスタ／ＧＳフェスタ	1人	17%
海洋教育こどもサミットin東北（１	4人	57%
気仙沼市防災フォーラム（１月　中	人	0%
全国海洋教育サミット（１年生２月	2人	50%
若狭高校発表会（２月　若狭高校）	4人	80%
東北ＳＧＨ課題研究発表会（３月	4人	50%

全国ＳＧＨフォーラム（２年生１２	3人	75%
ＡＰＵ研修（３月　大分県　立命館	3人	38%
コカ・コーラ講演会（宮城大　マシ	14人	58%
台湾研修（２年生１０月　台湾）	11人	92%
自分たちで企画したイベントの実施	5人	100%
尚絅学院大学環境マルシェ（３年６	3人	75%
その他（　　）	4人	11%

Ｑ４　研究活動を３年間行って、良かった点や効果があったと思うのは、次のうちどれですか

地域への興味関心が増した	20人	56%
社会や世界への興味関心が増した	23人	64%
知識を融合させる力がついた	16人	44%
教科の授業が楽しくなった	人	0%
進路先決定に良い影響を及ぼした	9人	25%

行動力がついた	13人	36%
学校が楽しくなった	人	0%
英語の力がついた	8人	22%
大学等の入試に有効であった	9人	25%
その他（　　）	2人	6%

別紙３－３　グローバルリテラシー自己評価

表　グローバルリテラシー３年生の結果

		知識技能	学ぶ方法	批・科思考力	総・未思考力	語学力	言語コミュ力	情報活用力	多様性	協働性	行動力	健康・体力	豊かな人間性
全体	平均	2.47	2.53	2.61	2.32	2.14	2.36	2.40	2.29	2.53	2.52	2.46	2.31
創造以外	平均	2.41	2.44	2.53	2.24	2.06	2.29	2.34	2.20	2.46	2.44	2.38	2.23
創造の先輩	3年平均	2.65	2.68	3.03	2.88	2.68	2.76	2.94	2.79	3.00	3.09	2.68	2.82
創造	3年次平均	2.86	3.06	3.06	2.81	2.67	2.78	2.75	2.81	2.94	2.97	2.94	2.81
	2年次平均	2.52	2.70	2.67	2.58	2.24	2.73	2.79	2.45	2.67	2.82	2.73	2.42
	創造-創造以外	0.45	0.61	0.52	0.57	0.61	0.48	0.41	0.60	0.49	0.53	0.56	0.57
	3年次-2年次	0.35	0.36	0.39	0.23	0.42	0.05	-0.04	0.35	0.28	0.15	0.22	0.38
	先輩との比較	0.21	0.38	0.03	-0.08	-0.01	0.01	-0.19	0.01	-0.06	-0.12	0.27	-0.02

授業改善

２－１　主体的・対話的で深い学びを目指す授業改善

主体的・対話的で深い学びを目指し，本校では様々な取り組みを行っているが，その中で，英語科のパフォーマンス評価，数学科の課題研究，地歴・公民科のアクティビティを紹介する。

（１）パフォーマンステスト

定期考査のようなペーパー試験だけでなく，４技能をバランスよく育成することを目指し，生徒の英語の技能を実演する形式のパフォーマンステストを実施している。スピーキングテストでは，身近な話題について質問に答える，絵を見てその状況を英語で説明する，相手に予定を尋ねたりアドバイスをしたりするという状況を設定し，実生活を意識した英語使用場面を想定して行っている。英文法の正確さに加え，分かりやすく伝えようとする姿勢や話し方，表現の工夫などを総合的に評価している。

１０月には１・２年生対象の英語コンテストを実施し，スピーキング能力，及びプレゼンテーション能力の向上を図っている。英語コンテストは，各クラスから代表となる生徒を選出し，英語の暗唱やプレゼンテーションを実演するという内容である。普段のパフォーマンステストをとおして身につけた英語力を発揮できる機会となっており，参加者は評価基準をもとに練習を重ねた上で本番に挑む。参加者以外の生徒にとっても，同級生や先輩の質の高い発表に触れることがよい刺激となり，英語学習に対する意欲向上につながっている。以下に，英語コンテストの際に使用した評価基準を示す。普段の授業で行っているパフォーマンステストにおいても，類似した評価基準で評価を行っている。評価者にとっても評価される生徒にとっても分かりやすいものであることを意識し，主観に頼らない評価の公平性や，具体的にどのようなことができればいいのかという目標設定や振り返りをしやすくするという点に留意している。

英語コンテスト　プレゼンテーション部門　評価基準

	声	目線・態度	発表内容
A（5 点）	相手に分かりやすいように間や抑揚に気をつけながら、はっきりと大きな声で発表している。	聴衆に視線を向けながら堂々と発表している。	情報量が多く、内容が分かりやすい。スライド資料が効果的に用いられており、聞き手が興味を持てるよう工夫が見られる。
B（3 点）	部分的に間や抑揚に気をつけているが、ところどころ聞こえない声で発表している。	ときどき聴衆に視線を向けているが、原稿に目を落としている回数のほうが多い。	情報量は多いが、内容が少し分かりづらい。スライド資料が分かりづらい、見にくいところがあり、聞き手が興味を持つようにもう少し改善が必要である。
C（1点）	聞き取りにくく、間や抑揚に工夫がない。	聴衆に視線を向けず、終始原稿を見ながら発表している。	情報量も少なく、内容も分かりづらい。聞き手が興味を持てるよう工夫が必要である。

（２）課題研究（数学科）

数学科では，思考力養成のため，普通の数学の問題とは趣向を変えた問題を「課題研究」と題して課している。以下に，課題研究の問題の１例を示す。

課題

バレーボール部員であるあなたがバックアタックの練習をします。コート後方より助走して踏込み，アタックライン上から相手コートの端（エンドライン）に向かって真っすぐスパイクを打つとき，垂直方向に何 cm のジャンプが必要か。

《条件》

身長：あなたの身長　スパイクの打点：身長＋（身長の半分）　ネットの高さ：男子２m40 cm　女子２m20 cm

コートについて：ネットからエンドラインまで９m，ネットからアタックラインまで３m

① あなたの予測を書きなさい。
② ネットより１０cm 上から相手コートのエンドラインに向かって真っすぐスパイクが打ち込まれるとき，コートに打ちこまれるボールの角度は何度になるか求めなさい。なお，ネットの高さはプリント表面の《条件》のとおりである。また，教科書の巻末にある「三角関数の表」を用いること。
③ ②の結果を用いて，《条件》をもとに，ジャンプの高さを求めなさい。
④ ③の結果を受けて，気付いたこと・思ったことを書きなさい。

評価は，基準を示し，５点，４点，３点の３段階で行っている。数学で学習した内容を身近な場面を例として計算することで，学習した知識の理解を深め，数学の抽象的な概念や内容の意味を実感することが期待される。課題研究に取り組む生徒達は，級友と話し合いながら考えている様子も見られ，活動的な学びが実現されていると感じる。

（３）アクティビティ

地歴・公民科はアクティビティと題し，スピーチやグループワークなど，授業中の活動的な学習に対する取り組みや成果を評価する課題を実施している。ここでは日本史の例を紹介する。

活動

① 歴史にかかわる本を読んで，その感想をまとめる。
② 歴史にかかわるテレビ番組やＤＶＤを視聴し，その感想をまとめる。
③ 博物館などにいき，歴史について学んだことをまとめる。
④ 歴史にかかわる新聞記事を読み，その感想をまとめる。

方法

①を選んだ場合
・題名のところには「読んだ本のタイトル」を記入する。
・内容のまとめを１００字以内，読んだ感想を３００字以内でまとめる。
②を選んだ場合
・題名のところには「視聴した番組名やＤＶＤのタイトル」を記入する。
・内容のまとめを１００字以内，読んだ感想を３００字以内でまとめる。
③を選んだ場合
・題名のところには「訪れた博物館の名前」を記入する。
・関心をもった展示品について１００字以内，学んだ内容を３００字以内でまとめる。
④を選んだ場合
・題名のところには「新聞名（日付)」を記入する。
・選んだ記事のまとめを１００字以内，読んだ感想を３００字以内でまとめる。

アクティビティを実施することで，生徒が様々な視点で歴史について考えられるようになった。生徒の意識として，これまでは教科書などの書籍から得られる情報がほとんどであったようだが，映像や新聞，博物館など様々な情報源から歴史を考えることで，多角的に物事を考えられるようになった。例えば死刑制度についてテーマにしたとき，はじめは道徳面のみで考えていた生徒が，被害者や加害者の立場など幅広く考えることができるようになった。また，言語活動を通して生徒同士が意見を交わすことでも歴史についての考えが深まったようである。このように活動的な課題により，生徒の思考力向上につながっていると感じる。

２－２　スモールステップ表の活用

スモールステップ表とは，教科や活動ごとに「目標となる資質・能力」を具体化し，学年ごとに指導観点及び評価規準を明確にしたものである。一昨年度は，本校生の実態に合ったスモールステップ表となるよう，各教科で特に力を入れて指導にあたる指導観点・評価規準の見直し，研究授業の指導案には「単元目標」や「本時の目標」とスモールステップ表の指導観点・評価規準の関わりを明記することとした。

昨年度に引き続き，主要５教科と課題研究について，スモールステップの達成度を評価した（p.21 表１３）。研究授業等の授業実践にもスモールステップを示す試みも出ており，SGH 最終年度を迎えるにあたり，スモールステップ表の改訂を進めたい。

２－３　授業改善の体制づくり・教員研修

（1）「授業力向上プラグラム」の実施について

今年度は，「教員専門性開発アプローチ」の充実に向けて，前年度までの「単元の指導構想」に加え，スモールステップ表の目標に向けた指導を目指し，２つのコースを設定した。

Ａ　ＳＧＨ実践チャレンジコース

各教科から，経験の長い先生方に代表で研究授業に取り組んでもらうようにした。生徒が主体的で探究的な学びに向かうにはどういう取り組みが必要か，各教科で検討することができた。

＊各教科代表の授業実践

①令和元年　５月３０日（木）４校時　ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅲ　授業者：揚野耕平 教諭
　単元名「Leaving Microsoft to Change the world」

②令和元年　６月２１日（金）７校時　現代社会　授業者：我妻拓弥 教諭
　単元名「民主政治の成立」

③令和元年　７月１８日（木）３校時　化学基礎　授業者：鈴木悠生 教諭
　単元名「物質量」

④令和元年　９月３０日（月）６校時　論理国語　授業者：二階堂慧 教諭
　単元名「推論を用いて自分の考えを形成し，その論拠を吟味する」
　　＊新学習指導要領の「論理国語」を意識した研究授業

⑤令和元年１１月２９日（金）３校時　美術Ⅰ　授業者：菅原希美 教諭
　単元名「抽象画の表現～ジャクソン・ポロックから学ぶモダンテクニック～」

⑥令和元年１２月１６日（月）２校時　体育　授業者：内海好晴 教諭
　単元名「球技　ネット型ソフトバレー」

⑦令和２年　１月２１日（火）３校時　数学Ⅱ　授業者：小野寺仁一 教諭
　単元名「微分法と積分法」

Ｂ　開かれた授業実践コース

主に経年研修に該当する教員中心に，授業力向上のための研究授業枠を設けた。

＊初任者研修関連

①令和元年　５月２４日（金）７校時　地理Ｂ　授業者：最上龍之介 教諭
　単元名「さまざまな地図と地理的技能」

②令和元年６月７日（金）２校時　数学Ⅰ　授業者：小野寺将 教諭
　単元名「集合と命題」

③令和元年６月２４日（月）２校時　地学基礎　授業者：久野直毅 教諭
　単元名「活動する地球　地震と地殻変動」
④令和元年１１月６日（水）４校時　地学基礎　授業者：久野直毅 教諭
　単元名「移り変わる地球　地層の形成」
⑤令和元年１２月１６日（月）５校時　地理Ｂ　授業者：最上龍之介 教諭
　単元「日本の自然の特徴と災害や防災・減災」
⑥令和元年１２月９日（月）７校時　数学Ⅰ　授業者：小野寺将 教諭
　単元名「図形と計量」

＊初任者研修（２年目）関連
①令和元年　７月２４日（水）１校時　ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱ　授業者：西城恵子 教諭
　単元名「Lesson3 OOPARTS」
②令和元年９月６日（金）７校時　保健　授業者：久保川紗恵 教諭
　単元名「健康の保持増進と疾病の予防」
③令和元年１０月２３日（水）５校時　ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱ　授業者：西城恵子 教諭
　単元名「Lesson6 Ashura – A Statue with Three Faces-」
④令和元年１０月２３日（水）６校時　生物基礎　授業者：高橋智子 教諭
　単元名「生物の体内環境の維持」
⑤令和２年２月６日（木）５校時　体育　授業者：久保川紗恵 教諭
　単元名「ダンス（創作ダンス）」
⑥令和２年２月１４日（金）５校時　生物基礎　授業者：高橋智子 教諭
　単元名「生物の多様性と生態系」

＊５年経験者研修
①令和元年１０月１３日（金）５校時　地理Ｂ　授業者：笹氣真孝 教諭
　単元「都市・居住問題」
②令和元年１２月１８日（水）５校時　日本史Ｂ　授業者：内海秀昭 教諭
　単元名「立憲国家の成立と日清戦争」
③令和２年１月８日（水）４校時　数学Ⅱ　授業者：豊島海 教諭
　単元名「微分法と積分法」
④令和２年１月１４日（火）１校時　生物基礎　授業者：佐藤佑 教諭
　単元名「生物の多様性と生態系　バイオームとその分布」
⑤令和２年１月１７日（金）３校時　保健　授業者：齋藤綾 教諭
　単元名「生涯の各段階における健康」
⑥令和２年１月２１日（火）５校時　ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱ　授業者：加藤亜衣 教諭
　単元名「Lesson８ Working against the Clock」

＊その他（指導力向上や新学習指導要領に向けた自発的な研究授業実践）
①令和元年１２月１２日（木）５校時　ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ　授業者：大沼宏多 教諭
　単元名「Lesson７　Paper Architect」
②令和元年１２月１７日（火）５校時　現代文Ｂ　授業者」山田尚子 教諭
　単元名「イメージを言葉で伝えよう」
③令和２年１月１４日（火）４校時　国語・美術　授業者：髙橋健司 教諭・菅原希美 教諭
　単元名「評論を読んで，批判的思考力を養おう」＊カリキュラム・マネジメントの視点

（２）教員研修
①「ＳＧＨ事業についての職員研修」
　日時：令和元年（平成３１年）４月２２日（月）　１６：２０～１７：００
　目的：残り２年の円滑なＳＧＨ事業の運営に向けて，これまでの経緯とこれからの課題に

ついて全職員が共通理解をもつ
講師：研究企画部　鈴木悠生 教諭
内容：ＳＧＨの理念，本校の目指す学校の姿，本校が推進する各週プログラムについて確認する場となった。また，これまでの報告書を参照しながら確認を行ったので，新しく転任してきた教員も，これまでのＳＧＨ事業の経緯とこれからの課題について共通理解を持つことができた。

②課題研究指導のための研修会「これから課題研究を指導する先生方のために」
日時：令和元年７月１２日（金）本校会議室１６：１０～１７：１０
講師：東北学院大学院生命科学研究科准教授　酒井聡樹 氏
目的：本校職員の課題研究指導力向上の機会を設ける
内容：研究の意義や方法，テーマ設定のポイント，効果的なまとめ方，論文作成についてのポイントについて，特に高校生の段階で気をつけるべきことに特化した講演。

③岩手県立盛岡第三高等学校を招いての授業研修会
日時：令和元年１０月２９日（火）１３：００～１６：００
講師：岩手県立盛岡第三高等学校　高橋栄一 氏　円井哲士 氏
目的：アクティブラーニングの実践先進校の方を招き，実践から手法を学ぶ
内容：盛岡第三高等学校から講師を招き，本校生徒対象にアクティブラーニングを用いた授業実践を行ってもらった。２年生の化学基礎，日本史Ｂで実施した。授業検討会では，具体的な授業準備の要点，実践で気をつけたことを中心に質疑応答を行った。

④　ルーブリック評価研修会
日時：令和元年度１月２１日（火）　１６：１０～１７：１０
講師：研究企画部　豊島海 教諭・内海秀昭 教諭
目的：１学年「地域社会研究」・２学年創造類型「課題研究Ｉ」の全体発表会に向けて，評価に活用するルーブリック表の共通理解を図る
内容：当日の評価者となる教員中心に研修会を開催した。昨年度のポスターと，発表の実際の記録映像を用いて，ルーブリック表に従うとどういう評価になるか，一つ一つ基準を確認しながら検討していった。評価が分かれやすいポイントが職員間で明確になり，研修会後に再度検証した結果を職員間で共有することができた。

２－４　ＰＢＬ型授業法の研究・実践

（１）理科（化学基礎）での実践
授業者：髙橋唯教諭　　単元名：「物質量と化学反応式」
対　象：人文類型３年２４名
①単元のねらい
・物質量と粒子数，質量，気体の体積との関係について理解する。
・化学反応式が化学反応に関与する物質とその量的関係を表すことを理解する。
・日常生活の中にある化学反応から，物質量の考え方を活用して変化量等を定量的に考えることができる。
・定量的に物事（問題）を考えることの必要性や重要性を理解すること。
②活動のねらい
・日常生活の中でも，変化量等を定量的に見る際には物質量を使って考えることができる。
・定量的に物事（問題）を考えることの必要性や重要性を理解すること。
③実践内容

時数	学習内容
1	原子の相対質量 原子量・分子量・式量
2,3	物質量
4	溶液の濃度
5	化学反応式と量的関係
6～11	地球温暖化とその対策

この単元の学習は全１１時間で行った。第５時までは基礎的な知識の習得を目指し，講義と演習を中心に行った。第６時からは「自分たちの地球温暖化対策率先行動計画をつくろう」と題して二酸化炭素排出量を減らす生活行動を考えさせる授業実践を６時間かけて実施した。国が国連気候変動枠組条約に，「２０３０年までに温室効果ガス 26%削減」の約束草案を提出し，その達成に向け，家庭では２０１３年度比約４０％の削減を目指している。各家庭で約４０％の削減を達成するには，自分たちの生活行動をどのように変えるべきか定量的に考え，気仙沼市が発表したような地球温暖化対策率先行動計画を具体的に作成し，発表するというものであった。第６時からはグレタ・トゥーンベリさんによる国連でのスピーチや世界・国・県・市の地球温暖化に関する各種データを知ることで身近で深刻な問題であることを実感させた。そして班ごとに卒業後の生活を想定させ，排出される二酸化炭素排出量を求めさせた。ここからどんな対策をして二酸化炭素排出量を約 40%削減するのか考えさせた。それらをスライドにまとめさせ，市の環境課の方をお呼びして発表会を行った。

（２）英語（コミュニケーション英語Ⅲ）での実践

授業者：揚野耕平教諭　　単元名：「Leaving Microsoft to Change world」

対　象：創造類型３年３６名

①単元のねらい

・人の生き方・人生の進路の選択に関心を持ち，社会貢献について考えながら，題材を鑑賞する。

・仮定の状況について，自分の意見を英語で書き，それを発表して他のメンバーと意見を交わすことができる。

・ウッド氏の社会貢献について読んだり聞いたりしたことを理解ししたことを踏まえ，気仙沼に住む外国人技能実習生に喜んでもらえる新たな娯楽施設に関する広告を作ることができる。

・社会貢献について柔軟に考えている。

②活動のねらい

・気仙沼に住む外国人技能実習生に喜んでもらえる新たな娯楽施設を考えることができる。

・気仙沼に住む外国人技能実習生に自分のアイディアを周知する広告を英語で作ることができる。

③実践内容

時数	学習内容
1～6	Leaving Microsoft to Change world
7～10	外国人技能実習生のための娯楽施設

この単元の学習は全１０時間で行った。第６時までは教科書本文を通して，ウッド氏の社会貢献について知りながら，単語学習や内容読解を中心に学習した。第７時からは「気仙沼の外国人技能実習生のための娯楽施設を考える」と題して４時間かけて実施した。以前テレビ番組で，外国人技能実習生の娯楽がないということを特集していた。現在気仙沼市にも外国人技能実習生が多く滞在する。実際に技能実習生がよく通っていたコーヒーショップが閉店してしまい，娯楽施設が減ってしまった。そこで，そのコーヒーショップ跡地に外国人技能実習生向けの新たな娯楽施設を出店するにはどんな店がよいか考えさせた。まずはどんな店がよいかシンキングツールを使いながらアイディアを出させ，仮説を立てさせた。次にその店の広告を実際に英語で作成させた。

（３）まとめ

ここに示した実践は一部でしかなく，実際にＰＢＬ型授業を実践された先生が多くいた。教科書の内容をただ教えるだけでなく，学んだ知識を使って日常生活の中に存在する身近な課題解決を考えさせることで，各教科の実用性を実感し学習意欲を高めることができると考える。ただ，この活動を行う上で教員側もアンテナを張り，地域に目を向け，課題を知っておく必要がある。それらの課題と自身の教科の知識がどう結びつくのか，または課題に対してどのようなアプローチをすれば生徒にとって最適な課題となるのか，課題解決に向けて何を与え，何を考えさせるのか，短期間での実践で行うためにはこのような教員側の準備が生徒の学習に大きな影響を与えうる。

今後もこのような授業が全教科，全教員に浸透していくために，研修を重ね相互に授業を見学することを続けていく必要がある。

２－５　教科での観点別評価法による指導と評価の一体化の研究・実践

（１）観点別評価についての基本的な考え方

「グローバル・リテラシー＝グローバル視野を備えた“確かな学力”)」を養成し，「学ぶ意欲」の高揚を目標としている。この目標に向け，多様な資質能力の獲得状況を適正に測る学習評価及び学ぶ意欲を高める学習評価の方法を研究・開発・実践することが重要である。この観点に立ち，本校は従来実践してきた観点別評価をより明確化し，生徒や保護者に対してその結果を知らせることで，学習への動機付けを強め，協働型学習や教員専門性開発と一体化して取り組むものである。本校の観点別評価の方法を設計するに当たっては，以下の３点を基本とした。

ア　単位認定の厳格性を確保するため，１００点法による評価（評点）を堅持する。

※各観点を到達度によりＡ，Ｂ，Ｃの３段階で評価し，その組み合わせにより評定（５段階）を定める方法は用いない。

イ　現行の学習指導要領及び新学習指導要領の評価の観点を踏まえ，本校では以下の３観点で評価する。

①知識・理解と技能※　②思考・判断・表現　③関心・意欲・態度

※①の観点に関しては，現行の学習指導要領の「知識・理解」と「技能」を合わせて評価。

ウ　これまでの評価方法との連続性，それぞれの教科特性を考慮し，教科裁量の枠を確保するシステムとする。

さらに，平成２９年度からの実践開始に向けて，以下の３点に留意することとした。

ア　生徒に観点を明示する以上，教科として十分に研究と検討を行い，説明責任を果たせる，定期考査等における作問，ワークシートやレポート等における設問作成を行う。

イ　教科の裁量枠が広がる分，教科として統一的に取り組む。

ウ　これまでの学習評価結果との間に，大きなギャップをつくらない配慮を持つ。学年平均点６５点を目標とすることが一層重要になる。また，丁寧で統一的な説明を生徒・保護者に行う。

（２）方法

従来の平常点を含めて，学習活動を全般に渡って観点別に評価し，その合算として評点を算出する。

①教科単位で，評価対象の種類とその間の重み付け，３観点の年間目標比率と評価対象毎の３観点の年間目標比率を決定する（表５－１）。それを年間学習指導計画（学習シラバス）で生徒・保護者に周知する（表５－２）。なお，各観点の重みはバランスよく評価することが理想的だ

が，従来評価からの激変を避けるために，「知識・理解＋技能」上限を６０％と規定し，評価を実践していく過程で，理想とするバランスに近づけるよう全教科に評価法の検討・改善を求めた。

表５－１　各教科の３観点の目標比率

観点		国語	数学	英語		理科	地歴公民	芸術	情報	家庭	保健体育	
				コミュ英	他						体育	保健
①	知識・理解＋技能	45	50	50	45	60	60	50	40	45	50	55
②	思考・判断・表現	35	35	30	35	20	24	30	35	30	20	30
③	関心・意欲・態度	20	15	20	20	20	16	20	25	25	30	15

表５－２　シラバスの掲載例

教科名　　英語（コミュニケーション英語）

観点別評価・算出方法　　①　知識・理解 ＋ 技能　　②　思考・判断・表現

③　関心・意欲・態度

各観点の比率　　ＰＴ：パフォーマンステスト

重み付け	60			10			15			15			100
評価項目	定期考査			小テスト			PT(GTEC含)			課題・提出物・課題テスト			100点換算
観点比率（①：②：③）	7	3		5	5		2	2	6	2	2	6	
①知識・理解＋技能	42			5			3			3			53
②思考・判断・表現	18			5			3			3			29
③関心・意欲・態度							9			9			18

シラバスへの掲載案

重み付け	60	10	15	15	100
評価項目	定期考査	小テスト	PT(GTEC含)	課題・提出物・課題テスト	評価の比率
①知識・理解＋技能	◎	◎	○	○	50
②思考・判断・表現	○	◎	○	○	30
③関心・意欲・態度			◎	◎	20

②　３観点の年間目標比率を踏まえて，各期（本校は１・２学年が４期制，３学年は３期制）の評価対象毎の３観点比率を設定する。各期で年間目標比率に完全に一致させる必要はなく，年間を通して可能な限り目標比率に近づけるように評価する。各観点比率に基づいて，考査問題，ワークシートの設問等を作成し，実践する。考査問題やワークシートには，評価の観点を原則明記する。また，ノートなどの提出物においては，提出したか否かではなく，ルーブリック表を活用することで，その内容について評価する。ルーブリック表も生徒に提示し，評価の結果を明確化させる。また，パフォーマンステストなども積極的に行い，生徒の多様な能力を広く評価できるように努める。

③　各期の総括的評価では，計画に基づき次のような表によって，観点評点及び評点（観点評点を合計した点数）を算出する。

表５－３　観点評点の計算例

第1学年英語表現Ⅰ（期）成績集計

			定期考査（65）				小テスト（0）				Performance（25）				課題テスト・提出物（10）				第1期（100）			
番号	名前	性	①49	②16	③	小計	①	②	③	小計	①3	②12	③10	小計	①2	②2	③6	小計	①54	②30	③16	合計
101		M	42	10		52					3	8	7	18	1	1	6	8	31.3	15.5	13.0	60
102		M	20	2		22					2	8	10	20	1	0	6	7	16.0	9.3	16.0	41

④　通信票とともに「学習の記録」という観点評点を明記した本校独自の成績表を配布し，生徒に周知する。

⑤　学年末の総括的評価では，観点評点と評点はそれぞれ各期の平均点とする。

（３）本校の観点別評価方法の特徴

①　観点評点による総括的評価

観点毎の評価を，Ａ，Ｂ，Ｃなどの段階ではなく評点（数値）とすること，観点評点の合算で（総合的な）評点とすること。これにより，単位認定を従来通り評点を基準に行うことができ，評点を重視する高校の評価制度を保持できる。

②　年間の３観点目標比率の設定

定期考査だけでなく，あらゆる評価対象を観点毎に捉え，その年間評価計画を当初に作成し，それを詳細化して各期の評価計画を実践する。これにより，以下の点で指導と評価の一体化を促進させ，学習指導全般の計画性を高め，指導と評価の一体化を図ることができる。また，期毎ではなく年間の目標比率としていることから，単元や各期の学習内容の特性を生かした柔軟性ある指導も可能になる。例えば，１期は「知識」に重きをおいて評価し，２期は「思考」に重きをおいて評価することができる。

表５－４　本校独自の観点別成績票

教科	英語		
科目	コミュニケーション英語Ⅰ		
観点	知識 理解 技能	思考 判断 表現	関心 意欲 態度
１期	42/59	11/20	20/21
	72		
学年末	45/59	12/20	19/20
	75		
評定	4		

本校の観点別評価の利点を以下に整理する。

ア　年間目標を詳細化して各期あるいは各単元の観点比率等を計画する過程で，教員は，指導目標を明確化し，それに向う体系的で効果的な指導計画を立てられ，具体的な授業改善につなげることができる。

イ　各期・各単元の観点別比率に沿ってワークシート等を作成することで，授業後に観点に対する評価ができ，授業中の生徒と向き合う時間を増加させることができる。

ウ　あらゆる評価対象を観点別に捉えて指導することで，生徒の学習到達目標がより明確化され，目的意識の涵養と「主体的・対話的で深い学び」の成立に寄与することができる。

③　教科裁量枠の確保

高等学校の教科は，より専門性が高まることから，全ての教科で同一の評価基準を設定することは，生徒の資質・能力を正当に評価することにならない。そこで，観点別の評価基準設定に当たっては，教科の裁量枠の確保を重視することとした。これにより，教科単位の授業改善の一環として観点別評価を位置付けることが期待できる。また，音楽や美術といった同一教科であってもその内容に大きな差のある教科に関しては，学習指導委員会で協議の上，科目毎の評価基準設定も認めることとした。

（４）実施までの経緯

①　平成２６年度以前（従来）

学習シラバスで評価の観点を生徒に知らせ，指導においても観点別評価に取り組むよう各教員に働きかけてはいたが，それが学校全体の具体的な取組には至っていなかった。教務規定の変更もなく，評価内容を考査点と平常点に大別し，平常点は２０％以内のままであった。学習評価全体が考査に偏り，評価の観点としても「知識・理解」と「技能」に偏重していたと言え

る。多様な資質能力の育成を図る上で学習評価の改善は避けられぬものであった。

② 平成２７年度（情報収集・研究期）
・新たな学力観へのシフト，高大接続改革に伴う大学入試の変化や生徒指導要録の様式の変更に対応するため，観点別評価について教務部を中心として研究を開始する。
・次年度から課題研究で観点別評価を試行することに決まる。

③ 平成２８年度（評価方法の詳細に関する検討期）
・年度当初に，次年度から観点別評価に移行する予定であること，そのために今年度は，考査等における観点別作問に取り組むことが決まる。
・教務部，学習指導委員会で観点別評価方法の検討を開始。
・年度末，観点別評価の方法を決定し，それに伴い教務規定も改定。
・次年度使用の学習シラバスを，学習到達目標を詳細化した形式に大幅に変更。

④ 平成２９年度以降（実施と検討・改善期）
・始業式直後に，教務担当からの全生徒への告知，文書による家庭への周知。
・観点別評価の改善と検討

（５）成果と課題

観点別評価の導入に対して，多くの教員から，肯定的な意見が挙がった。観点を意識することで，授業方法の改善につながったという意見も多かった。観点別評価は着実に定着しており，現在は考査問題だけでなく，小テストやワークシート等も観点別に評価する方法が浸透している。さらに，多くの教科でプリントなどの評価対象物において，ルーブリック（表５－５）を作成・提示しており，生徒が課題に取り組む際，目標を設定しやすくなっている。

表５－５　提出物に関するルーブリック表

	A	B	C	D
関心（ノート）	数式，グラフ，図が丁寧にまとめられている。さらにメモを書き込むなど独自の工夫が見られる。	数式，グラフ，図が丁寧にまとめられている。	数式，グラフ，図が丁寧にまとめられていない。	数式，グラフ，図が丁寧にまとめられていない。さらに字が汚い。

課題に関しても，様々な意見が挙がっている。評価方法に正解はないため，教科会や学習指導委員会を通して，観点別評価の課題と改善方法を協議し，改善することは，毎年行うべきことである。現在，上げられている問題点を以下に示す。

(イ)観点評点の合計と評点が一致しない。
(ロ)各観点の評価が数値のため分かりにくい。(A，B，C などの表記の方がよいのでは？)
(ハ)観点別評価の結果を教員・生徒共にその後の授業・学習に十分に反映できていない。

(イ)に関して

本校では，観点評点を四捨五入した数値を観点別成績票に記載しているため，以下のように２つの点数が一致しないことが起こってしまう。

①知識・理解と技能・・・・・・・・・２５．５点　→四捨五入→２６点
②思考・判断・表現・・・・・・・・・２２．５点　→四捨五入→２３点　→合計６０点
③主体的に学習に取り組む態度・・・１０．５点　→四捨五入→１１点
合計５８．５点　→四捨五入→５９点

本校では，１００点法による評価を堅持しているため，できるだけ誤差が小さくなるように観点評点を四捨五入せずに合計し，その合計点を四捨五入した整数値を評点とする計算方法（四捨五入は１回）を採用している。上の例では，５９点が正しい評点である。一方，観点別成績票の観点評点は四捨五入した数値を表記しているため，その点数を合計すると６０点となり，評点と一致しなくなってしまう。このことに関しては，長い時間を掛けて議論したが，小数を含む数値は生徒・保護者にとって分かりにくく，また，25.5342･･･などと小数第１位以下に数値が連続する場合もありえるため，観点評点は整数表記とし，観点別成績票に，「観点別の点数の合計と評点（１００点）が四捨五入の関係で一致しない場合があります。」という一文を示す妥協案を採択した。この問題は，１００点法と観点別評価を併用する以上，避けることのできない問題である。よって上の例では，１００点法を重視する場合，評点は５９点，観点別評価を重視する場合，評点は６０点となる。どちらの計算方法を採用するか（つまり１００点法を重視するか観点別評価を重視するか）は，学校毎に議論して決定する他ない。

(ロ)に関して

観点評点を数値で表すと，点数が明確化される利点があるが，意見で挙がった通り，生徒・保護者にとっては，Ａ，Ｂ，Ｃなどの段階的な表記の方が各自の学習到達度が分かりやすい。しかし，Ａ，Ｂ，Ｃ表記にした場合，次のような検討事項が生じる。

(ロⅠ)全観点がＡ，Ａ，Ａでも評点が７９点，つまり評定４の場合が生じる。

(ロⅡ）Ａ，Ｂ，Ｃを区切るカッティングラインの設定が困難である。

（ロⅠ）の問題も１００点法と観点別評価を併用していることから生じる問題であり，各観点の学習到達度を分かりやすくすると，逆に評定との関係が分かりにくくなるというジレンマに陥ってしまう。この問題を解決するためには，１００点法による評価をやめ，「Ａ，Ａ，Ａの場合，評定は５」というように，各観点の到達度をもとに評定を定める方法に評価法を改めなければならない。これは，高校に根付く１００点法を改めるという極めて大きな改訂であり，現在のところ，本校ではこの方法を採用する予定はない。そのため，分かりにくさはあっても観点評点を数値で表す方法を継続している。

（ロⅡ）に関しては，観点比率を教科の裁量によって決めていることから，カッティングラインも教科で定めるべきである。カッティングラインを決めること自体は容易だが，Ａ，Ｂ，Ｃの組み合わせと評定との整合性を考慮した場合，適切なカッティングラインをどこに設定すればよいのかが途端に分からなくなる。

(ハ)に関して

本校では期毎に，県教委が採用している県統一の教務支援システムより出力される成績票と本校独自の観点別成績票（表５－４）を配布している。これは，教務支援システムが観点別評価に対応していないためである。生徒が観点評点を確認することで，自分の足りない能力を把握し，その後の学習に生かすというねらいがあるが，そのねらいの達成度は不十分であると感じる。１００点法の文化は，生徒にとっても馴染み深いものであり，多くの生徒は成績の善し悪しを，観点を意識せず，評点の“平均点”を基準に考える傾向がある。そのため，観点評点に目を向けさせるような指導を継続させる必要がある。

（６）今後に向けて

観点別評価には，（５）で挙げたような様々な課題があるが，評価において最も重要なことは，形成的評価を効果的に行い，授業や学習におけるＰＤＣＡサイクルを円滑に回すことである。考査問題や小テスト，ワークシートなどほぼ全ての評価対象物に観点が示されるようになり，確実に観点別評価は本校に浸透したと言える。評価対象物に対するルーブリック表（表５－５）も多くの教科で導入されており，観点別評価の精度は益々向上している。今後は，（５）（ハ）で挙げたように，評価の結果をどれだけ授業と学習にフィードバックさせることができるかが最大の要点である。そのためには日頃から，観点，つまり育成させたい資質・能力を意識した授業づくりを行うことが重要である。生徒の授業や課題に取り組む姿を見ると，生徒も観点を意識した学習の重要性に気付き始めている様子である。授業と評価を通して，多様な資質・能力を身に付けるこ

との重要性を理解させるよう努めていきたい。

最後に，今回は詳しく触れなかったが，観点別評価と修得の関係について述べる。多くの高校では，１００点法により算出された評点を元に単位の修得認定を行う。つまり評点４０点以上でなければ，単位は修得認定されない。これを観点別評価と関連づけて考えた場合，ある観点が０点であっても他の観点の合計が４０点に達していれば単位修得認定されるということになってしまう。この現状は，多様な資質・能力を育成するという観点別評価の目的から明らかに外れている。しかし，１００点法と観点別評価を併用する以上，この問題は必ず生じる。観点別評価には，１つの能力に偏らず，多様な資質・能力をバランスよく育てるという利点が，１００点法には成績を公正且つ明確に数値化するという利点があり，どちらか片方を選べば解決するという問題ではない。それぞれの長所を取り入れながら，よりよい評価法を目指す過程において生じる必然であり，人を評価するとは，これほどまで難しい営みなのである。今後も，指導と評価の一体化の研究を継続し，評価精度の向上に努める次第である。

２－６　課題研究とのリンクを図る教科指導

（１）１学年国語科の授業・週間課題における，批判的思考力・発言力を高める取り組み

１年生では国語総合の授業において，批判的思考力を養うことを目標に，「書くこと」の指導の中で小論文作成に取り組んだ。複数の情報源から多角的な視野をもってテーマについて考えるために，教科書教材に関連のある評論文や新聞記事を読み，自分の考えを６００字の小論文にまとめた。さらに，週間課題として複数の短い新聞記事を読み，内容をまとめたり，自分の意見をまとめたりする活動を行っている。週間課題の中で特に素晴らしい文章を授業の中で生徒にフィードバックして紹介することで，さらに多角的な視点を持つことができると期待している。

また，国語総合の授業では「話すこと・聞くこと」の指導の中で，地域社会研究のプレゼンテーションを念頭に置き，対話型スピーチの活動に取り組んだ。話すことはもちろん，相手の話を聞いて質問したり，よい点をほめたり，改善点をアドバイスしたりする活動を設けることで，自分のスピーチやプレゼンテーションの能力向上に役立てている。

（２）２学年「日本史Ｂ」における，様々な情報をまとめて他者に伝える力を高める活動

歴史上のテーマに対して小課題を設定し，それを複数の班で分担して調べさせ，最後は他者に向けて説明できるようにする活動に取り組んだ。各班は担当する小課題について協力して情報を集め，他の班に説明できるようにまとめる。次に，他の班に内容を聞きに行く役，説明する役を交代で行い，他の班の情報を持ち寄る。この時に，他の班からの聞き役に，どのようにすれば情報をわかりやすく伝えることができるかを重視する指導を行った。各班から得られた情報の共通理解を図る班内の活動でも，自分が他班から得た情報をどのように班員に伝えるかを大事にした。継続して取り組むことで，歴史事象に対する背景や因果関係を考察する力や，他者と協力しながら一つの課題に対して情報をまとめる力，そして，相手にわかりやすく調べたことを伝える力を養うことができた。

（３）２学年創造類型英語科における英語の論文作成能力を高める指導

英語での論文作成に必須である語彙力,文法力,論文の型に沿った英作文の力を高めるため下記の取組を行った。

①単語帳を利用した語彙力を測る試験を各期課し,語彙力を身につけさせた。

②文法力を測る小テストを毎週課し,文法力を身につけさせた。

③理由提示型,譲歩逆接型等の基本となる型を用いて年間で１０の英作文を書かせた。パフォーマンステストとリンクした指導ができたことで,生徒のライティングに対する意識を高められたと考える。

２－７　授業評価・学習実態調査による授業改善

授業を評価し，授業改善に結びつけるため，生徒全員に授業評価アンケートを実施している。アンケートは７月と１２月の年２回実施し，７月の結果をその後の授業にフィードバックするようにしている。アンケートの質問内容は以下の６項目である。ただし，体育と芸術は実技教科の特性から５項目としている。

体育，芸術以外

質問１　あなたは予習，復習，課題に意欲的に取り組んでいますか。
質問２　この授業を通して教科の力は向上しましたか。
質問３　先生は授業で，生徒の意欲や関心を引き出す工夫をしていましたか。
質問４　授業における先生の説明は分かりやすかったですか。
質問５　先生の板書や配布資料は授業に役に立ちましたか。
質問６　授業を受け，その科目への興味や関心がわきましたか。

体育，芸術

質問１　あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか。
質問２　この授業で，毎時間，何について学習したのかが分かりましたか。
質問３　授業における先生の説明の仕方はわかりやすかったですか。
質問４　この授業において先生は知識や技術の習得のための工夫をしていましたか。
質問５　授業を受け，その科目への興味や関心がわきましたか。

アンケートはマークシート形式であり，『１．はい　２．どちらかといえば，はい　３．どちらかといえば，いいえ　４．いいえ』の４段階で評価する。各段階に点数を与え，１を４点，２を３点，３を１点，４を０点とし，各質問項目の平均点を計算し，全教員に結果を配布している。結果は，個人の結果と教科の平均点の両方を重ねて示し，教科平均と比較し，どの質問項目が高いのか，あるいは低いのかを分析しやすくなるように工夫している。また，結果は６角形（体育，芸術は５角形）のレーダーチャート形式で表し，教員１人ひとりに個別に配布するように配慮している。

主要５教科の平均値の平成２７年度から令和元年度までの結果の推移を以下に示す。

		R1		H30		H29		H28		H27		R1.12-H27.7
		12 月	7 月	12 月	7 月	12 月	7 月	12 月	7 月	12 月	7 月	
5教科	予習復習	2.77	2.84	2.87	2.81	2.70	2.72	2.61	2.30	2.38	2.38	0.39
	授業への意欲									2.99	3.06	
	学力向上	3.06	3.05	3.08	3.02	3.07	3.11	2.98	2.80			
	教師工夫	3.15	3.17	3.20	3.14	3.20	3.23	3.12	3.08	2.91	3.03	0.12
	教師説明	3.20	3.23	3.27	3.24	3.23	3.29	3.19	3.06	2.92	3.01	0.19
	資料活用	3.34	3.37	3.36	3.33	3.30	3.40	3.28	3.20	3.07	3.20	0.14
	意欲喚起	2.90	2.92	2.96	2.90	3.00	3.00	2.88	2.65	2.72	2.80	0.10

表の右端の列は，令和元年度１２月の点数から平成２７年度７月の点数を引いた値である。このように，全ての項目で，点数が上昇しており，学校としての授業改善の効果が現れていることが分かる。（授業への意欲という質問項目は，教員の授業内容を計る質問としては適さないと判断し，平成２８年度からは，学力向上という質問項目に変更した。）

５教科の平均値で見ると，点数は上昇しているが，教科毎で見ると減少している教科もある。授業評価は形成的評価に繋がる貴重なデータである。この結果を分析し，これからの授業に生かせるよう，今後も検討を重ねていく予定である。

２－８　ＩＣＴ教育

（1）ＩＣＴ教育

今年度は，授業で使える iPad の整備を進めた。県から６台，気仙沼市ライオンズクラブから１２台，合計１８台を確保した。また，校内研修で利用する会議室のスクリーンも更新した。

（2）九条小学校プログラミング授業

日時：令和元年１０月２３日（水）気仙沼高校コンピュータ室

講師：本校情報処理部

目的：２０２０年度からプログラミングの教育がはじまる小学校に対して，プログラミング教育普及支援活動を行う。高校生が小学生にプログラミングを教えるというスキームを実践し，そこでの課題を明らかにしながらプログラミングに対する興味付けをおこなう。部活動でプログラミングを学んでいる本校情報部の生徒が，簡単なプログラミングの授業を九条小学校の５年生に対して行うことで小学生のプログラミングに対する興味付けを行うとともに，気仙沼高校情報部のアピールをする。

内容：プログラミングソフトスクラッチをつかい簡単なプログラミングを行う

１時間目　　スクラッチの基本的操作の説明

２時間目　　簡単なゲーム制作

２－９　先進校視察

（１）東京学芸大学附属中等教育学校

１　目　　的　　・ＳＧＨ指定５年目を迎え，その成果をふまえた授業研究会に参加し，特に，カリキュラムマネジメントを意識した授業づくりの実際を視察する。

２　訪 問 先　　東京学芸大学附属中等教育学校
所 在 地：　東京都練馬区東大泉５－２２－１
学校概要：　平成１９年創立，日本で国公立学校初の６年間一貫のＩＢ認定校，ＳＧＨ，ＳＳＨ，ユネスコスクール等の認定を受けている。

３　訪問日時　　令和元年１１月２２日（金）　12：30～17：20

４　訪 問 者　　菅原和幸教諭（数学），最上拓教諭（英語），我妻拓弥教諭（社会・教務）

５　視察内容

（１）生徒課題研究・ポスター発表（12：30～13：20）

校舎内の廊下を利用して，主に５年生（高校２年生）の発表中心。中学生も一部発表。英語のポスターもあったが，発表者に英語の発表をお願いしたら，日本語でしかできないとのことだった。「バイオマスプラスチックを植物デンプンからつくる」，「複数のドラム音を選択し，入力するだけで譜面をつくるソフトの開発」など。必ず実験とその結果が提示され，「今どこまで検証できて，次の課題は何か」を明確に発表している。

（２）公開授業（Ⅰ：13：20～14：10，Ⅱ：14：30～15：20）

＊我妻視察　　Ⅰ　現代社会「戦後日本経済史から見る発展の要因分析」
Ⅱ　ＤＰ歴史「コミュニケーションによる歴史的思考力の育成－第二次世界大戦の開戦原因について議論する－」

Ⅰは戦後の日本経済史の学習を終えた生徒に，「現在の日本経済を停滞させている要因は何か」，ランキング形式で考えさせ，班になって意見をまとめ発表する活動だった。教師が提示した高度経済成長期を可能にした６つ要因を，現代の日本経済に重ね合わせ考える。生徒たちは，日本の現状に関してニュース等で得た知識をもとに，それが６つの要因のどれに関連するかを考え，議論していた。移民の問題，働き方改革，為替等の今の状況を複合的に考えて，ランキングを作成した。発表では，どういうランキング結果だったかよりも，どんな視点で意見をまとめ，どういう工夫を凝らしてランキングをつくったかを重点的に発表するよう指示があった。生徒たちは，「まずは班員全員が発表して意見を集約した」「テーマを決めて重要性を判断した」「全ての要因がつながっているとみなして考えた」「いくつかの要素は関連するので２つを１つにまとめた」などを発表した。授業後のレポートは，「ランキングを検討するにあたり，不足している知識や不十分な認識は何か」をまとめさせるものであった。どんなことを知ることができれば，もっと質の高いランキングになったのかを考えさえて，次回以降の学習につなげるとのことだった。生徒が開いていた前回の授業のノート（板書事項）を見せてもらったが，１時間で実施したにしては相当の板書量，内容量であった。講義形式で学習するべき事項がしっかりまとめられているから，質の高い議論ができるのだなと確認できた。

Ⅱは，１２名だけの授業で，第二次世界大戦の主要国の立場になって，それぞれの意見をぶつけ合い，開戦の原因は何だったかを考察させる活動。見学者はおそらく５０名以上。生徒はコの字型の白い長机に座り，「フランスの立場」「ドイツの立場」「中国の立場」など，役割が定まっていた。教師は，ファシリテーター役に徹し，「こんな視点で考えたら，各国はどう動いたのか？」，「ではフランスの意見にドイツはどう反論する？」等のうながしを適時入れるだけであった。生徒は第二次世界大戦に関連する事項を年表形式で理解し，事前に自分の担当する国について，実際の動きをま

とめていると推察される。議論では，実際の各国の動きの背景を考え，「なぜそうしたのか」をはっきりと主張し，確認しあう形で進行した。全体の動きを踏まえて，その国の行動を一貫して説明しようとする姿勢が生徒から感じられた。印象では，大学４年生から大学院１年生程度の史学科のゼミの様子を見ているようだった。

※菅原視察　　Ⅰ　教科横断的な視点を取り入れた数学と理科の授業－運動－
　　Ⅱ　教科横断的な視点を取り入れた数学と理科の授業－微分積分－

Ⅰ，Ⅱとも，５年生（高等学校２年生）３０名対象の授業であった。参観者５０名ほどで，外国の先生方も多く，授業内容が同時通訳されていた。教科横断的な授業を模索していく中で，今回は物理基礎「運動の表し方」と数学Ⅱ「微分・積分の考え」を関連させた授業が展開された。

Ⅰは，物理基礎での運動学は４月に終えていたが，今回の公開授業研究のために，１時間限定での授業であった。本時の課題は，「校舎３階からおもりを落下させて，最初と最後が失われた途中の部分のみの記録テープをから，校舎の高さを調べる」であった。クリッカーという端末を用いて，集計結果から生徒同士で議論させたり，落下距離をどのように求めたかなどについても生徒同士で話し合わせていた。発表内容は既習事項がしっかり身についている印象だった。最後に「なぜ，グラフ下の面積が距離を表すのか？」という教師の問いに対し，一部の生徒が「区分球積の考え」に気づいていたのには感心した。実はすでに数学で区分球積法を学んでおり，学んだことがきちんとつながりを持たせられたと思った。

Ⅱの課題は，「車がブレーキをかけはじめてからの，時間と速度のグラフをもとに車の位置はどのように変化するかを，時間とⅠの関係をグラフに表してみる」であった。まずは自力で考えさせた上で，考えを発表させて，教師はそれを黒板に書くことで，共有させていた。また，机間指導しながらタブレットで撮影し，スクリーンを見ながら説明させたりしていた。

発表後に，教師「長方形の高さと右側や左側にとったり，長方形の横幅を１／２にとったりした人がいる。実際の時間－Ⅰグラフの関係はどうなっていくか？」の問いに対し，「右側にとったグラフと左側にとったグラフの間に実際のグラフが表れる」「長方形の幅を０に近づけていくと，２つのグラフが上下から迫ってきて実際のグラフの位置がより決まっていく」など区分球積法の考えがしっかり身についているようだった。

＊最上視察　　Ⅰ　教科横断的な視点を取り入れた授業－技術－
　　Ⅱ　教科の枠組みでの授業－英語 Core－

Ⅰは中学１年生 30 名，Ⅱは中学２年生２０名(帰国子女生徒は除く)対象の授業だった。参加者はどちらも２０名程度。

Ⅰ技術の時間ではラックの制作の際に「システム」の概念について生徒達に考えさせる機会を与えていた。システムとは何か，またシステムがあることでどういったことができるのか，もしなかったらどのようなことが起きるのかなど，中学生にはやや抽象的なテーマが与えられたように感じたが，多くの生徒が自分の意見を相手に伝えることをためらわず，積極的な議論になっていたのが印象的であった。個人の考え，理解度には差があったものの，相手の意見を尊重する姿勢や疑問に対して素直に質問しあって解決する場面もあり，普段からこのような取り組みがなされていると感じた。授業自体は生徒の議論と発表中心であったが，実技教科でも大いに思考を深めること，また他教科において発表する姿勢や聞く姿勢を養うことができることが分かった。

Ⅱ英語 Core の授業は帰国生を含まないクラスである。今回は「小説の読解」と「即興スピーチ」をテーマに行われた。Graded Reader 教材の Robinson Crusoe の小説終盤を時系列にまとめ，○○が～をし，その結果□□が～になった，など情報を一人一人が即興スピーチで伝えた。英語のレベルには個人差があったが，ミスを許容する雰囲気が醸成されており，発言しやすい環境を学校全体で作っていると感じた。進んで手を挙げる生徒が多く，積極性の高さにも感心させられた。授業後半では原書とディズニー映画を比較して，どのような差異が見られるかについても writing させた

後発表させていた。前半後半で４技能をバランス良く鍛えることができると感じ，学ぶものが多い授業だった。

（３）授業協議会

〇地歴公民科　（＊我妻参加）

「新旧科目間カリキュラム･マネジメントを意識した新指導要領への移行に対する実践検討･検証」

主に国際バカロレア教育の実施についての議論になったが，一部，授業時数の確保の問題等，どこの学校でも抱える悩みについて議論された。新科目「公共」では，大きく１３のテーマがあり，全て探究型の学習を行うことになっているが，どのテーマに力を入れ，どのテーマを１時間程度で実施するのか，の厳しい取捨選択を迫られることが予想されるので，よくよく教材研究を進めたいとのことだった。

〇物理基礎×数学Ⅱ　（＊菅原参加）

授業の質問というよりは，感想がほとんであった。この協議会の中に，２人の助言者の講演があった。イギリスのノッティンガム大学の数学の先生からは「ＩＣＴの活用は重要で，グラフを使って，変化の過程を可視化させられるため，理解を深められる」と話されていた。また，東京学芸大学の物理の先生は「生徒にとっては数学と物理学は完全に別の教科であって，そのつながりを理解することは，それぞれを学ぶのとは異なるレベルの学習を必要とする。数学の知識が物理にも使えるようになるためには，学習の転移が生じる必要があるが簡単には生じない」と話されていた。今後は，連携しやすいと思われる単元（例えば，三角関数と波動）はいくつもあるため，年間指導計画を見直し，連携をより密接していければといっていた。

〇外国語科　（＊最上参加）

前半は主に学校の説明であった。帰国子女生徒の内訳や４年生(高校１年生)からの英語コース選択や第二外国語選択についての説明が重点的に行われた。また進学実績についての説明も行われた。後半になって学校全体の英語での取り組みについて説明があり，英語以外の第二外国語にも力を入れているとのことだった。

６　まとめ

本校が取り組むべき次年度の課題として，「地域社会研究」，「課題研究Ⅰ」，「課題研究Ⅱ」で培った，探究的な活動を各教科の学習に取り入れていくことが挙げられる。また，複数の教科の知識を活用し，探究的な活動に取り組むために，カリキュラム・マネジメントの実践を追求することも大きな課題である。本視察では，授業実践を具体的に参観することができた。また，物理と数学，世界史と美術など，親和性の高い教科同士の共同授業もあれば，他の教科や探究活動で培われたコミュニケーション力や論理性を活用する単独教科の授業のあり方も学ぶことができた。校内で報告させていただくと，自発的に「国語と美術」の共同授業を実践する先生方も出てきて，よい刺激を受けたと感じる。

（２）埼玉県立浦和高等学校

１　日　時　　令和２年２月７日（金）13:00～15:00

２　訪問者　　鈴木圭　鈴木悠生

３　対応者　　教頭　大山貞雄／国際交流部主任　小河園子／総探検討委代表　塩原壮

４　学校概要　明治２８年開校の全日制普通科（９クラス）の男子校。定時制と併設。
教育理念は「尚文昌武」。
平成２６年からＳＧＨ指定。

５　授　業　　５０分×７コマ　ほぼ隔週で土曜日５０分×４コマ
行事を大切にする（年間１０回のスポーツ大会，５回のクイズ大会，５１Km の競歩大会など）一方で，きわめて質の高い授業の実践（質問への丁寧な対応，生徒の気づきを待つ姿勢など）。

６　特徴的な教育活動

（１）　多彩な学校行事

新入生歓迎マラソン大会（１０Km），臨海学校，競歩大会など，浦和高校生としての自覚と誇りを涵養する。「もっと授業時間の確保を」と行事を減らす学校も周囲にはあるが，行事を減らそうとする声はない。（生徒たちも入学時点で，行事の多さはわかって選んでいる。）

（２）　英国の姉妹校，豊富な海外経験プログラム

平成７年に英国のウィットギフト校と姉妹校提携。平成１３年度から長期交換留学制度が開始。（平成２０，２４，２６年にケンブリッジ大学，平成２９年にオックスフォード大学合格者を輩出。）このほかにもミシガン大学やスタンフォード大学のサマープログラムなど，独自の海外派遣プログラムが充実している。ＳＧＨの指定は平成３０年度で終了したが，同窓会奨学財団から潤沢な支援を受け，海外との交流は拡大の方向で進めている。

（３）　教科の枠を超えた学問探究

総合的な探究（学習）の時間に課題研究ゼミ（アドバイザリーグループ）を通じた主体的な探究活動を実施。２年次の生徒全員が約４０の講座に分かれ，各指導教官のもとで研究主題を定め，調査・研究を行い，最終的に論文を執筆する。「課題設定→調査・研究→まとめ」のサイクルをできるだけ多くしたいという考えから，年４回の課題設定を行っている。一周目は「通学途中で不思議に思ったこと」，二周目は「探究地図を作ろう」，三周目は「浦和高校内の問題」，四周目はもっと広い範囲で設定させる。（問いの立て方が課題，なかなか実のある課題意識を持てない。恵まれた生活を送っているからか。）

７　進路

（１）　平成３１年度（現役）

国公立：東京１９　一橋９　北海道８　東北２０（うち医３）　京都３　大阪３など１２３名
私　立：早稲田４０　慶応１９　上智１　東京理科３４　中央４　明治３５など１７２名
防衛大学校２　防衛医科大学校１

８　その他

（１）　ＳＧＨの指定がなくなってからの事業の「落とし込み」について

①　何が必要な事業なのかの精選

生徒の具体的な意見・声，変化を見て判断する。例えば，海外進学者や海外交流参加者の増加。

②　残した事業の担当をどう割り振るか

分掌・教科横断的な委員会組織で負担を分ける。お金のなさは県や国のスキルを使う。

（３）埼玉県立浦和第一女子高等学校

１　日　時　　令和２年２月８日（土）９：00～12：00

２　訪問者　　鈴木圭　鈴木悠生

３　対応者　　（教頭　沖田潤子・山盛敦子）※ＳＳＨ・ＳＧＨ合同研究成果発表会へ参加。

４　学校概要　明治３３年開校の全日制普通科（１・２年９クラス，３年１０クラス）の女子校。定時制も併設。目指す学校像は「世界で活躍できる知性と教養，逞しさを備え，社会に貢献する高い志を持った魅力あるリーダーを育成する女子高校」。

平成１６年からＳＳＨ指定（現在４期目）。平成２８年からＳＧＨ指定。

５　授　業　　５０分×６コマ（火・木のみ７コマ）　土曜日５０分×４コマ（年間１７回）

英語の「多読プログラム」や国語の「新書レポート」など，「一生の学びを支える特色ある取り組み」を実践。

６　特徴的な教育活動

（１）　ＳＳＨとしての取り組み

①　１年次はグループで水曜７限を中心に，２年次は個人で金曜７限を中心に研究活動。

②　「理化学研究所」「埼玉県産業技術総合センター」などを訪問。

③　「フォッサマグナ（糸魚川）」などへのフィールドワーク。

④　２月の研究発表会に向け，英語でのプレゼンテーション技術も学ぶ。

⑤　平成２９年度からＳＳＨ受講者だけでなく，全員が「ＳＳ科目」や「ＳＳ探究」に取り組む。

（２）　ＳＧＨとしての取り組み（①～④は生徒全員が対象。⑤⑥は希望者対象）

①　テーマは「未来のための『女性学』探究プロジェクト」

②　女性リーダーに学ぶ「モデル研究」（１年生）

③　グループごとの「テーマ探究」。台湾修学旅行の際の「フィールドワーク」（２年生）

④　教科横断型の「探究活動」（３年生）

⑤　「イギリス研修」「アメリカ研修」「ベトナムフィールドワーク」などの海外研修。

⑥　東京外語大の留学生を招き，各国の文化を学ぶ「クロスカルチュラルトーク」など。

（３）　進路支援・進学支援

①　ＯＧによるキャリアガイダンス

１年次は，大学見学会・分野別懇談会，２年次には受験体験講話，３年次には進路懇談会を開催し，講話やパネルディスカッション，懇談などの形で，多くの刺激を先輩方から受けている。

②　実力養成講座

平日の早朝（7:30～）・放課後（15:15～），長期休業中に実力養成講座を開講。

③　図書館の充実

図書予算は年間２０００万円。ＳＧＨの予算も用いて，英語の絵本や児童書などから，専門書をふんだんにそろえ，難易度別に分類して展示。

７　進路

（１）　平成３１年度（現役）

国公立：東京２　一橋１　北海道６　東北３　京都１　大阪１　筑波１４　お茶の水８など　１０９名

私　立：早稲田４２　慶応２３　上智２４　東京理科２１　立教１１１　明治９５　法政６０など４９２名

（うち，旧帝大＋一橋大１５　医学科５　獣医学科５　薬学科２）

英語教育

３－１　英語科の取組

・昨年度に引き続き，英語科教員の指導力向上および小中高の連携促進を目的に，東北学院大学と連携した研修会を実施した。講師として文学部教育学科教授である村野井仁氏を招き，市内の小中学校の先生方に参加いただきながら，本校英語科教員による研究授業ののちに『主体的な学びを促す領域統合型の英語指導―リスニング指導を中心に―』をテーマとした研修会を行った。村野井氏からは，自律的な英語学習者を育てるためのストラテジーや，主体的な学びを促すリスニング指導の具体的な進め方についてご指導いただき，参加者からは「高校の授業を実際に見て，小中でどのような授業が求められるか，改めて考えるきっかけになった」「中学校でも導入可能な指導内容で大変参考になった」といった感想が寄せられた。

・アウトプット能力の育成・伸長を図るため，各学年ともパフォーマンステストを年間３回以上実施した。１学年では英語による自己紹介に始まり，主張・理由根拠・支持・結論の構成を意識したエッセイライティング，イラストに基づくインタビューテストなどを実施した。２学年では，教員の質問に答えるインタビューテスト，イラスト内の人物描写，実際に起こりうるシチュエーションでの英会話，与えられたテーマに対する意見文の作成などを実施した。３学年では，与えられた英文の要約や，自分の好きなものについて紹介する Show and Tell などを実施した。

・キャリア・異文化理解・創造性の３つを軸に英語力強化を目指すプログラム『C-cube』を，本校英語科教員全員で分担しながら展開した。Career course では，各学年担当者が生徒の資格取得に向けて　外部試験対策指導を行った。Cross-cultural course では，気仙沼市在住の海外出身者を講師に招いての講座，ＡＬＴとの会話練習，スカイプを通じた外国人学生との交流などの機会を提供し，異文化交流・異文化理解を促進した。Creation course では，創造性の伸長と成果物の発表を目的に英語コンテストを開催し，１年生がクラス対抗暗唱コンテストに，２年生がテーマ選択型のプレゼンテーションコンテストにそれぞれ参加した。

３－２　英語コンテスト

（１）目的

本コンテストを，英語運用能力を実際に発揮する場として位置づけ，パフォーマンス評価などを導入して新たな視点から生徒の能力を測るとともに，英語の英語学習への意欲付けに活用する。また，実践的到達度を検証し，リスニングや単文英作文のトレーニングを授業に導入する。

（２）実践

１．発表者への指導

時期	指導内容	指導の場面
９月上旬	発表者募集	
９月中旬～１０月上旬	発表者への指導	放課後等
１０／３１（木）	英語コンテスト（当日）	全体

２．全体への指導

本コンテストを実施するにあたり，１学年・２学年それぞれにおいて英語運用能力の向上を目的とした活動を実施した。以下にその時期と指導内容をまとめる。

時期	１学年指導内容	２学年指導内容
４月　～ ６月中旬	【授業】文法，発音	【授業】英作文，発音 【PT】Show and Tell 活動
６月中旬　～ ９月中旬	【授業】英作文，発音 【小テスト】Retelling 活動	【授業】英作文，発音 【PT】Show and Tell 活動
９月中旬　～ コンテスト当日	【授業】英作文，発音， Retelling 活動 【PT】Show and Tell 活動	【授業】英作文，発音 【PT】Interview 活動

※PT…パフォーマンステスト

３．コンテスト当日

日時）令和元年１０月３１日（木）　６時間目・７時間目１３:５５～１５:３５

内容）①１年生クラス対抗暗唱コンテスト

②２年生英語プレゼンテーションコンテスト

演題）①教科書 CROWN English Communication I Lesson 2 “Going into Space” Section1

②テーマ選択型　※以下の２つのテーマから１つを選択

a）好きな音楽　b）好きな映画

参加者数）①暗唱部門　６名

②英語スピーチ部門　５名

審査員）気仙沼高校英語科教諭　２名

気仙沼高校ＡＬＴ　１名

４．運営

本校の英語学習推進組織である「C-cube」の Creation course に所属する生徒を中心に，コンテストの運営と実施への積極的な参加が見られた。また，審査員による審査の間，海外語学研修参加者が研修内容を報告するプレゼンテーションを実施した。

３－３　ＧＴＥＣの推進

（１）目的

国際標準基準の英語力指標であるＣＥＦＲに照らし合わせ，英語運用能力をレベル別に測定し，生徒の英語運用能力の現状とその伸長度を把握する。また，結果を分析し，生徒の英語運用能力の定点観測のための指標とすることで，英語科教員の授業改善へつなげるため。

（２）実施内容

①対　象　１～３学年全クラス

②実施日　１～３年生希望者…６月１５日（土）　１・２年生全員…１２月７日（土）

※H29分は3技能のスコアのみのため省略。

１学年

度数分布(4技能合計)

		R1		H30	
CEFR	スコア	単純	累計	単純	累計
B2	1190~	0	0	0	0
B1	960~	4	4	2	2
A2	690~	100	104	83	85
A1	270~	126	230	149	234
Pre-A1	0~	0	230	0	234

２年生(Basic)

		R1		H30	
CEFR	スコア	単純	累計	単純	累計
B2	1190~	0	0	0	0
B1	960~	0	0	1	1
A2	690~	118	118	93	94
A1	270~	95	213	147	241
Pre-A1	0~	0	213	0	241

２年生(Advanced)

		R1		H30	
CEFR	スコア	単純	累計	単純	累計
B2	1190~	0	0	0	0
B1	960~	3	3	3	3
A2	690~	12	15	32	35
A1	270~	0	15	0	0
Pre-A1	0~	0	15	0	0

度数分布(４技能　CEFR)

CEFR	Reading	Listening	Writing	Speaking
B2	0	0	0	0
B1	5	5	6	0
A2	69	43	103	195
A1	155	182	119	35
Pre-A1	1	0	2	0

CEFR	Reading	Listening	Writing	Speaking
B2	0	0	0	0
B1	2	2	1	0
A2	88	56	111	144
A1	123	153	100	31
Pre-A1	0	2	1	0

２年生(Advanced)

CEFR	Reading	Listening	Writing	Speaking
B2	0	0	0	1
B1	0	7	7	5
A2	15	8	8	9
A1	0	0	0	0
Pre-A1	0	0	0	0

（３）現状分析

上記の結果を見ると，１，２学年ともに Writing と Speaking の項目におけるＡ２以上の生徒が Reading と Listening の項目よりも圧倒的に多くなっている。その理由として，生徒達が授業を通じて Writing や Speaking に慣れ，抵抗感なく取り組む姿勢が身についているためと考えられる。

１学年では，コミュニケーション英語Ｉと英語表現Ｉの授業において通常の筆記試験に加えて，パフォーマンステストとして各期に Essay Writing や音読，スピーチなどに取り組ませている。また，授業の始めにペアワークとして英問英答を行ってきた。２学年でも，トピックを与えて話させるショートスピーチや，即興的に英語でのやりとりをするなどをコミュニケーション英語Ⅱの授業の始めに毎回行い，Speaking に力を入れてきた。１，２学年ともにその成果が出たのではないかと考える。

それに対して，Reading や Listening ではＡ１層に人数が集中した。英文の量が多かったことや問題形式に不慣れであることが要因であったと考えられる。

（４）今後の課題

今回のＧＴＥＣで生徒達の強みと弱みが把握できたため，強みをさらに伸ばし，弱みを補っていくことができるような授業計画を作成していきたい。アウトプット活動をそのまま継続していくと共に，Reading や Listening の中で問われる情報検索能力やキーワードを聞き取る能力の育

成が必要である。来年度から始まる新入試に向けて，Listening に力を入れていたがあまり成果が出ていなかった。その結果を受け，今までのやり方だけではなく，さらに効果的な Listening での指導を考えていく必要がある。そして，４技能バランス良く身につけ，ＧＴＥＣや大学入試で使うことができる英語力だけでなく，グローバル社会の中で様々な人とのコミュニケーションを取り，問題解決をできる生徒を育てていきたい。

３－４　英文図書の充実

（１）目的

生徒が主体的に英語に興味関心を持ち，グローバルな活動に必須な英語力や言語力を向上させ，英語論文の作成や海外留学者への支援，英語検定等利用促進の一取り組みとして英文図書の充実を図る。

（２）内容

・語学力向上のための英文図書・検定用参考書などを購入し利用を促した。
・海外留学者支援を目的に旅行の英語に関するコーナーを設け，英語を楽しんで学べる環境作りに取り組んだ。
・英語の授業で図書館の本を利用した映画に関する授業を行った。
・３学年創造類型の課題研究発表時の英語論文作成の際に関係英文図書が使用された。

（３）結果

・英語検定関係参考書や英会話・英語読み物等に加え，文法や英作文作成の本も利用が増えている。
・英文関係図書（言語の中でも）の貸し出しは増加している。

NDC別貸し出し状況推移	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	技術	産業	芸術	言語	文学	合計
平成２８年度	54	120	135	525	273	146	91	215	100	1775	3434
平成２９年度	70	197	197	675	391	150	128	231	555	2033	4627
平成３０年度	106	232	232	762	486	310	134	315	210	1612	4399
令和元年度	89	144	302	493	294	255	118	221	140	949	3005

取り組みやすい英文絵本や英語図鑑などの本を購入したことで，楽しみながら読めて，英語力を伸ばすきっかけ作りとして英文図書を利用した。個々のレベルに応じて英語読み物も長期休業中に課題として出され，多く利用された。

（４）今後の課題

生徒や教科の先生方からのニーズに応え英文図書を整備し，英語科と連携し有効に使用されるような計画を立てていきたい。

参考資料

英語購入図書一覧	2017年度以降購入分		
書籍名	著者		出版社
DKバイリンガルビジュアル辞典中国語・ポルトガル語・英語　全6冊	ﾊﾞｲﾘﾝｶﾞﾙﾋﾞｼﾞｭｱﾙｼﾞﾃﾝDKﾁｭｳｺﾞｸｺﾞ・ｴｲｺﾞ	2017	Dorling　Kinders
Maps　HRD　マップス新世界図絵	Mizielinska Aleksandra Mizielinski Daniel	2013	TemplarPublishi
TOEFL　Junior　STANDARD　テスト　公式問題集	グローバルコミュニケーション&テスティング　監修	2016	くもん出版
世界一わかりやすい中学英語の授業	関正生	2012	KADOKAWA
英語とは何か　インターナショナル新書	南條竹則　著	2018	集英社
GTEC完全攻略	アルク　企画開発部　編	2010	アルク
TOEFLテスト大戦略シリーズ　超基礎からのTOEFLテスト入門　TOEFLiBTテスト対応	アズコジャパン　岡田哲也　著	2014	旺文社
大学入試のためのTEAP実践問題集	旺文社　編	2015	旺文社
TOEFLテスト大戦略シリーズ2　TOEFLテスト英単語3800　4訂版	神部孝　著著	2014	旺文社
英検3級・準2級・2級　二次試験完全予想模試	クリストファ・バーナード監修	2018	成美堂出版
GTEC　CBT公式問題集	ベネッセコーポレーションGTEC　CBT編集部	2015	ベネッセコーポレーション
GTEC　CBT公式問題集　スピーキング編・ライティング編	ベネッセコーポレーションGTEC　CBT編集部	2016	ベネッセコーポレーション
TOEFLテスト大戦略シリーズ1　はじめてのTOEFLテスト完全対策	Paul Wadden 著 Robert Hilke 著 松谷偉弘 著	2014	旺文社
2017年度版英検準1級・1級・準2級・2級過去6回全問題集	旺文社	2017	旺文社
英検2級・準2級・3級予想問題ドリル	旺文社　編	2016	旺文社
世界一わかりやすい英語の発音の授業　カラー改訂版　CD付き	関正生	2018	KADOKAWA
カタカナ発音で「英語」は驚くほど通じる！知的生きかた文庫	高窪雅基	2017	三笠書房
プログレッシブ英語コロケーション辞典　小学館	塚本倫久　著　jon blundell 英文校閲	2012	小学館
中高6年分の英単語Roots	嶋図幸樹　茶	2016	Jリサーチ出版
核心のイメージがわかる！動詞キャラ図鑑	関正生　著　煙草谷大地　著	2018	新星出版社
核心のイメージがわかる！前置詞キャラ図鑑	関正生　著	2017	新星出版社
大学入試英作文ハイパートレーニング　自由英作文編	大矢復　著	2010	桐原書店
理系英語で使える強力動詞60	太田真智子　斎藤恭一　著	2015	朝倉書店
日英対訳　アメリカ医療ハンドブック	長田晶子 著 ニ宮光太 著 ｸﾞﾚｰｽﾞﾒﾃﾞｨｶﾙ・ﾏﾈｰｼﾞﾒﾝﾄ 監修	2015	IBCパブリッシング
やさしくはじめる高校英文法総復習BOOK	高校英語教育研究会	2017	受験研究社
難関大のための上級問題　特訓ライティング	佐藤仁志　著	2016	旺文社
書ける！理系英語　例文77	斎藤恭一　著　ベンソン華子　著	2015	朝倉書店
世界一わかりやすい英作文の授業	関正生	2008	KADOKAWA
エコノミストで学ぶビジネス英語	松井こずえ　著	2012	IBCパブリッシング
英語論文　すぐに使える表現集	佐藤寧　監修　小田麻里子　味園真紀	1999	ベレ出版
英会話なるほどフレーズ100	スティーブ・ソレイシィ　ロビン・ソレイシィ　共著	2000	アルク
英語のお手本　そのままマネしたい敬語集	マヤ・バーダマン 著 ジェームス・M・バーダマン 監修	2015	朝日新聞出版
もう困らないどんなときも英語で案内ができる本	リサ・ヴォート　著	2017	大和書房
英語回路育成計画　1日10分超音読レッスン　世界の名作編	鹿野晴夫　著　川島隆太　監修	2014	IBCパブリッシング
ちいさなミッフィーMIFFY　10冊セット	ディック・ブルーナ	2014	三善
絵で見てパッと言う英会話トレーニング　基礎編	Nobu　Yamada　著	2011	学研プラス
羅生門　Rashomon and Seventeen OtherStories　日本文学15冊セット	芥川龍之介　RYUNOSUKE　AKUTAGAWA	2009	PENGUIN BOOKS
グリム名作選　ラダーシリーズ	グリム兄弟	2012	IBCパブリッシング
八十日間世界一周　ラダーシリーズ　Around the World in Enghty Day	ジュール・ヴェルヌ	2008	IBCパブリッシング
絵で読む英語　ラダーシリーズ　First Steps in Reading English	I. A. リチャーズ；クリスティーヌ・ギブソン	2006	IBCパブリッシング
英語で読む芥川龍之介短編集　IBC対訳ライブラリー	芥川龍之介 著 ブレーズ・マイケル 訳 牛原眞弓 訳 出水田雅文 訳	2016	IBCパブリッシング
世界の重大事件　ラダーシリーズ　A History Western Tragedies and Accidents	ニナ・ウェグナー	2013	IBCパブリッシング
日本昔話1桃太郎ほか　ラダーシリーズ	カルラ・ヴァレンタイン	2009	IBCパブリッシング
不思議の国のアリス　ラダーシリーズ	ルイス・キャロル	2005	IBCパブリッシング
クリスマス・キャロル	チャールズ・ディケンズ	2006	IBCパブリッシング
シャーロックホームズ傑作短編集　改訂版　ラダーシリーズ	コナン・ドイル	2009	IBCパブリッシング
ローマの休日　ラダーシリーズ	イアン・マクレラン・ハンター	2011	IBCパブリッシング
心に響く英語のことわざ・名言100　ラダーシリーズ	レベッカ・ミルナー	2011	IBCパブリッシング
英語で読む宮沢賢治短編集　IBC対訳ライブラリー	宮沢賢治 著　ニーナウェグナー 訳 中野眞千 訳 出水田雅文 訳	2016	IBCパブリッシング
オペラ座の怪人　ラダーシリーズ	ガストン・ルルー	2015	IBCパブリッシング
Hip　Talk　LA	ジュン・セニサック　著	2016	DHC
英語の瞬発力をつける9マス英作文トレーニング　英語思考を育てる科学的口頭練習　サイエンスアイ新書	ﾀﾞｲ ﾌｧﾝﾃﾞｨｰﾙ #.9M.N.RSS.DMT.ﾉﾝﾀｲﾄﾙ ﾀｲﾄﾙ:ｴｲｺﾞ ISO.UIS.# ISF.SL.MF.9M9M9gSubS MSdSMSlm	2018	SBクリエイティブ
バンクーバー発！4コマ漫画で体感するから話せる英語フレーズ	米田貴之　著	2015	明日香出版社
バンクーバー発！4コマ漫画で体感するから身につくほんとに使えるリアルな英語フレーズ	米田貴之　著	2014	明日香出版社

国際理解

４－１　台湾研修

Ⅱ協働型学習プログラム　２　学校設定科目「課題研究Ⅰ」を参照

４－２　C-cube

（１）目的

Career Course, Cross-cultural Course, Creation Course の３コースに英語科教員を割り振りし，昼休み・放課後等の時間を活用し，英語に関する様々な活動に取り組み，英語４技能の育成を行っていくことを目的とする。

（２）内容

Career Course

主に英語検定合格を目指し，１次試験対策課外，２次試験対策面接指導を行う。

Cross-cultural Course

異文化理科講座（Cross-cultural Seminar，以下ＣＳ講座），英会話教室，Skype 交流に加えて海外の学校との壁新聞交換等の活動を行った。

Creation Course

英語コンテストの運営や海外研修参加。

（３）Cross-cultural Course での具体的な取り組み

①Cross-culture seminar

目的

外国のお客様から話を伺うことで異文化に興味を持ってもらい，生徒の価値観や視野を広げる。

内容

対象者：希望者約５０名
場　所：気仙沼高校
開催時間：放課後
開催日：①　６月２０日　アメリカについて　講師：ショーン　ヤンシーさん
②　７月１８日　アメリカ独立記念日について　講師：ダニエル　ロスさん
③１０月１６日　台湾について　講師：菅原　綉花さん
④１１月２７日　アメリカの大学について　講師：メリッサ　サカーさん
ミーナ　ヒューズさん
⑤１２月１２日　クリスマスについて　講師：ショーン　ヤンシーさん

アメリカの独立記念日のセミナー

アメリカの大学のセミナー

総括

今年度も５度のセミナーを開催した。初回は，アメリカで多くの人に親しまれているレモネード作りをグループで体験した。２回目のセミナーでは，アメリカの独立記念日にはどのようなイベントが行われるのかをゲームを通して学んでいった。３回目のセミナーでは台湾の言語や文化について学んだ。１２月に台湾に研修旅行に行く生徒からは積極的に質問が出された。４回目はアメリカのコロンビア大学，エール大学に通う大学生２人をお招きし，アメリカのスクールライフについて講演をしていただいた。講演後は本校生徒の家にホームステ

イをしていただき，相互に異文化理解ができる良い機会となった。最後のセミナーではクリスマスについて学び，クッキーのデコレーション等を実際に行った。

②英会話トレーニング

目的

２人のネイティブの先生とプライベートレッスンを行うことで，英語でコミュニケーションを図る実践的な力を身に付ける。

内容

対象者：希望者１１名

場　所：気仙沼高校

開催時間：水，木曜日昼休み（１２時２５分～５５分）

担当講師：ショーン　ヤンシー先生（ＡＬＴ），ダニエル　ロス先生（海外交流アドバイザー）

実施方法：１人１０分で３セットを２名の講師に行ってもらう。

	１２時２５分～	１２時３５分～	１２時４５分～
ショーン先生	Ａさん	Ｂさん	Ｃさん
ダニエル先生	Ｄさん	Ｅさん	Ｆさん

総括

事前にこちらから自己紹介，英検対策などのトピックを提示し，生徒は話す内容を考えてきた上でトレーニングに励んだ。コミュニケーションを積極的に英語でとれるようになりたいと考える生徒が多く参加をしてくれた。

③Skype による交流活動

目的

Skype（ビデオ通話）で米国のボランティア学生と英語でコミュニケーションを行うことで英会話能力を向上させると同時に，海外の文化を学び，本校生徒と海外の学生の絆を深める。

内容

対象者：希望者７名

場　所：気仙沼高校

開催時間：月～水曜日（８時～８時３０分）

実施方法：イェール大学やコロンビア大学等のボランティア学生と Skype を通して英会話練習を行う。

総括

個人，ペア，グループ等それぞれが選んだ形で Skype に取り組めるため，ほとんどの生徒が積極的に活動を行っている様子が伺えた。またこれを機に，SNS 上でも交流する生徒もおり，海外交流の架け橋として機能させることができた。アメリカ側の学生には交流会や Cross-culture seminar のために本校を訪れてくれた学生もおり，Skype の相手と実際に会える機会があったことは生徒にとって大きな刺激となった。

④　Speaking English Laboratory in Keko

目的

海外研修等の渡航時に必要で実践的な英語をネイティブスピーカーである海外交流アドバイザーから直接的に学ぶとともに，学年を越えて同じ空間で英語学習をすることで，学校全体として協働的にグローバルリテラシーを涵養する。

内容

対象者：希望者３３名（２学年創造類型１８名　１学年１５名）

場　所：気仙沼高校

講　師：ダニエル＝ロス（本校海外交流アドバイザー）

開　催：下表参照（全日程とも１６時１０分～１７：１０）

日時	項目	内容
9/26(木)	第１回講座	Survival English workshop(Airport, hotel, taxi, transportation, shopping) Impromptu speaking practice
10/10(木)	第２回講座	LECTURE&ACTIVITY: Speech writing workshop
10/24(木)	第３回講座	ACTIVITY: Cross-cultural Awareness workshop HW Make Questions about Kesennuma
11/ 7(木)	第４回講座	ROLE PLAY: Students practice asking each other about Kesennuma and answering, IMPROMPTU HW Make Questions about Taiwan
11/28(木)	第５回講座	ROLE PLAY: Students practice asking each other about Taiwan & answer IMPROMPTU
12/19(木)	第６回講座	PRESENTATION ABOUT TAIWAN

Survival English workshop

Presentation about Taiwan

総括

ＡＬＴの経験がある本校海外交流アドバイザーを起用しての初めての事業だったが，生徒たちは和気あいあいとした雰囲気の中で，ペアワークやグループワークに精力的に取り組み英語学習をすることができた。また，プログラム自体が本校の台湾研修を意識した構成となっており，２学年参加生徒としては台湾研修のための事前の実践練習の場，１学年参加生徒としては英語学習を通じて台湾研修について深く知る場，という明確な位置づけのもと，各参加生徒が高いモチベーションを維持したまま終始活動することができ，今後の英語学習に向けて有意義な事業となった。

４－３　コカ・コーラ英語コミュニケーションスキル研修プログラム　ＯＪＴプログラム

期　間：２０１９年４月３日（水）

場　所：本校北３階講義室

講　師：外国人ファシリテーター４名

対　象：２年生１７名，３年生名１７名

内　容：昨年度から引き続き実施の，今後益々広がる国際社会で活躍すると共に地域社会へ貢献する人材を育成することを目的におこなう，「コカ・コーラ英語コミュニケーションスキル研修プログラム」の最終プログラムである。詳細は次表参照。

時刻	内容
12:30～13:15	ランチ
13:15～14:00	英語アクティビティ
14:00～14:45	グループワークおよびプレゼン準備
14:45～15:30	グループ内プレゼンテーション
15:30～15:45	代表者プレゼンテーション（グループより代表者）
15:45～16:05	セレモニー・修了証贈呈・写真撮影・アンケート

総括：外国人ファシリテーターと留学生による２日間の体験型プログラムのほかに，自らの課題を克服できるよう継続的に英語の課題に取り組む全６回の自己学習プログラムをおこなった上での今回のＯＪＴプログラムであった。当日の午前中に唐桑半島ビジターセンターでの実地研修を予定していたが中止となり，生徒たちはがっかりしていたが，英語によるプレゼンテーション活動を中心としたワークショップは大好評だった。外国人留学生の方々が非常にフレンドリーに，そして近い距離感で英語の指導をしてくださり，生徒たちは今後も英語を使って外国の方とコミュニケーションを図っていきたいという強い思いを持つことができた。

志教育

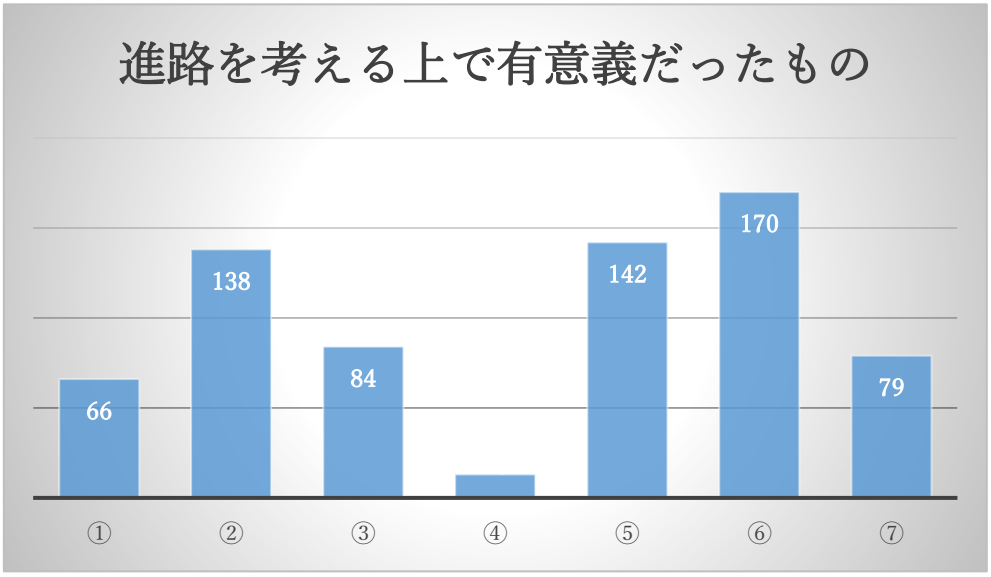
５－１　１学年「総合的な探究の時間」

（１）目的
・自己を客観的に分析し理解する
・社会の仕組みや生き方の選択肢について理解する
・「社会の一員としてどう生きるか」について探究する
（２）対象学年　１学年
（３）概要
教科横断的に知識を活用し，集団や社会における自己の果たすべき役割を考え，さらに世界規模での価値の高い生き方や社会性，自己を活かす生き方などを探究する進路学習を行う。震災・防災学習，地方創生につながる学習と共に実施することにより，地域への愛着や社会性を高めるだけでなく，世界的視点をもって豊かな未来を希求する人材育成につなげる。
（４）具体の内容

日程	活動	内容
４月・６月	適性診断と自己理解	自らを客観的に分析し理解する
５月	定期考査・全国模試について	高校における定期考査の意味と評定について知る 全国模試の意義と活用方法について知る
６月	職業研究	類型選択等に生かす大学や職業に関する基礎知識を得る
６月	類型選択ガイダンス	選択のための確かな知識をもとに，自らの生き方をイメージする
８月	学問研究	類型選択等に生かす大学や職業に関する基礎知識を得る
９月	進路講話	高校における学習の意義とその方法について知る
９月・10月	キャリアセミナー	先人に学び，生き方の選択肢を増やす（『生き方学講座』）
１月・３月	合格体験記	将来への見通しから，３年間の日常生活を設計する
１月・２月	１０年後の私	将来の生き方を構想する
２月	総探１年の振り返り	自分の良い点を再発見し，次年度の目標を立てる

（５）結果と考察
Ｑ１．自分の進路を考える上で有意義だったものを３つ選んでください。
①　５月：定期考査・全国模試とは
②　６月：Ｒ―ＣＡＰの結果を用いた自己理解＆職業研究
③　６月：類型選択ガイダンス
④　８月：学問研究（マトリックスを用いた学問比較）
⑤　９月：キャリアセミナー（社会人講座）
⑥　１月：先輩の合格体験談を聞く会
⑦　２月：「１０年後の自分」作成・発表

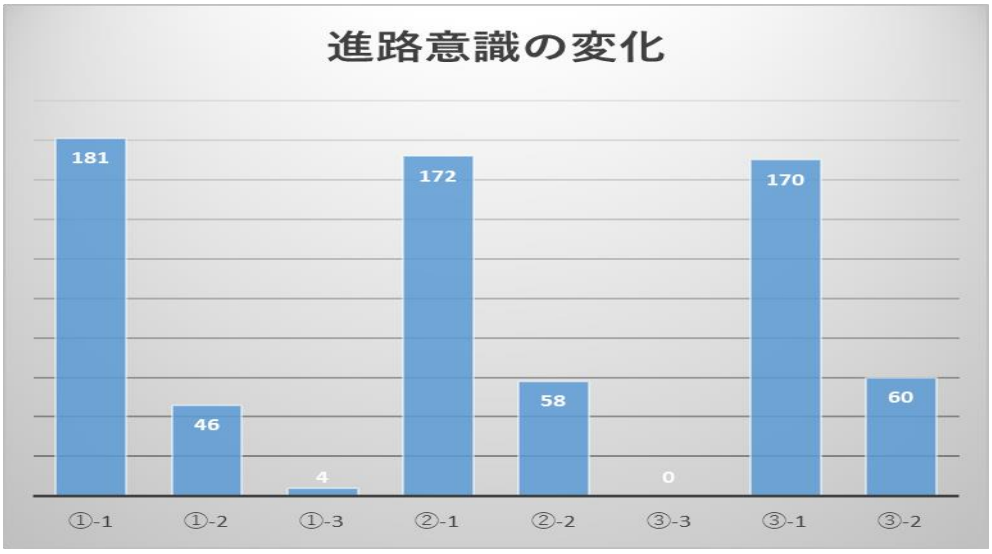
番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	合計
選択した人数	６６	１３８	８４	１３	１４２	１７０	７９	６９２



Ｑ２．入学当初に比べ，自分の進路意識はどう変化しましたか。当てはまるものを〇で囲んでください。
また，きっかけとなったものがあれば記入してください。

① 自己理解（　高まった　・　変わらない　・　低くなった　）
② 社会理解（　高まった　・　変わらない　・　低くなった　）
③ 自己と社会との関わり（　考えが深まった　・　変わらない　）

番号	①-１	①-２	①-３	②-１	②-２	②-３	③-１	③-２	合計
選択した人数	１８１	４６	４	１７２	５８	０	１７０	６０	６９１



（６）総括

１年間の振り返りとして実施したアンケートの結果から，「自己理解」「社会理解」「自己と社会との関わり」の３項目について，それぞれ１７０名（約７割）以上の生徒が「高まった」または「深まった」と感じていることがわかった。しかし，残りの約３割の生徒のほとんどが「変わらない」と感じていることから，内容を一部見直し改善する必要がある。生徒からの要望として特に進路情報の調査や提供を望む声が多く，「探究」活動が不十分だったことが課題として浮き彫りになったため，次年度に向けてこの点の修正とよりよい授業への検討を重ねていきたい。

５－２　２学年「総合的な学習の時間」

（１）目的　『志望進路を思い描く』
（２）対象学年　２学年
（３）内容
『志望進路を思い描く』ことを目標に実施した。まず志を具体化するため,「オープンキャンパス」や「夢ナビ」などに参加した。また「課題研究」において，自らの興味関心に沿ってテーマを設定し，研究活動を行った。さらに「修学旅行のまとめ」において，自らの体験を踏まえ情報を効果的に伝えられるポスターの制作を行った。それらの学習活動の成果として「志望理由書作成」に取り組んだ。

平成31年度　総合的な学習の時間（第2学年）

期	月	日	曜	実施計画内容 時間	6校時（課題研究）	7校時	内容の詳細（ねらい）	行事
1期	4	16	火	1		総学ガイダンス・課題研究ガイダンス	１年間の流れを確認する。課題研究のねらい（学問分野別）について説明【学年】	
		23	火	1		大学研究	進路選択の手助けにするとともに課題研究の分野選択ミスマッチを防ぐ【各クラス】	
	5	14	火	1		課題研究①研究分野調査アンケート	グループ分けのための研究分野調査アンケートの実施【各クラス】	
		20	火	1		課題研究③テーマ設定	グループ別活動【各グループ】【各分野】	
		21	火	1		課題研究③テーマ設定	グループ別活動【各グループ】【各分野】	
		28	火	1		課題研究④テーマ設定完成	グループ別活動【各グループ】【各分野】	１期考査
	6	25	火	1		教育実習生に聞く	教育実習生に学部学科について話してもらう【学年】	全員模試
	7	2	火	1		科目選択ガイダンス	科目選択について各教科から説明（教務部と連携）【学年】	
		9	火	1		学問について（進路講演会）	外部講師に学問について講演をしてもらう【学年】	
		16	火	1		オープンキャンパス事前指導	オープンキャンパス参加の意義と注意事項（ワークシート）【各クラス】	
夏季休業中					オープンキャンパスに参加		※　東北大（7/30）・岩大（8/7）は学校で。その他各自。公務員は別レポート。	夏期課外
2期	8	27	火	1		課題研究⑤	グループ別活動【各分野】	
	9	3	火	1		課題研究⑥	グループ別活動【各分野】	
		10	火	1		課題研究⑦	グループ別活動（発表準備）【各分野】	
		17	火	1		課題研究⑧	グループ別活動（発表準備）【各分野】	２期考査
	10	5	土	4	夢ナビライブ		夢ナビライブに参加し、学問についての見識を広げる。【学年】	
		8	火	1		課題研究⑨	グループ別活動（発表準備）【各分野】	
		15	火	3	課題研究分野別発表会（3h）		分野別に発表会。お互いに評価。最後に代表を決定する。【各分野】	
		23	水	2		小論文講演会		
		29	火	1		10/15へ		
	11	5	火	1		10/15へ	グループ別活動（まとめor発表準備）【各分野】	全員模試
		10	土	4		課題研究発表会	各分野の代表による発表。その後、まとめ、自己評価。【学年】	
		12	火	1		10/23へ		
		19	火	1		修学旅行事前指導	修学旅行のまとめを12/15に行うことを視野に入れて研修することを伝える【各クラス】	
	12	10	火	1		10/23へ		
		14	土	4		修学旅行のまとめ・クラス内発表	修学旅行のまとめ（３ｈ）発表（１ｈ）【各クラス】	
		17	火	1		「3年0学期戦略」について	『3年0学期戦略』の詳細を説明。受験生への切換えを意識。【各クラス】	
冬季休業中							※　学習合宿への参加、冬期休業中の自学意識を高める	冬期課外
3期	1	7	火	1		学びの中間報告書①	志望理由書の書き方（ワークシート）【各クラス】	
		14	火	1		学びの中間報告書②	ワークシートのアドバイスをもとに自分の将来像を明確化にする。【各クラス】	全員模試
		21	火	1		学びの中間報告書③	ワークシートのアドバイスをもとに自分の実績を明確化する。【各クラス】	
		25	土	4	学年発表会見学＋学びの報告書④⑤⑥		創造類型学年発表見学（１ｈ）志望理由書を書く（３ｈ）	
		28	火	1		先輩の合格体験談を聞く（5校時目）	推薦合格、公務員等就職内定した先輩からアドバイスをもらう。【進路別】	
	2	4	火	1		学びの中間報告書⑦	志望理由書の添削をふまえ、最度書き直す。【各クラス】	
		18	火	1		学びの中間報告書⑧	これからのこと（ワークシート）何をしなくてはならないのか？【各クラス】	４期考査
	3	14	土	4		総合学習発表会		
		19	木	1		先輩の合格体験談を聞く（4校時目）	大学を一般受験し、合格した先輩からアドバイスをもらう。【進路別】	

（４）主な取り組み内容と成果
①『課題研究』
１年次「地域社会研究」にて生徒たちは研究の仕方や論文の書き方を学んだ。今年度は卒業後の進路を見据え，１年次より自由度を拡大し，生徒個々の興味関心に応じた研究を行わせた。課題研究活動を通して，大学での学びや将来のビジョンを明確化するきっかけをつかむことを目的とした。
グループ研究だけでなく個人研究も可とした。希望研究分野アンケートにて分野ごとにグループを作り，グループごとに検討を重ねた上で５月中にテーマを設定させ，研究計画書を記入させた。テーマが漠然としたり研究意義が明らかでなかったりしないよう,評価基準を明確化し担当教員で指導を行った。
その後夏季休業中にはオープンキャンパスに参加するように指示し，学問や研究の場を体験する機会を持てるようにした。
夏季休業後はグループごとに研究を推し進めた。今年度は図書館を活用する時間を増やし，信用できる書誌から情報を収集する大切さ,その方法を学べるようにした。１０月１５日(火)の分野別発表において生徒同士の投票にて分野代表を決定した。分野の代表に選出された班は更に研究を進め，１１月９日（土）の課題研究発表会で全体に発表した。全体のまとめとしては，班ごとに論文を作成し，振り返りシートの記入をもって終了とした。

前年度の「地域社会研究」に比して授業時数が少ない中であったが，どの班も期限までに一定水準を超える発表資料，論文を作成することができた。また，プレゼンテーションの場面でも，原稿を読まず聴衆に目を向けて堂々と発表する態度が見られた。研究についての振り返りシートを記入させた結果，多くの生徒が，研究の進め方，研究発表の手法などについて自らの成長を実感しており，卒業後のプレゼンテーションやレポート作成に直接的につながる成果が得られたといえる。

代表発表班タイトル

分野	テーマ
法律	高齢者の起こす交通事故に対応する法律は必要か
政治	なぜ日本人は政治に参加しないのか
経済	貧困の現状を改善するためには何をするべきか
経営	マスメディアの変化に伴い広告方法は変化させるべきなのか
教育	どうしたら保育士の見合わない待遇を改善することができるのか
農業	日本の花粉を出すスギを多く伐採するにはどうしたら良いのか
医療	医療ドラマは人々の医療への理解を深めることにつながっているのか
教育	世界の幼児教育無償化から日本に生かせるものとは
理学	アトピー性皮膚炎の子どもの生活を快適にする商品とはどのようなものか

②『修学旅行のまとめ』

「自己の経験を踏まえた情報の取捨選択能力」，「効果的にレイアウトする力」の向上を目的として実施した。修学旅行前の指導において，実際のガイドマップを読み比べながら，ターゲットとする層，紙面のテーマ，効果的なレイアウト案の検討を行った。旅行後，それらの情報を事前の方針に従い体裁良くまとめた。作成したポスターには，イラストや文字のフォント，デザインなどの工夫が見られ，自分たちのプランの魅力を伝えることができた。

③『志望理由書』

年間の総合的な学習の時間での実践を踏まえ，志望理由書を作成した。具体的には，志望理由書に必要な要素についての確認，過去の先輩の志望理由書の検討，「先輩の合格体験談を聞く」で志望理由書の重要性の理解を経て，「志望先がとりたいと思える志望理由書」の作成を目指した。６時間を配当したうえで，担任副担任で分担し，一人一人個人添削を行い，内容を深められるようにした。

生徒の作成した志望理由書には，これまでの課題研究やオープンキャンパスなどの学びが反映されたものが多く，志の深化が見られたと言える。高校生活の今後の学びと進路探究の重要性を意識するきっかけになったといえる。

５－３　３学年「総合的な学習の時間」

（１）テーマ　『強い志を持って前進する』
（２）対象学年　３学年
（３）内容
　Ｋプロジェクトの３年目。１年目において自己理解，社会理解，その共通部分である「志」を意識し，社会の一員としてどう生きるかを考えてきた。２年目は志望進路について主体的に考えていくことを目標に据えた取り組みを行った。具体的には，ミニ課題研究やオープンキャンパス，夢ナビへの参加，志望理由書の作成などを行った。２年生の最後には「学びの中間報告」を行い，これまでの成果と課題を明確にした。完成年度の３年目は「強い志を持って前進する」というテーマで，２年生で思い描いた将来像をより明確にし，他者に伝える表現力を身につけ，強い志をもって前進していくことを目指した。

期	月	日	曜	実施計画内容 時間	7校時	内容の詳細（ねらい）
1期	4	11	木	1	総学ガイダンス・学びの報告書	１年間の総学の流れとこれまでの学びの振り返り【クラス】
		18	木	1	学びの設計書①(小論文)	小論文の基礎・基本について確認する【全体】
		25	木	1	学びの設計書②(小論文)	志望分野の話題、重要なテーマについて図書館で調べる【クラス】
	5	16	木	2	進路ガイダンス(2h)	進路別のガイダンスを行い、自分の進路希望を確かめる【全体】
		17	金	1	学びの設計書③(小論文)	志望分野のテーマ例に則して実際に書いてみる【クラス】
		20	月	2	小論文講演会(2h)	小論文の書き方を外部講師（学研）の講話から学ぶ【全体】
		30	木	1	学びの設計書④(小論文)	講演会と添削をふまえ、小論文を推敲する。【クラス】
	6	6	木	1	切り替え集会	県総体終了後の進路意識の切り替えを行う【全体】
		20	木	2	小論文講演会(2h)	志望理由書の書き方を外部講師（ベネッセ）の講話から学ぶ【全体】
		27	木	1	学びの設計書⑤(志望理由書)	『進路ガイダンス』・『講演会』を受け，自分の志望について改めて考え，前年度作成した志望理由書をブラッシュアップする【クラス】
	7	11	木	1	学びの設計書⑥(志望理由書)	
		12	金	1	学びの設計書⑦(志望理由書)	
2期	8	22	木	1	民間就職・公務員激励会	9月から始まる民間就職試験、公務員試験受験者を学年全体で激励し送り出す【全体】
	9	5	木	1	学びの設計書⑧(面接)	志望理由書作成を通して高めた志を面接練習を通して強固なものとする【クラス】
		12	木	1	学びの設計書⑨(面接)	
	10	2	木	1	学びの設計書⑩(面接)	志望理由書作成を通して高めた志を面接練習を通して強固なものとする【クラス】
		11	金	1	学びの設計書⑪(面接)	
		17	木	1	学びの設計書⑨(具体の設計)	自己の志を再確認し，到達点までの学びを逆算設計する【クラス】
		24	木	1	近未来シミュレーション①	一人暮らしシミュレーション【クラス】
		31	木	1	近未来シミュレーション②＋まとめ	トラブルシミュレーション【クラス】＋これまでのまとめ
	11	7	木	1	進路探究①	ポモドーロテクニックを学ぶ【クラス】
		14	木	1	進路探究②	職業理解を深める【クラス】
		21	木	1	進路探究③	コミュニケーションスキルを磨く。【クラス】
		28	木	2	進路講演会	講師の方のお話を聴き，社会で夢を実現するために必要なことについて考える。【全体】
	12	19	木	2	進路講演会	講師の方のお話を聴き，社会で夢を実現するために必要なことについて考える。【全体】
3期	1	9	木	1	進路探究④	仕事選びのポイントについて理解する。【クラス】
		14	火	1	一般受験者激励会	センター試験等の一般受験者を学年全体で激励し送り出す。【全体】
		24	金	1	進路探究⑤	社会人として必要なチーム力について理解する。【クラス】

（４）主な取り組み内容と成果
1.　『学びの設計書』
『学びの設計書』と題し，将来像をさらに深めつつ，思い描いた将来像を的確に表現し伝えられるようになることを目的とした。そのための主な取り組みとして，「小論文の作成」，「志望理由書の完成」，「面接の練習」を行った。

1.1『小論文の作成』
目的
　社会の現状をふまえ，自分の考えを的確に書くことで伝えられることを目的とした。

内容

① 小論文の書き方，構成など基本的な事項についての確認 … 資料Ⅰ
② 小論文の話題，テーマについての図書館資料での調査
③ 外部講師による小論文についての講演
④ 小論文の作成・添削をふまえた推敲

成果

資料Ⅰに示したように小論文の構成をあらかじめ指示したうえで，それぞれの選んだテーマに従って小論文を作成するように計画した。また，文章を通して的確に自分の考えを他者に伝えるために，原稿用紙の使い方など基本的な文章の書き方をあらかじめ指導した。小論文の実際の作成段階においては，担当教員２名によって添削を行い，複数の目で客観的にアドバイスを行うことができ，完成した小論文を見ると，概ね生徒のもつ社会への見方，ものごとの考え方に深まりが見られた。

小論文講演会の様子

資料Ⅰ「小論文構成の各パーツと展開」

第一段落＝自分の意見の提示
・問われていることに対して、**真正面からはっきり答える。**
△どちらでもありえる。△わからない

第二段落＝自分の意見の根拠
・自分の意見を支える論拠を挙げる。**社会の現状や課題、具体的な体験**を盛り込みながら**書く。**
・根拠だとわかる表現をしっかり入れる。
（例）なぜなら～からだ
例えば、具体的には

第三、四段落＝反論の想定とそれへの回答
・自分の意見と反対の立場からの**反論を想定し、挙げる。**これによって、**教養の深さ、柔軟な思考力をアピール**することができる。
↓
・**挙げた反論に対して回答し**、自分の意見の正当性を示す。
◎**「たしかに～しかし」**の譲歩逆接の接続表現を使う。

第五段落＝まとめ
・第一段落の考えを表現を変えながら、**繰り返し**説明する。
・「したがって」などの順接の表現を入れる。

1.2『志望理由書』

目的

昨年度作成した志望理由書を受験年度バージョンにブラッシュアップし，より明確に自分の将来像を書き，伝えられるようにする。

内容

① 志望理由書の意義の再確認 … 資料Ⅱ
② 昨年度作成の志望理由書を自己分析・他己分析
③ 外部講師による志望理由書についての講演
④ 志望理由書作成・添削をふまえた推敲

成果

資料Ⅱに示したように，明確に自分の将来像を伝えるためのポイントを具体的に挙げながら指導を行った。小論文同様に担当教員２名により志望理由書の添削を行ったが，どのようなポイントに注目し指導すればよいのかの目線合わせを行うことができた。昨年度は「看護師になりたい」等の，なぜその大学のその看護学科にいくのかが不明瞭なものがあった。それに対して，今年度作成した志望理由書は概ね，そのような曖昧な点についてさらに吟味されており，より明確な志望理由書が作成できているように感じた。

資料Ⅱ「志望理由書のダメな例とその理由」

①私は将来看護師になり，患者さんを笑顔にしたいと考えています。
②きっかけは祖母の入院です。私が幼い頃お見舞いに行った際，看護師さんが丁寧に祖母に接してくれていました。その時私はそのような看護師になりたいと考えました。看護師には高いコミュニケーション能力が必要です。私も普段からあいさつをしたり，いつでも笑顔を絶やさないようにしたりしてきました。
③貴学のオープンキャンパスに参加させていただいたとき，私は学生や教員の皆さんに優しく接していただき，この学校ならきっと自分も成長できると感じました。また，貴学の授業は実習を多く取り入れており，そのような経験の中で即戦力として現場で働くことができると感じました。
　以上の理由から，私は貴学を志望します。

①**「笑顔にしたい」と言われても，相手のニーズは様々。**子供なのか高齢者なのか，女性なのか男性なのか，どんな困難を抱えているのかは違うという想像力が足りない。**その学問分野について調べていれば，もっと具体的にどんな課題があって，特にどんなことを学び，どんな知識と技能を身につけたいのか書けるはずである。**耳障りの良い言葉で逃げてはいけない。

②「丁寧に」とは具体的にどんなことだろう。読者にはどんな接し方なのかわからない。また，「コミュニケーション能力」，「あいさつ」は看護師に必要なものではなく，社会人として必要な能力である。**看護師として特に必要な能力は何か**を説明できていない。もっとその仕事について調べてみよう。

③高倍率のＡＯ入試において**みんなの言いそうなこと＝オープンキャンパスで体験したことやパンフレットに書かれていること**。それだけをもとに述べたとしても，面接官の印象に残らない。自分の**学びの計画**を明確かつ具体的に書くべき。

1.3「面接練習」

目的

　志望理由書をふまえ，話すことで自分の将来像や高校での取り組みを的確に伝えるようになる。

内容

①　面接での礼儀，話し方など基本的な事項についての確認
②　面接での回答内容の文章作成
③　面接での回答内容のペア・グループでの検討
④　面接の練習と自己分析・他己分析

面接の回答を答える代表生徒たち

成果

　面接での回答内容について，自分がどのようなことをアピールしたいのかという視点だけでなく，相手がどのようなことを求めているのかという視点も大切であることを伝えた。そのような複数の視点から回答内容を考え，ペアやグループで発表し検討する機会を多く設定した。その成果として，生徒の感想として「相手に応じて伝え方を工夫することの大切さを学ぶことができた。」また，「ペアやグループで回答内容を吟味したり，実際に面接官役を交互に行ったりすることで伝え方や伝える内容について深めることができた。」などが挙げられた。

（５）最後に

　最後に，今年度の総合的な学習の時間を振り返って担当者の「気づき」を簡潔に挙げる。まず，志望理由書の作成を２年生から３年生にかけて２度行うことで，自分の将来像を早い時期から考え深めると

いうプロセスを経ることができた。そのことで，例えば漠然と「歴史学を学びたい。」ではなく，「古代ローマの勉強をしたいから専門家のいる○○大学に進学したい。」などの明確で強い志を持つ生徒も出てきた。また，複数の教員で小論文，志望理由書等の添削を行ったことで多角的な視点から助言を行いつつ，あらかじめ指導案等で指導事項の統一化を図った。そのような協力の下で，一貫性と客観性のある指導を行うことができたと感じている。

５－４　３年間を見通した進路指導

（１）課題研究の成果を生かしたＡＯ・推薦入試の利用

１年次の「地域社会研究」では，地域の海について５つの分野（産業・人間・文化・自然・防災）を設定し，生徒自ら地域の多様な課題を理解し，科学的探求の手法を身に付け，批判的・科学的思考力やプレゼンテーション能力を養ってきた。その上で２年次ではグループや個人による「課題研究」に取り組み，自らの興味関心に応じた研究活動を行ってきた。特に「課題研究」では，自ら進もうと考えている進路に近いものを研究する生徒もいれば,「地域社会研究」を通してより問題意識を持った事柄に着目し，それらについて深めていこうとする生徒もいた。その中で我々が最も重視しなければならないことが,「課題に対してどのように取り組んだのか」という過程についてである。もちろん，将来的に学びを深めていきたいと考える課題を２年次から始めることができれば，より具体的な目標や何を学ばなければならないのかについて知ることができ，自らの進路達成に近づくことは間違いない。しかし，どんな課題であれ，問題意識を持ち，課題の設定と解決に向けた案の提示に必要な知識や技能を身に付け，情報を収集・整理し，自らの仮説について検証していく過程が大切であり，生徒個人がそこで何を学び，何を得たのか実感することが重要である。今年度，ＡＯ・推薦入試に挑戦し合格を勝ち得た多くの生徒は，自身の研究内容を前面に出してアピールできた生徒はもちろん，設定した課題に対してどのように向き合い，どんな手順で解決に導こうとしたのかなど，自身の言葉で表現でき，この課題研究での学びに意義や価値を見いだすことができた生徒が多かったように思う。もちろん，それらの生徒は進路達成のための手段としてのみ課題研究を行ったのではなく，純粋な探究心を持ち合わせていたことにも言及しておきたい。主体的に取り組もうとすることで，自身の課題に対する興味関心が高まり,「どうすればいいのか」をしっかりと考えることができるようになった。今後は，多くの生徒が課題研究の成果を感じ，それらも含めた進路選択ができるようサポートしていく。

（２）協働的なグループ研究のあり方について

創造類型の「課題研究」と同様に，人文・理数類型においても総合的な学習の時間の中で「ミニ課題研究」が行われている。こちらについては，個人研究よりもグループ研究が多数を占め，協働的に研究活動が行われている。グループに所属するそれぞれの生徒が，自身の役割を果たし協力しながら研究を進めた班が多かった。しかし，主体的に取り組む生徒が多い一方で，グループ内での互いの役割について共通理解が構築できず，研究そのものが滞ってしまうグループもあった。そのようなグループでは，テーマの設定段階で意見がまとまらず互いに納得感を持って課題を取り上げられなかった点や，リーダーシップを発揮する生徒が班内におらず班員全員が受動的にスタートしてしまった点等が特徴としてあげられる。１年次の地域社会研究から段階的に準備してきているが，課題研究に取り組む１人１人が，その意義や有用性を考え，しっかりと取り組めるようさらなる指導の工夫が必要だと感じている。

（３）Ｋ－プロジェクトについて

総合的な学習の時間を中心に，キャリア教育や志教育について３年間を通して連動性を持たせながら指導する根本方針が本校における「Ｋ－プロジェクト」である。１学年は「社会の一員としてどう生きるかを考える」，２学年は「『志望』進路を思い描く」，３学年では「『強い志』を持って前進する」をテ

ーマに，文理選択や志望理由書と単発的に行うのではなく，３年間でそれぞれの進路目標，将来の計画を考えさせ，実行できる準備を行っている。この取り組みは総合的な学習の時間のみならず，学校行事，課題研究，ＬＨＲ，普段の授業と横断的に関わらせることによって，自分のあるべき姿と志を主体的に見出す取り組みとして学校全体で取り組んでいる。各学年の実情に応じて年々ブラッシュアップを重ね，１時間の取り組みで多くを感じ，学べるよう工夫されてきた。今後は，総合的な探求の時間として引き継ぎ，(1)のように課題に取り組みながら，自身の進路，人生を考えさせる活動へと徐々に改良していきたい。

５－５　類型選択指導

本校では２年次より類型に分かれたクラス編成に基づいて授業が展開される。これまでの人文類型，理数類型に加え，平成２８年度入学生からは，文理の枠を超えた探求的な学習活動に重点をおく創造類型が設置された。今年の３月には創造類型から初めての卒業生が輩出されることとなる。

気仙沼西高等学校との統合初年度となる平成３０年度の入学生は，人文類型３クラス，理数類型２クラス，創造類型１クラスの計６クラス編成を計画していた。今年度の１学年の生徒の類型選択が確定するまでの大まかな流れは次のとおりである。

○６月１２日：類型選択ガイダンス（各類型の特徴，選択後の進路，科目選択の際の留意点など）
○６月２８日：類型選択調査第１次締め切り
○７月上旬：類型選択に関する担任との面談
○７月下旬：三者面談での生徒，保護者との面談
○９月２６日：課題研究Ⅰ中間発表会・課題研究Ⅱ最終発表会見学
○１１月１日：類型選択調査第２次締め切り（最終決定）

類型選択では，創造類型の研究活動により身につく資質・能力がこれからの社会でどのような形で必要となるのかをイメージさせ，これからの時代における文理融合の思考力や人と関わる力の重要性を説明し，創造類型における研究活動の有意性を生徒に伝えてきた。最終調査では，人文類型１２５名，理数類型７８名，創造類型３８名となり，バランスのとれたクラス編成を行える準備を整えることができた。

生徒が最適な類型選択を行うためには，自己の将来や特性について十分に考える機会を与える必要がある。生徒が安易な選択をしないよう，総合的な学習の時間と上手に関連づけ，キャリア教育の一環として指導を行かなければならない。

５－６　ボランティア関係

（１）目的

様々な活動や体験を通して，地域の実状を知り，その上で頑張る人々と交流を持つことで改めて「気仙沼の良さ」や「気仙沼に生きる人々の輝き」を見つめ，気仙沼からグローバルな社会貢献をしていけるような人材を育成する。

（２）内容

①花のみち４５植栽ボランティア

日　時：令和元年６月２３日（日）

場　所：国道４５号線沿い「気仙沼高校シンボル花壇」

参加者：各クラスの社会福祉委員，社会福祉部，有志の生徒・教員

詳　細：国道４５号線沿いにある「気仙沼高校シンボル花壇」に花の苗を植え，気仙沼の美化・緑化に協力する。

②春季　緑の羽根募金

　秋季　赤い羽根募金・復十字募金

日　時：４月中旬１週間

　　１１月初旬１週間

参加者：全校生徒・全職員

詳　細：緑化や街作り・結核の撲滅運動など，世の中を良くする・明るくする活動に少しでも参加することで，社会の一員としての責任や帰属意識を学ぶ。

③夏祭り運営ボランティア

・赤岩児童館　夏祭り

　日　時：令和元年７月２０日（土）８：３０～１５：００

　場　所：赤岩児童館　参加者：６名

・鹿折児童館夏祭り

　日　時：令和元年８月１１日（日）９：００～１５：００

　場　所：鹿折児童館　参加者：５名

・ハイムメアーズ　夏祭り

　日　時：令和元年８月１１日（日）１５：３０～１７：００

　場　所：介護老人保健施設　ハイムメアーズ　参加者：２名（３年２名）

・外国人，地域住民との交流会ボランティア

　日　時：令和元年９月８日（日）１０：３０～１６：００

　場　所：PIER７　参加者：１０名

・ふぁみりあ託児ボランティア

　日　時：令和元年１０月２２日（火）１０：３０～１４：３０

　場　所：市民福祉センター　やすらぎ　参加者：８名

　詳　細：介護施設や気仙沼地域の児童館における夏祭り運営ボランティア（当日のみ）を行い，施設の様子や利用者と触れ合うことで福祉に関する知識，幼児教育や地域のニーズを把握し，社会に貢献する気持ちを養う。

（３）結果

１年や３年で結果が出るものではないので，１つひとつのイベントに参加した生徒が「何か」を感じられたら，「志」の種がまかれたという事になるのだと思う。小さな事でも「ボランティア」であり，ささいな事でも「志」である。自発的に活動できる生徒が今はまだいないので，ゆくゆくは自発的に社会貢献が出来る生徒が現れることを期待する。

５－７　読書啓発指導

（１）目的

　読書をとおして，生徒が主体的に学びを深められるように，言語力や理解力，想像力を培い，豊かな人間性，教養，創造力等をはぐくむこと。

（２）内容

・図書委員会では読書週間のポスターを作成し，図書館から本を借りた生徒に手作りの栞を贈呈し読書推進を呼びかけた。
・気仙沼図書館から定期的に本を借りて，普通教室廊下の空いているロッカーに『出張　気仙沼図書館』を配置し，本を身近に置き，利用してもらうようにした。
・気高祭では図書委員のおすすめの本と作成したＰＯＰを展示し，「ＰＯＰ作品コンテスト」を実施し，一般来校者に投票してもらった。ステージ発表では絵本「おおきな木」を図書委員がスライドに合わせて朗読し，読書に興味を持ってもらえるように全校生徒に分かりやすく発表した。
・１年生地域社会研究・２年課題研究に必要と予想されるものを購入し，語学力向上のための英語図書・検定用参考書などを購入し利用を促した。

（３）結果

・図書委員の気高祭でのＰＯＰコンテスト，絵本の朗読，図書委員手作りの栞配布などの読書啓発活動により読書週間や，長期休業中以外も貸し出される本も増えてきている。
・気仙沼図書館から９０冊の本を借り２ヶ月毎に違う本に入れ替えてもらう活動は，本校の図書館では所蔵していない本とも出会うことができ，生徒も興味深く利用している。
・利用する本の分野も「文学」以外の「総記」「哲学」（学び方，研究の手法，物事のとらえ方）や「社会科学」「自然科学」「観光学」「地域学」（現在の日本・地域の問題，気仙沼に人を呼び込むには，人口減少対策など）の多くの分野が地域社会研究・課題研究の参考図書として多く利用された。よって生徒からは「人口問題」「地元復興」「ジェンダー」「教育」分野の本がリクエストされ，購入した。
・英語検定関係参考書や英会話・海外留学関係等の図書を購入し，生徒も興味を持って利用した。
・図書館利用の利点をつかみ効果的に読書に取り組む生徒が増加している。

地域連携

【気仙沼市との連携】

６－１　観光客へのアンケート実施にともなう調査員としての協力

（１）日時と参加者（主催：気仙沼市総務部観光課）
　　第１回　　５月２６日（日）　１０：００～１５：００　２年生４名参加
　　第２回　　７月２８日（日）　１０：００～１５：００　２年生４名参加
　　第３回　１０月２０日（日）　１０：００～１５：００　２年生４名参加
　　第４回　１２月１５日（日）　１０：００～１５：００　２年生４名参加
（２）場　所：海の市
（３）内　容：気仙沼市総務部観光課が実施している観光客へのアンケート調査であり，今年度で４年目の連携事業となる。今年も，５月から参加させていただき，研究の情報収集に役立てられるようにした。次年度に向けて，集計したデータを更に有効に活用できるよう本校へのフィードバックの時期や方法について観光課と相談していきたい。

６－２　気仙沼の高校生マイプロジェクトアワードへの参加

（１）主　催：気仙沼市（企画・運営：一般社団法人まるオフィス）
　　共　催：気仙沼市教育委員会
　　協　力：気仙沼の高校生マイプロジェクトアワード実行委員会（構成団体：認定ＮＰＯ法人底上げ，一般社団法人まるオフィス，一般社団法人 i.club）
（２）参加者：１年生１名，２年生１１名
（３）日　時：　８月　８日（木）～　８月１０日（土）　スタートアップ合宿（場所：本吉）
　　１０月２０日（日）　中間報告会（会場：気仙沼市まち・ひと・しごと交流プラザ）
　　１２月２２日（日）　最終発表会（会場：気仙沼市まち・ひと・しごと交流プラザ）
（４）内　容：「気仙沼の高校生マイプロジェクトアワード 2019」は「気仙沼市担い手育成支援事業」のひとつであり，気仙沼市内の高校生が，地域課題を解決するためのプロジェクトを大人の協力者（伴走者）とともに作成・実行し，その成果を市長や地域の方々に発表する５か月間のプログラムである。昨年は本校から２５名が参加。今年はプロジェクト実行者として１２名の生徒が参加した。市長賞を受賞した１名の他，本校生３名が２月に行われた「高校生マイプロジェクトアワード」東北大会に出場し，気仙沼の魅力をゲームで発信している男子生徒２名が全国大会に出場することとなった。課題解決型学習の実践の場としてとても有益なイベントであり，今後も積極的な参加を促すなど活用していきたい。

【小中学校との連携】

６－３　リトルティーチャー

（１）日　時：令和元年８月８日（木）・９日（金）
（２）場　所：気仙沼高校
（３）参加者：本校生　１９名　　九条小学校　１７名　　条南中学校　３２名
（４）内　容：九条小学校・条南中学校と連携して，高校生が小中学校の学習支援事業を実施した。本校生は教員志望の生徒を中心として参加者を募集した。本校生にとって，地域とかかわる視点から，社会貢献の実際を学ぶ機会となった。

６－４　条南中学校生徒へのポスター作成支援・進路講話

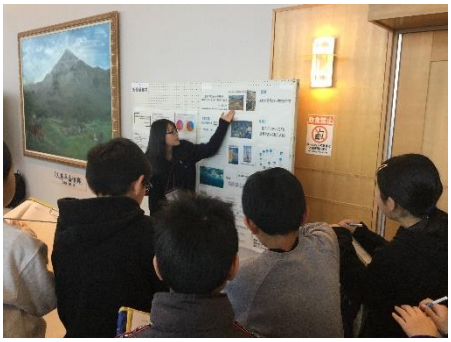
（1）日　時：令和元年１０月１６日（水）
（2）場　所：条南中学校
（3）参加者：本校２年生　２０名　　条南中学校生徒
（4）内　容：昨年度の「地域社会研究」で優秀賞・優良賞となった１０グループの２０名が，条南中学校を訪れ，文化祭でポスター発表をする中学生に対して発表のデモンストレーションとポスター制作の支援，高校進学に向けて取り組まなければならないことについての講話を行った。

６－５　九条小学校児童へのプログラミング教室

（1）日　時：令和元年１０月２３日（火）
（2）場　所：気仙沼高校　コンピュータ室
（3）参加者：気仙沼高校情報処理部員　九条小学校５年生
（4）内　容：プログラミングソフト「スクラッチ」を使った簡単なプログラミング
　　１時間目　　「スクラッチ」の基本的操作の説明
　　２時間目　　簡単なゲーム制作
（5）指導上のポイント：
・授業の説明をする生徒が１名。
・その他、小学生２～４名に対し高校生が１名担当する。
・プロジェクターおよびＰＣ室の学習支援システムを利用し小学生使用の画面に提示しながら進める。
・全体の説明は簡潔にし、小学生の自主性を導きそのサポートを高校生が行う。
・小学生がオリジナリティを出せるところに時間をかける。
・自分で作ったゲームで遊ぶ時間を取る。

６－６　海洋教育こどもサミット

（1）日　時：令和元年１１月２９日（金）　１３：００～１６：３０
（2）場　所：洋野町民文化会館
（3）参加者：本校２年生２名　市内小中学校（海洋教育推進校）
（4）内　容：海洋教育をＥＳＤの軸として取り組んでいる小中高が一堂に会するサミットで，気仙沼市や岩手県洋野町で行われている。平成２８年の第１回から本校生が研究成果の発表，サミットの司会や小中学校の話し合いのファシリテーターとして参加している。



６－７　気仙沼市防災フォーラム

（1）日　時：令和２年１月２２日（水）　１０：３０～１６：３０
（2）場　所：気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館
（3）参加者：本校３年生１名　市内中学校代表生徒　一般市民
（4）内　容：気仙沼市と市教育委員会が主催，東北大学災害科学国際研究所と気仙沼ＥＳＤ／ＲＣＥ推進委員会が共催しているフォーラム。防災について研究している２名の生徒が研究成果を発表した。

６－８　教職員間連携

○　本校での研修会への参加
本校で研修会や発表会を実施する際，市内小中学校へも案内を送付し，参加を促してきた。詳細は「２－３　授業改善の体制づくり・教員研修」及び「３－１　英語科の授業改善」を参照。

【地域の人材との交流】

６－９　フィールドワーク・アドバイザーの委嘱

（1）ねらい
学校が設定しているフィールドワーク以外でも，自主的に課題研究に関する情報を関係者から得ようとする生徒のために，フィールドワーク・アドバイザーを委嘱し，地元企業や役所の方を紹介してもらうと同時に，探究活動への助言をもらう。
（2）アドバイザー
認定ＮＰＯ法人「底上げ」理事　成宮崇史　氏
平成２３年に東日本大震災のボランティアとして宮城県気仙沼市に入り，そのままＮＰＯ法人「底上げ」を立ち上げ移住する。地域に根付いて活動を展開していく中で，気仙沼，南三陸の高

校生が地域課題に対して主体的なプロジェクトの企画・運営をサポートしている。

一般社団法人「まるオフィス」代表理事　加藤拓馬　氏
東日本大震災を機に気仙沼に移住し，平成２４年まちづくりサークル「からくわ丸」を設立。平成２５～２８年に気仙沼市地域支援員として気仙沼市の様々な事業を委託され，人材育成プログラムや移住者コーディネートを展開。平成２７年一般社団法人まるオフィスを起業。

（３）内容
放課後の時間帯に学校にお越しいただき，以下の内容で相談会を実施
①課題研究において，必要する情報が得られるフィールドワーク先を紹介
②研究成果の広報活動や実践に対する助言や協力
③県内外のＮＰＯ法人や企業などの連携・活用方法のアドバイス
相談会実施日
①　５月２０日（月）　　５名参加
②　５月２３日（木）　　９名参加
③　６月２７日（木）　１２名参加
④　７月　３日（水）　　５名参加
⑤　７月　９日（火）　　４名参加
⑥１１月　６日（水）　　３名参加
⑦１１月１３日（水）　　２名参加
⑧１２月１４日（土）※課題研究ⅠのフィールドワークⅢとして実施（１０名参加）
①～⑦は１６：１０～１７：３０で実施。⑧は８：３０～１１：００で実施。

（４）成果
今年度も昨年度同様５月から相談会を実施。「課題研究Ⅰ」に取り組む２年創造類型の生徒が中心であったが，１年生や３年生も参加していた。また，アドバイザーには各発表会にも参加していただき，生徒の発表に対し有益な助言をいただくなど，１年を通して生徒の研究活動に寄与していただいた。

国内交流

７－１　ＳＧＨにかかわる連携

今年度は１３の発表会や研修会に９７名が発表者，または見学者として参加した。こうした機会を通して，生徒たちは多くの気づきを得て，研究のさらなる深化につながった。次年度以降も積極的な参加を促していきたい。

表１－１　参加した発表会や研修会

月	日	発表会・研修会	場所	参加数	内容
6	23	きて，みて，さわって，たのしめる『環境マルシェ 2019』～持続可能な開発目標～	サンモール一番町商店街アーケード内（仙台）	4	SDGs をテーマとした課題研究Ⅱのポスター発表
8	8	「地球こどもサミット 2019」×「海と日本 PROJECT」	衆議院第一議員会館	1	海洋プラスチックごみについて講話を傍聴，生徒交流会
9	10 11	「世界津波の日」2019 高校生サミット in 北海道	北海道立総合体育センター「北海きたえーる」	3	国内外の高校生に向けて震災の教訓伝承に関するプレゼンテーション
10	6	全国鳴砂サミット	気仙沼市	8	自然科学部員による「鳴砂」に関する口頭発表
11	9	仙台三高グローカルサイエンスフェスタ	宮城県仙台第三高等学校	31	英語・日本語での研究発表（口頭・ポスター）および東北大学留学生や県内 SSH・SGH 校との交流
11	29	第５回海洋教育こどもサミット in ひろの	洋野町民文化会館（岩手県）	2	「海洋教育」の研究についてポスターセッション
12	14	令和元年度みやぎのこども未来博～学びの術～	宮城県総合教育センター	3	協働ワークショップ，ポスター発表
12	22	2019 年度 SGH 全国高校生フォーラム	東京国際フォーラム	4	英語でのポスター発表，全国 SGH 校の発表見学
12	22	気仙沼の高校生マイプロジェクトアワード 2019	まち・ひと・しごと交流プラザ	25	地方創生に向けてアクションプランを発表
1	12	「ダメだっちゃ温暖化」宮城県民会議	せんだいメディアテーク	1	温暖化防止に関する研究についてポスター発表
1	22	第５回気仙沼市防災フォーラム	気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館	2	防災研究の成果を発表
2	4	黎明サイフェンスフェスティバル	宮城県古川黎明高等学校	7	研究内容について口頭発表，ポスター発表
2	15	第７回全国海洋教育サミット	東京大学	6	海洋教育を実践する小・中・高校生と意見交換

また，今年度は３学年創造類型の生徒全員が外部コンテストに研究または作品を出品した。自分の活動を外部に表現して成果を広めることができた。発表したい他者がいるからこそ，課題研究および探究活動を深めていけると考えられる。

表１－２　応募コンテスト一覧

名称	主催	人数	備考
国際ユース作文コンテスト	公益財団法人 五井平和財団	5	
全国高等学校デザイン選手権大会	東北芸術工科大学	14	入選
絵本翻訳コンクール	神戸女子学院大学	5	
３６℃の言葉	日本福祉大学，朝日新聞社	3	第４分野「世の中のどうして？部門」最優秀賞
NRI 学生小論文コンテスト	野村総研	3	
全国高等学校ビジネスアイディア甲子園	大阪商科大学	2	
環境マルシェ２０１９	尚絅学院大学	4	学長賞

７－２　震災交流

（１）目的

ダイレクトラーニング・アプローチの一つとして，県外の高校生を本校に招き直接交流することで，発信力を含めたコミュニケーション力を高めるとともに地域社会に対する眼を育む。具体的には，生徒会執行部の生徒を中心に，東日本大震災直後の気仙沼市および本校における学校生活の実状や，その後の復興の過程，および地域社会研究を通して学んだ地域産業の課題と復興の現状についてまとめ，発表する。そうすることで，地域の良さや強みを多面的に理解し発信する力を養うことができる。また，被災地支援や防災について他の地域の高校生と考えることで，多様性や未来思考力を身につけるとともに，積極的にコミュニケーションをとる力も育むことができ，プログラムを効果的に進めるための一助となると考える。

（２）実施概要

	年	月	日	時間	交流相手	対象生徒	内容	場所
①	1	7	15	9:30～12:30	がんばろう！つばさネットワーク（大阪府立北摂つばさ高等学校他，生徒 41 名）	生徒会執行部（11 名） 軟式野球部（20 名） 社会福祉部（10 名）	震災について考えるポスターセッション・発表	気仙沼高校
②	1	7	30	9:00～13:30	富山県立魚津高等学校（生徒 31 名）	生徒会執行部（8 名） 社会福祉部（10 名）	交流会，市内フィールドワーク（斉吉商店）	気仙沼高校
③	1	8	7	9:30～12:00	向上高等学校（神奈川県）（生徒 40 名）	生徒会執行部（12 名） 生活防災委員（10 名） 社会福祉部（10 名）	震災 PPT，震災と防災について考えるグループワーク・発表	気仙沼高校
④	2	1	6	14:00～17:00	北海道滝川高等学校（生徒 8 名）	生徒会執行部（10 名）	両校の SSH,SGH の取組 PPT 発表。交流会	気仙沼高校

（３）主な実施内容

①震災パワーポイント発表

東日本大震災直後の気仙沼市および本校における学校生活の実状や，その後の復興状況，および地域社会研究を通して学んだ地域産業の課題と復興の現状などについて，パワーポイントにまとめそれを発表した。震災直後の気仙沼市の被災状況や，全国から多大なる支援をいただき何とか高校生活を取り戻してきた当時の本校生徒の様子については，卒業した生徒会執行部生徒が作成したものを利用させてもらった。そこに新たにその後の復興の様子が分かるような写真や，地域社会研究・課題研究Ｉを通して学んだことを織り込み発表した。

②震災と防災について考えるグループワーク・発表

グループに分かれ「大都市に大地震が発生した際どう行動するか」「適切な避難所運営とは」など，震災や防災にまつわるテーマを決め，①のスライド発表や本校生徒の震災時の体験などを参考にし，災害が起こった場合にどのような被害があるかシミュレーションして意見を出し合い，それをポスターにまとめて発表した。

防災教育

８－１　春季防災訓練

（１）目的

①地震と火災の同時発生時における基本対応訓練

②基本対応に必要な知識の理解

③避難方法経路の確認

（２）内容

日　時：６月１１日（火）７校時

１４：５０～１５：１５　避難に必要な知識を整理するための防災学習（各クラス）

防災テスト（７分）　テスト解説（１０分）

１５：２０～１５：３５　避難訓練（全校一斉）

（３）評価

避難訓練に先立ち，今年度は，基本対応に必要な知識理解のために防災テストとその解説からなる防災学習の時間を設けた。これにより避難の際に留意すべき点を全校生徒で共有した上で避難訓練を実施できたことは有意義であった。

８－２　職員防災研修

（１）目的

①東日本大震災について理解を深める

②本校の防災体制を理解する

③災害時の役割を理解する

④本校の防災教育のねらいを理解する

⑤防災副読本の活用について考える

⑥秋季防災訓練の企画について考える

写真　職員防災研修の様子

（２）内容

日　時：６月１３日（木）放課後

Ⅰ　導入（５分）

Ⅱ　東日本大震災を振り返って（３０分）

（１）校長先生（２）髙橋健司先生

Ⅲ　本校の防災体制・防災教育についての説明（２０分）

Ⅳ　秋季防災訓練の持ち方についてのグループ討議（２０分）

「秋季防災訓練では，二次緊急対応（避難所設営など）に関わる訓練及び研修を班ごとに行いたいと考えていますが，班ごとに生徒と教員でどのような訓練又は研修を行えばよいでしょうか。その企画を各班で話し合ってください。」

Ⅴ　まとめ（１０分）

（３）評価

東日本大震災から９年，当時の状況を本校で経験した職員の数も少なくなり，校内における震災の風化も懸念される状況にあり，当時の状況を知る教員からの講話は，大変有意義なものであった。この学びを踏まえて本校の防災体制や防災教育のねらいを共有することができた。また，秋季防災訓練では，避難所開設に係わる訓練を計画していたので，校内防災組

織の班毎に訓練の企画についての話し合いと発表を行った。職員一人一人が主体的に研修活動に参加することができた。

８－３　秋季防災訓練

（１）目的

①地震と火災の同時発生時における生徒と職員の防火知識の普及と意識の高揚を図る。

②発災後，指定避難所としての役割を全うするため避難所開設に係わる組織的対応を行う。

③非常時に的確に判断し，行動できるリーダーの育成を図る。

（２）内容

１１月８日（金）　６・７校時

地震と火事の防災に係わる避難訓練及び避難所開設に係わる訓練

①授業中に大地震に見舞われ，その後，火災が発生した状況を設定し，身の安全の確保と避難等，災害時に適確な行動を取る訓練を行う。

②発災後に避難が完了したことを前提に，その後に起こるべきことに対して組織的に対応する訓練を行う。（特に避難所の開設に係わる対応）

③訓練後，教職員と生徒へのアンケートを実施して訓練の状況や防災意識の変化について検証する。地震と火事の防災に係わる生徒避難訓練

Ⅰ　６校時：災害時組織的対応基礎（災害対策組織班毎に）

Ⅱ　６校時終了時～７校時：地震発生・火災発生・避難訓練・避難所開設訓練

１５：００	第二次災害対策本部会議 本部長，副本部長，本部員，班長 【指示事項】 ①校舎の火事は，鎮火に向かっているが，対策本部から火災状況の監視と危険箇所の確認の指示 【安全点検・消火班】【応急復旧班】グラウンドに集合 ②第二体育館に避難所設営の指示 【避難誘導班】車両整理対応。避難者誘導対応。校門前に集合 【情報班】第二体育館で受付の準備 【庶務班】第二体育館で収容整理の準備 【救護班】【衛生班】第一体育館で救護所設置。けが人への対応 【食料物資班】気仙沼市備蓄倉庫から物品搬出 ★生活防災委員避難所開設準備係　毛布を避難所に搬入
１５：０５	避難者役Ａ，Ｂコースに分かれて第二体育館へ出発
１５：１０	【消火班】消火訓練開始 【避難誘導班】自家用車の誘導訓練開始 【情報班】【庶務班】【救護班】【食料物資班】避難所開設訓練開始
１５：１５	一般避難者の車両が，次々に校内に入ってくる。徒歩避難者も多数入ってくる。一般避難者の避難所は，第二体育館と作法室（妊婦，障害者など）。併せて誘導も行う。
１５：１５	【救護班】から本部に避難所に心肺停止に陥ったケガ人がいるという報告。 AED を使った心肺蘇生を第一体育館で行う。⇒AED 使用方法の確認
１５：２３	【庶務班】から本部に一般避難者の人数の報告。

１５：２５　訓練一斉に終了	
閉会行事	司会（★生活防災委員避難評価係）
	訓練についての生徒総括（★生活防災委員避難評価係）
	指導助言（消防署員・気仙沼市危機管理課）
	講評（教頭）・諸連絡

（３）評価

避難所開設訓練では，職員と生徒の協働による災害対策組織により，班毎の業務訓練を行った。班活動に参加しない生徒は，避難者役として訓練に参加した。避難者がいる訓練では，想定していなかった事態が発生し今後の改善につなげる。また，消防署員と市の危機管理課の助言も大いに参考になった。今回の訓練を通じて，組織的対応についての職員，生徒の意識は大いに高まった。今回の訓練の成果については，年度末までに避難所開設マニュアルとしてまとめていく。

写真　避難訓練の様子

写真　避難所開設訓練の様子

８－４　秋季防災訓練の振り返り

（１）目的　防災訓練における各班の組織活動についての振り返りを行い，災害時の対応に活かす。

（２）内容　１１月１２日（火）

１１月８日（金）に行われた防災訓練の振り返りを職員と生徒が班毎に行う。反省事項や改善点については，全体で共有する。

（３）評価

訓練の振り返りを職員と生徒が同じ目線で行うことは，チーム防災を推進する上で有効であった。今回の振り返りについては，避難所開設マニュアル作成に活かす。

８－５　生徒防災組織の活動

（１）目的　生徒が主体となり災害対策組織をつくり，災害に対する備えを万全にすることは，防災に対する意識を高めるために必要である。さらに防災教育を通じた取り組みにより将来の地域防災の一翼を担う人材育成にもつながる。こうした学校の教育活動の成果を非常時に生徒が可能な範囲で役割を担いうるよう配慮する。こうした目的を踏まえて組織化し活動を行う。

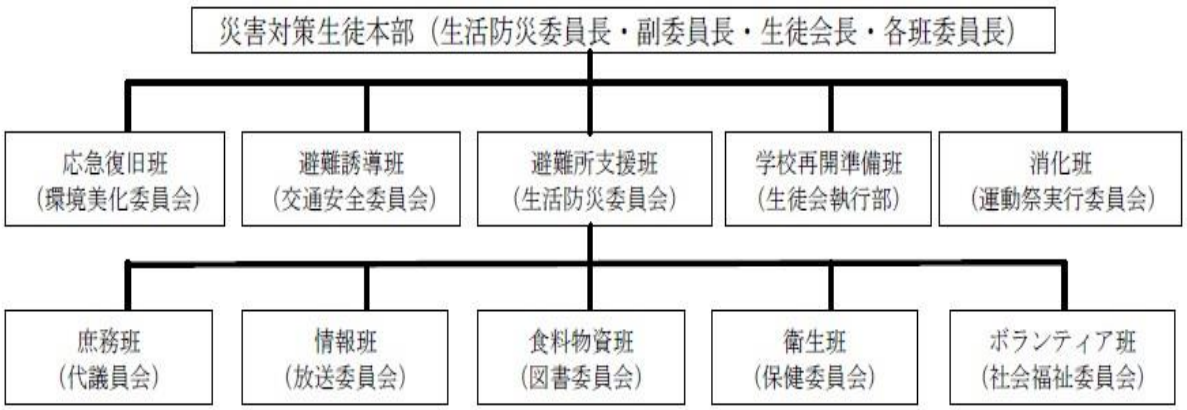


図　第二次（避難後）災害対策生徒本部組織図

（２）内容

４月１２日（金）放課後　各種委員会･･･災害対策生徒組織の説明
９月２５日（水）放課後　各種委員会･･･災害対策生徒組織の説明
１１月　８日（金）６校時　災害時組織対応基礎･･･災害時の２次対応の活動確認
　　７校時　災害時２次対応訓練（避難所開設訓練を中心に）･･･実際の活動訓練
１１月１２日（火）昼休み　秋季防災訓練の振り返り

８－６　生活防災委員の活動

（１）目的

① 本校における防災組織の中核を担う生徒組織の育成　② チーム防災のリーダーの育成

（２）内容

・避難訓練について，安全かつ効率の良い避難経路や避難方法について考える活動を行う。
・組織対応訓練のための生徒組織のあり方と運用について考える活動を行う。
・避難訓練，組織的対応訓練において生徒が中心となって活動する。
・防災訓練の評価と改善に関わる活動を行う。
・防災に関わる啓発活動を行う。

１０月２１日（月）委員会･･･秋季避難訓練に向けて
１１月　６日（水）委員会･･･秋季避難訓練に向けて
１１月　８日（金）秋季防災訓練･･･係毎活動
係：避難者説明係，初期消火立会係，初期避難誘導係，
　避難評価係，記録係，アンケート係，防災タイムズ発行係，
　避難所開設準備係，庶務係，救護班補助係
１２月２３日（月）気高防災タイムズ発行

（３）評価　秋季防災訓練の補助のために係による活動を導入した結果，委員の活動範囲が広がるとともに訓練補助が例年以上によくできていた。今回の取り組みを次年度以降も継続していきたい。

８－７　救命講習

（１）目的　災害時に命をつなぐ救急対応を学ぶ

（２）内容

１０月７日（月）～９日（水）救命講習（ＡＥＤ）　講師：気仙沼本吉消防署員　対象：１年生

１１月８日（金）　　秋季防災訓練　救護班ＡＥＤ訓練

（３）評価

講習で学んだＡＥＤの使い方を秋季防災訓練において実際の場面を想定して行うことができた。

写真右　救命講習の様子

８－８　「みやぎ防災副読本の活用」

各教科での活用を推進する必要がある。今後，クロスカリキュラム的視点による単元表の作成を再度行い，活用の拡大をはかっていく。

８－９　外部組織との連携について

気仙沼市危機管理課及び消防署員に避難訓練，避難所設営に関わる組織的対応訓練において，助言と指導を行ってもらった。本校の防災教育を一層推進するためにも外部連携を深化することが必要である。

８－１０　地域連携の取り組み

本校の防災については，地域連携が大きな課題となっている。今後，地域と連携した合同防災訓練，地域学校安全委員会の設置・運営について持続可能な活動を模索していく。

関係資料

令和元年度　第１回ＳＧＨ運営指導委員会

１　実施日　令和元年１０月２５日（金）　１０：３０～１４：００

２　場　所　宮城県気仙沼高等学校　小会議室

３　出席者（運営指導委員）

〇気仙沼高等学校ＳＧＨ事業運営指導委員

国際大学国際関係学研究科教授　信田　智人
宮城県国際化協会総括マネージャー　大泉　貴広
住友林業サステナビリティ推進室長　飯塚　優子　以上３名

〇宮城県教育委員会高校教育課

教育指導班　主幹・指導主事　高木　伸幸

〇宮城県気仙沼高等学校

校長　狩野　秀明
教頭　千葉　忠幸
主幹教諭　小松代　晃匡（研究企画部長）
主幹教諭　金谷　英人（研究企画部・１学年主任）
教諭　鈴木　悠生（研究企画部副部長・ＳＧＨ主任）
事務室長　長部　邦雄

４　内　容　（１）受付　１０：１０～１０：３０

（２）運営指導委員会　１０：３０～１２：００

①　開会
②　開会の挨拶
③　委員・出席者紹介
④　報告・議題
・今年度のＳＧＨ事業について（小松代）
・台湾研修報告（鈴木）
・質疑応答
・運営指導委員からの指導・助言
⑤　諸連絡
⑥　閉会の挨拶

（３）発表会見学　１３：００～１４：００

・２学年創造類型「課題研究Ⅰ」中間発表会の見学
・３学年創造類型「課題研究Ⅱ」最終発表会の見学

５　運営指導委員会からの指導助言

〇２年生の発表がこれまでより堂々としていて，これまでの取り組みが引き継がれていると感じた。

〇論理の飛躍がある。どうやったら改善できるかの部分がない。体裁を整えているが，結論あり

きで始めてはいないか。着眼点はいいが，原因を特定したところでリサーチしているので，思い込みの結論に向けて必要な情報を探している。

○論文のパターンは決まっているので，最初に指導が入っていると思う。年々良くなっていると思うが，問題の設定や，どうやって調べるのか，何と何を比較するのかをきちんとしてから始めないと，積み上がっても抜けている部分があるということになる。進歩はしている。今日のはどこの会社の部内のプレゼンに出しても，見かけ上は全く問題ないように感じる。

○テーマによっては，高校生の研究で何かを解決するとか求めないものもある。型にはめるということをあまり意識しなくても。フィールドワークに来るときにあらかじめ調べてきて「頭でっかち」になっていて，ある程度の仮説を持ってくるが，質問されると現場と違うということがある。あまり決めつけすぎないで現場の現状を知り，そこにある課題が分かり，このようなことができるかもしれないという程度でも十分なのでは。

○あまりにも大きな課題を設定すると，ガタガタになる。もう少し身近で絞ったものを課題とした方がいい。

○体裁だけだと形骸化していく。中身が充実するということは生徒が楽しんで研究しているということで，楽しいから突き詰めて中身が良くなっていく。本来の課題研究の目的に落とし込めれば気仙沼高校の武器になっていくのでは。

○思いもよらない答えが得られるという発見から，喜びになるという経験があるといいのだが，結論ありきで都合のいい数字だけ集めると，研究という感じにはならない。調べてみたら想像と違ったというところに面白さを感じてもらいたい。「大発見賞」みたいなプレゼンの巧拙とは別に，中身として知らなかったことを知る喜びみたいな賞があっても。

○５年を過ぎた後のことについて考えるために，次回の会議でどのプログラムにどれだけの予算をかけているかなど，予算に関する資料などを提示してくれないか。また，生徒・教員から見た「プライオリティ」はどうなのか，次回の会議で見たい。

○ＳＧＨ事業（目処が立っているものも含め５２事業）の数は妥当なのか。忙しいスケジュールの中で取り組む時間的余裕がないのでは。集中と選択も必要。実現可能なラインを考えてもいい。中国語も「指導計画」となると，正規の授業でやるのか，ということになるので，到達目標を見直してみてもいい。

○市内の定住外国人を招いての取り組みを今後も続けてもらいたい。課題研究のテーマでも市内の共生やグローバル化に関する問題が少ないようでもったいない。

令和元年度　第２回ＳＧＨ運営指導委員会

１　実施日　令和２年１月２５日（土）　１０：００～１４：３０

２　場　所　宮城県気仙沼高等学校　小会議室

３　出席者（運営指導委員）

〇気仙沼高等学校ＳＧＨ事業運営指導委員

国際大学国際関係学研究科教授　信田　智人
宮城県国際化協会総括マネージャー　大泉　貴広
住友林業サステナビリティ推進室長　飯塚　優子　以上３名

〇宮城県教育委員会高校教育課

教育指導班　主幹・指導主事　高木　伸幸

〇宮城県気仙沼高等学校

校長　狩野　秀明
教頭　千葉　忠幸
主幹教諭　小松代　晃匡（研究企画部長）
主幹教諭　金谷　英人（研究企画部・１学年主任）
教諭　鈴木　悠生（研究企画部副部長・ＳＧＨ主任）
事務室長　長部　邦雄

４　内　容　（１）日程の説明　９：４０～　９：５０
（２）発表会見学（地域社会研究・課題研究Ⅰ）　１０：００～１２：４０
【昼食・休憩】
（３）運営指導委員会　１３：１５～１４：３０

①　開会
②　開会の挨拶
③　委員・出席者紹介
④　委員長選出
⑤　報告・協議
・第１回ＳＧＨ運営指導委員会から現在までの取組について（小松代）
・４年間の取組を踏まえた次年度へ改善点について（小松代）
・質疑応答
・運営指導委員からの指導助言
⑥　諸連絡
⑦　閉会の挨拶
⑧　閉会

５　運営指導委員会からの指導助言

〇発表会について，感心したのはポスターのビジュアルが格段に進歩しているという気がした。１年生では原稿を読んでいる人が一般的に多かった。２年生はそれを克服して発表をしているが，もう一つ付け加えると，原稿を読まなくともアイコンタクトが必要になってくる。聞いている人の目を見ながら話すと，もっと色々伝わることが多いと思う。また，論理的な構成がまずい発表がいくつかあった。仮説が仮説になってない発表や，仮説を解明する，立証するかどうかの本論との論理的な展開の仕方が間違っている発表もあって，そこをもう少し頑張って欲しいと思う。

〇卒業生との交流があると良い。

〇創造類型生徒のその後が気になる。案内を送ったり，YouTube 等の利用はどうか。また，気高の宣伝は気仙沼市の宣伝にもなる。ポスターが校内に貼ってある等，ベストプラクティスをよく見ている。

〇発表については，タイトルと中身のギャップがある。テーマ設定も形式，疑問に持つ力は良いが，器用なので結論ありきのものや，小手先のテクニックに走らないようにしてほしい。

気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

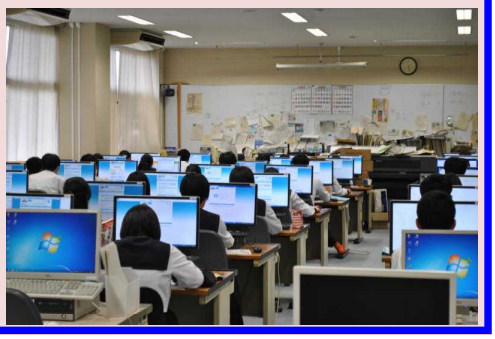
No.21 令和元年6月24日

宮城県気仙沼高等学校

1年生の活動報告

5月15日（水）の5校時から7校時と，5月22日（水）の6・7校時に，1年生「地域社会研究」において「地域理解講座」を実施しました。地域が抱える課題や現状についての理解のために，5人の講師の方に来ていただき，御講演をいただきました。

生徒達は，自分が住んでいる町を今より良くするために考え，行動していきたいと考えたようです。



また，6月19日（水），今後の研究をすすめる上で必要となる「IT活用」「図書活用」「論理的な文章」のための技法について学ぶ「テクニカル講座」を実施しました。

1年生は「地域社会研究」のグループ分けを終え，5つの講座を参考にして研究テーマを決定するために，探究活動を継続中です。

2年生創造類型の活動報告

5月14日（火），早稲田大学高等学院の2年生37名が本校を訪れ，2年生創造類型38名と交流会を実施しました。交流会では，お互いに自己紹介をしたあと，グループに分かれ「震災復興と風化」「東京一極集中」をテーマに議論しました。初対面とは思えない積極的な意見交換となり，生徒の成長を感じることのできる交流会となりました。

5月24日（金），唐桑のNPO法人「森は海の恋人」の研究所を訪問しました。首都大学東京の横山勝英教授から，研究上の大切な視点や心構えなどについて講話をいただき，乗船体験と海上調査，干潟見学と周辺散策，海洋プランクトンの採集と観察を行い，地域にある研究素材について理解を深めました。その後，それぞれが研究テーマを決定し，具体的研究の一歩を踏み出しました。

気高SGH通信

文部科学省指定 スーパーグローバルハイスクール

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

No.２２　令和元年７月２日

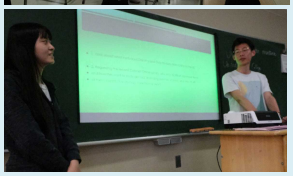
宮城県気仙沼高等学校

第４回環境マルシェに参加 ～学長賞を受賞～

６月23日(日)，尚絅学院大学と環境デザイン教育研究センター主催の第４回「環境マルシェ ～ﾃｰﾏ ＳＤＧｓ～」が仙台市一番町で開かれ，本校からは3年生4名が参加し，高校生研究発表の部で，「Society 5.0に向けた持続可能な地域ｺﾐｭﾆﾃｨへのｱｲﾃﾞｱ」という題で発表した伊藤夕妃さんが，見事，最高賞である学長賞を受賞しました。

合田学長からは「地方の定住人口が増えない中，このテーマに果敢に挑戦し，将来に向けてのメッセージ性のある提案に感銘を受けました」との講評をいただきました。

アメリカ イエール大学生と交流 ～英語による特別授業～



６月11日(火)，震災後から本校と短期留学やスカイプセッションなどで交流を続けているアメリカのイエール大学(Yale University コネチカット州)から，同大1年トニーさんと同大学院1年ドロシーさんの2人が本校を訪れ，1，2年生のクラスにおいて，海外留学やアメリカでの生活についてを自作のスライドを使用して，英語で説明を行うなど特別授業を行いました。

この交流会は，被災地の高校生留学支援などに取り組んでいるNPO法人Ashita(東京)との協力で実現したもので，今年も１０月頃からﾀﾌﾞﾚｯﾄを使ったスカイプセッションが行われる予定です。

１年 地域社会研究「テクニカル講座」～情報活用と情報収集の方法を学ぶ～

６月19日（水），１学年の「地域社会研究」の時間において，「レポート文章講座」「ＩＴ活用講座」「図書情報講座」の３つの講座を開催し，情報活用及び情報収集の方法を学びました。７月にはグループ編成後，研究テーマの絞り込みに入ります。

「レポート文章講座」では，担当教員オリジナルのワークシートを用いて，思考方法の広げ方，説得力のある意見文の書き方を学び，「ＩＴ活用講座」では，コンピュータを使用してインターネットを用いた情報検索，新聞データベース検索，論文検索の手法を学び，そして，「図書館情報講座」では，文献の探し方，校内外の蔵書検索方法，パスファインダー，レファレンス共同データベースの活用方法，参考文献リストの記載方法などを学びました。

気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

No.23 令和元年8月20日

宮城県気仙沼高等学校

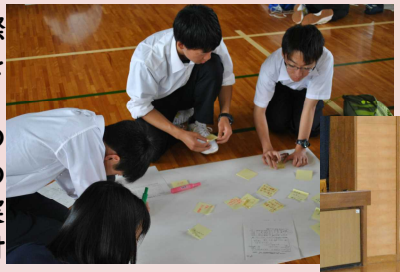
各種研修会を実施

7月12日（金）の6・7校時に，1年生全員と2年生創造類型生徒を対象に，東北大学大学院生命科学研究科の酒井聡樹准教授をお迎えし，「研究の意義や方法」「テーマ設定の工夫」などについての講演会を実施しました。生徒たちは，これから行っていく研究活動に際して大切なことを教わり，気持ちを引き締めたようです。

また，酒井先生には引き続き放課後に，本校教職員と市内小中学校の先生方を対象とした「課題研究における指導力向上研修会」でも講演いただきました。

7月17日（水）には，東北大学災害科学国際研究所から佐藤翔輔准教授をお迎えし1年生を対象に「震災・防災講演会」を行いました。

「災害とは何か」「防災と減災」「災害時の『生きる力』」等について講演をいただき，その後，可視化するための防災ワークショップを実施していただきました。講演から学んだことを付箋に書き出し，グループで話し合ってまとめていきました。



ワークショップの様子

講演する佐藤准教授

課題研究Ⅰ　フィールドワークⅡ

7月17日（水）と19日（金）に，2年生創造類型38名は2回目のフィールドワークを行いました。各自の研究テーマに関連のある宮城県内の大学を訪問し，テーマ設定や研究方法について先生方からアドバイスをいただきました。現在は，このフィールドワークで得た情報を基に研究活動に取り組んでいます。

【ご協力いただいた学校：学部等】

☆東北大学：災害科学国際研究所

☆宮城教育大学

☆宮城大学：食産業学群，事業構想学群，看護学群

☆東北工業大学：ライフデザイン学部，工学部

気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

No.24 令和元年9月3日

宮城県気仙沼高等学校

学校間交流を実施

本校では東日本大震災以降全国各地の高等学校と継続して交流活動を実施しています。生徒会執行部や部活の生徒，有志生徒たちが，意見交換や親善試合，親睦活動などで交流の輪を広げています。

つばさネットワーク（7.15）

愛知県立豊橋南高校（7・23）

富山県立魚津高校（7.30）

リトルティーチャー

８月８日（木）～９日（金），教師を志す生徒19名が九条小・条南中の児童生徒約50名に学習支援を行う「リトルティーチャー」を実施しました。

夏休み中の宿題等に取り組む小中学生の質問に応えたり分からない点を指導し，参加した生徒は，将来への志を一段と強くしたようです。

ＰＴＡ教育講演会

８月29日（木）第一体育館において，（株）ホテル佐勘の佐藤勘三郎社長を講師にお迎えし「インバウンドを取り巻く現状と地域の挑戦」のテーマで御講演をいただきました。

佐藤社長の講演は，生徒たちの地域と世界のつながりに対する探究心が触発され，今後の研究がさらに深まることが期待されるすばらしいもので，質疑応答でも多数の生徒が挙手をして発言するなど活気あふれる機会となりました。

ＳＤＧ’ｓ　各種取り組みに参加しています

「気仙沼のマイプロジェクトアワード」テーマ発表会（8.10）

「気仙沼のマイプロジェクトアワード」には本校から9名が参加しています。また，８月８日（木）には東京で行われた「地球こどもサミット®2019 × 海と日本PROJECT」に，齋藤葉月さん（2年）がOCEAN’s47 こども特使県代表として参加し，海洋プラスチック問題について参加者同士のディスカッションを行いました。

気高SGH通信

文部科学省指定 スーパーグローバルハイスクール

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

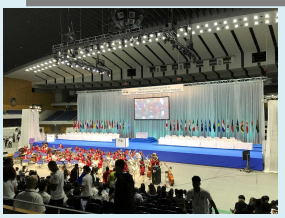
海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

No.２５ 令和元年９月２５日

宮城県気仙沼高等学校

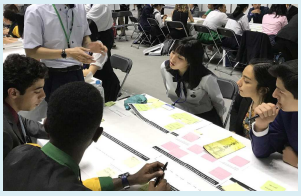
『世界津波の日 2019 高校生サミット』に参加 ～in 北海道～



9月10日(火)～11日(水)，世界各国の高校生が津波の脅威と対策について学び合う「世界津波の日2019高校生サミット」が札幌市で開かれ，本校からは３年生３名が参加しました。参加した３人は中央アメリカのエルサルバドルや太平洋中央部にあるマーシャル諸島など，国内外の高校生に，東日本大震災後の気仙沼市の状況や復興の様子をスライドを使って英語で説明しました。
３人は「情報交換を通じて，歴史や文化が異なる国々の同年代と語り合える貴重な経験でした。今後の日本社会の防災力向上に貢献したい」と感想を述べました。

世界津波の日は，2015年の国連総会で日本が提唱して142か国の全会一致で採択され，これまで，高知県，沖縄県，和歌山県で開催されてきました。

なお，このサミットの本校生徒の参加費用は，公益財団法人東日本大震災復興支援財団様よりご支援を頂戴し，実現しました。



国際文化交流会 in 気仙沼 *KESENNUMA INTERNATIONAL GATHERING*

９月８日（日），気仙沼市在住のインドネシアやベトナムの技能実習生の方々とお互いの文化を理解し，友好と親睦を深め合い，共存するコミュニティをつくるための交流会が，まち･ひと･しごとプラザで開かれ，本校からは調理部･ダンス部･社会福祉部の生徒が参加し，伝統文化や食を通して，相互理解を深め合いました。水産加工会社や縫製会社などで働く実習生と市民との良好な関係づくりにと宮城県国際企画課が主催したもので，茶道，書道などを体験した後，本校調理部が作ったカツオ餃子などを試食し，本校ダンス部によるダンスや太鼓などが披露されました。

「ベルサマ」とはインドネシア語で「いっしょに」という意味です。

気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

No.26 令和元年10月31日

宮城県気仙沼高等学校

「課題研究Ⅰ」中間発表会 & 「課題研究Ⅱ」最終発表会

10月25日（金）に，2年生創造類型「課題研究Ⅰ」中間発表会と3年生創造類型「課題研究Ⅱ」最終発表会が行われました。

2年生は，この4月からスタートした研究活動について，半年間のまとめとして，スライドを印刷したものを用いて発表しました。また，3年生は，1年半にわたる研究活動の成果を，英語ポスターにまとめ，英文での発表（英語での発表が基本です!!）を行いました。

発表後，アドバイザーの先生方（県内各大学の教授等）やご来場いただいたお客様から指導助言やご意見をいただき，活発な発表会となりました。

年度後半，2年生はこの発表会でのアドバイスや12月に行われる台湾研修での経験を生かし，1月25日（土）に実施される全体発表会に向けてさらに研究を深めていきます。

3年生はこれまでの研究活動の総仕上げとして，英語論文を作成します。

発表会の様子

ご来賓の皆様

気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

No.27 令和元年12月23日

宮城県気仙沼高等学校

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

台湾研修開催

12月1日（日）から5日（木）まで，2年4組37名が台湾台北市・台南市において「台湾研修」に参加しました。

現地の大学教授や高校生との交流会を行い，英語による研究発表や海外の歴史・文化に触れるフィールドワークの機会を持ちました。

この研修では，語学力を高め，異文化理解を通じた視点を増やし，視野を広げることができました。

台南海事高級中学交流会

主なスケジュール

1日（日）
- 移動（気仙沼ー仙台ー台北）

2日（月）
- 成功大学訪問・研究発表
- 台南海事高級中学交流会・現地調査
- 観夕平台散策

3日（火）
- 台南市内フィールドワーク
  - A 台南中心部（歴史・まちづくり）
  - B 安平地区（歴史・自然）
  - C 企業・小学校（産業・教育）
- 台北市内フィールドワーク

4日（水）
- 国立海洋博物館見学
- 九份自主研修
- 故宮博物院見学
- 忠烈祠衛兵交代式見学

5日（木）
- 移動（台北ー仙台ー気仙沼）

台湾研修のようす

研究プレゼンに挑戦(成功大学)
英語で質疑応答もできました。

台湾の学習風景
(崇明小学校)
日本との教育文化の違いに触れました。

「千と千尋の神隠し」のモデルとなった九份での研修

【参加生徒の感想】

- 台南の高校生の積極的な姿勢や，英語力の高さ，中には日本語も少しできる生徒もいることに驚かされ，敗北感を味わうと共に，早めにこの経験を出来て良かったと思う気持ちがありました。
- 普段は体験出来ない素晴らしい経験を身につけることができ，自分の色々なスキルを伸ばす，英語力を試す，視野を広げる，など様々な経験が得られました。

気高SGH通信

平成28年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

No.28 令和2年1月17日

海を素材とするグローバルリテラシー育成

～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～

宮城県気仙沼高等学校

気高生　市内・県内・全国各地の発表会で大活躍！！！

フィールドワーク　国際理解セミナー

12月14日（土），1学年「地域社会研究」，2学年創造類型「課題研究Ⅰ」の生徒たちが，市役所，県内大学，市内企業，NPO 等の協力を得てフィールドワークに臨みました。校内では地域づくり推進課の支援を受け，外国人講師の方8名をお呼びして国際理解セミナーも開催しました。

観光コンベンション協会へインタビューする1年生

みやぎのこども未来博参加

12月14日（土），名取市にある宮城県総合教育センターにて，「みやぎのこども未来博～学びの術～」が開催され，本校からは 2 学年創造類型の小野友莉亜さん，熊谷裕也くん，藤野伊織さんの3名が学校代表として参加しました。県内の小中高との情報交換で盛り上がりました。

制服の必要性について発表する藤野さん

2019 SGH 全国高校生フォーラム

12 月 22 日（日）には，東京国際フォーラムにて「全国高校生フォーラム」が開催され，参加した佐藤晃生くんが，「Why do people who live in Kesennuma feel less connection with the sea than before? What you can learn from “Kekousei”」というテーマで研究発表し，小山英介くん，西城遥翔くん，佐藤丈竜くんがディスカッションに参加しました。

晃生くんは「英語で細かいニュアンスが伝えにくいものの，気仙沼での取り組みを堂々と説明できた。課題研究の内容も全国トップレベルの高校を相手にも胸を張れると感じた」とのことでした。

参加した皆さん

気仙沼の高校生

MY PROJECT AWARD 2019

12 月 22 日（日），まち・ひと・しごと交流プラザにて，気仙沼の高校生「マイプロジェクトアワード 2019」最終発表会が開催され，気仙沼高校からは8組，12 名の生徒が参加しました。発表会では，佐々木杏姫さんが公民館を利用した世代間の交流に関するプロジェクト「TIAM」で「市長賞」を，斉藤恵梨佳さん，齋藤里圭さんが演劇に関するプロジェクトで「共感賞」を受賞しました。杏姫さんは「今までやってきたプロジェクトを知ってもらえたことが嬉しかった」と話しており，2 月 22 日（土）に，仙台で開催される東北Summitにて発表します。

「市長賞」の佐々木さん

令和元年度の教育課程

宮城県気仙沼高等学校

単位数	１　年 平成３１年度 （令和元年度） 入学生	２　年　平成３０年度入学生			３　年　平成２９年度入学生		
		人文類型	理数類型	創造類型	人文類型	理数類型	創造類型
1	国語総合 ⑤	現代文Ｂ ④	現代文Ｂ ③	現代文Ｂ ②	現代文Ｂ ③	現代文Ｂ ②	現代文Ｂ ②
2							
3			古典Ｂ ③	古典Ｂ ③	古典Ｂ ③	古典Ｂ ③	古典Ｂ ③
4							
5		古典Ｂ ④					
6	世界史Ａ ②			現代社会 ②		日史Ｂ ④ / 地理Ｂ ④ / 政治経済 ④	日史Ｂ ④ / 地理Ｂ ④ / 世史Ｂ ④
7			現代社会 ②		政治経済 ④		
8	数学Ⅰ ④			日史Ａ② / 地理Ａ②			
9		倫理 ②	日史Ａ② / 地理Ａ②				
10				数学Ⅱ ④		数学Ⅲ ⑦ / 数学探究 ⑦	数学Ⅲ ⑦ / 数学探究 ⑤
11		日史Ｂ ④ / 地理Ｂ ④	数学Ⅱ ④		世史Ｂ ④ / 日史Ｂ ④ / 地理Ｂ ④		
12	数学Ａ ②						
13							
14	物理基礎 ②			数学Ｂ ②			
15		数学Ⅱ ④	数学Ｂ ②		数学探究 ⑤ / 数学活用 ③ / 器楽 ③ / 素描 ③		現文Ａ②
16	生物基礎 ②			化学基礎②（１２期）			
17			化学基礎②（１２期）			化学 ④	化学 ④ / 化学 ②
18	体育 ③			化学 ②（３４期）	時事英語② / 情報処理 ②		
19		数学Ｂ ②	化学 ②（３４期）				生物 ②
20				物理 ② / 生物 ②	地学探究② / 化学基礎② / 現文Ａ②		
21	保健 ①	地学基礎 ②	物理 ② / 生物 ②			物理 ④ / 生物 ④	物理 ④ / 生物 ④ / 倫理 ②
22	音Ⅰ ② / 美Ⅰ ②			体育 ②	生物探究② / フード ② / 音Ⅱ / 美Ⅱ		
23		体育 ②	体育 ②				政経 ②
24	コミュニケーション英語Ⅰ ④			保健 ①	体育 ②		
25		保健 ①	保健 ①	コミュニケーション英語Ⅱ ④		体育 ②	体育 ②
26		コミュニケーション英語Ⅱ ④	コミュニケーション英語Ⅱ ④		コミュニケーション英語Ⅲ ⑤		
27						コミュニケーション英語Ⅲ ④	コミュニケーション英語Ⅲ ④
28	英語表現Ⅰ ②			英語表現Ⅱ ②			
29							
30	家庭基礎 ②	英語表現Ⅱ ③	英語表現Ⅱ ③	社会と情報①	英語表現Ⅱ ③	英語表現Ⅱ ③	英語表現Ⅱ ②
31				課題研究Ⅰ ②			課題研究Ⅱ①
32	社会と情報①						
33	地域社会研究①	社会と情報①	社会と情報①				
34	総合的な探究の時間①	総合的な学習の時間①	総合的な学習の時間①	総合的な学習の時間①	総合的な学習の時間①	総合的な学習の時間①	総合的な学習の時間①
35	ＬＨＲ①	ＬＨＲ①	ＬＨＲ①	ＬＨＲ①	ＬＨＲ①	ＬＨＲ①	ＬＨＲ①

平成２８年度指定
スーパーグローバルハイスクール
研究開発実施報告書　第４年次

令和２年３月２３日　発行

学校名　宮城県気仙沼高等学校

代表者　校長　狩野　秀明

所在地　〒988-0051
宮城県気仙沼市常楽 130 番地

電　話　０２２６－２４－３４００
ＦＡＸ　０２２６－２４－３４０８